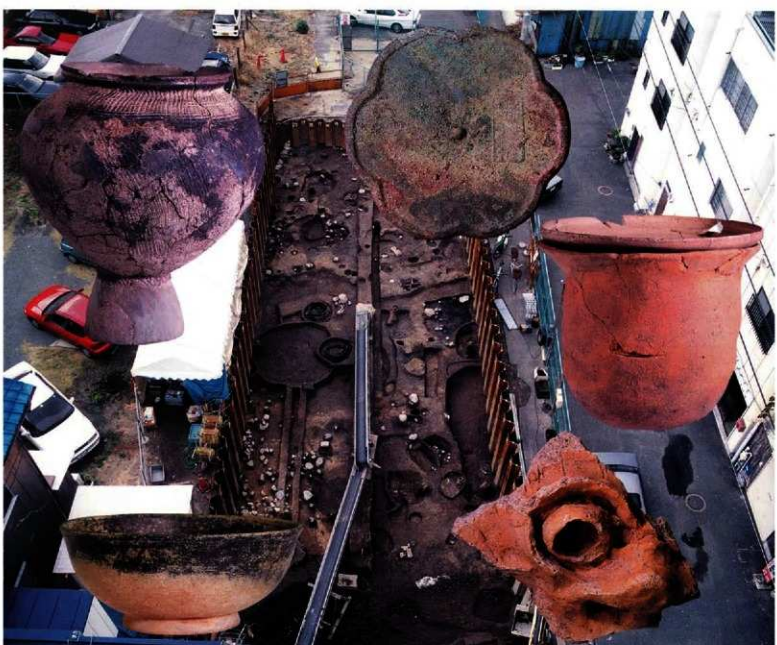
博多80

―御供所疎開跡地道路関係埋蔵文化財調査報告書―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第706集



2002

福岡市教育委員会

博多80

―御供所疎開跡地道路関係埋蔵文化財調査報告書―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第706集

調査番号　9752・9778・9952
遺跡略号　HKT－102・107・120

2002

福岡市教育委員会

107次調査104号遺構出土陶製経筒

102次288号遺構出土青白磁小鉢

102次調査255号遺構出土古瀬戸卸皿

107次調査159号遺構出土黒色土器椀

120次調査B区100号・363号遺構出土
青白磁印花文合子蓋

120次調査A区包含層出土元青花玉壺春片

102次調査２面下包含層出土元青花大皿片

120次調査A区１面下包含層出土石硯

120次調査B区071号遺構出土石硯

120次B区１面下包含層出土白磁印花文蓋

120次調査B区066・072・412・360・372号遺構出土青磁花生

120次調査B区451号遺構出土金箔漆器皿

102次調査4面包含層出土青磁小鉢

120次調査A区包含層出土黒褐釉陶器瓶

107次調査171号遺構出土ガラス片

120次A区374号遺構出土鬼瓦片

序

福岡市博多区の北側、ＪＲ博多駅から博多港にかけての都心部の地下には、博多遺跡群が眠っています。博多遺跡群は、古代から中世を通じて、東アジア、とりわけ中国・朝鮮との貿易で繁栄した、都市遺跡です。政治性の希薄な、商業的かつ国際的な都市という点では、わが国では希有な遺跡であり、アジアの拠点都市をめざす現在の福岡市の原点と言うこともできるでしょう。

御供所疎開跡地道路は、都心部の渋滞を緩和するバイパス道路として計画されたもので、同時に古くからの町屋地区である御供所校区を活性化する生活道路としての期待も負っていました。

福岡市教育委員会では平成９年から 平成11年にかけて道路新設部分について発掘調査を実施してまいりました。本報告書は、その結果を報告するものです。

本書が市民の皆様の文化財に対するご理解を深めるだけでなく、学術研究の分野で広く貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでの多くの方々のご協力にたいし、心から謝意を表すものです。

平成14年３月29日

福岡市教育委員会
教育長　生田征生

例　　言

1．本章は、御供所疎開跡地道路新設に先立って、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した博多遺跡群第102次調査・107次調査・120次調査（福岡市博多区上呉服町）の概要報告書である。
2．本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3．本章に使用した遺構実測図は、大庭康時、本田浩二郎、阿部泰之、佐藤信、大浜菜緒、折茂由利、笹田朋孝が作成した。また、製図には、大庭・阿部・森若知子があたった。
4．本章の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準にしている。
5．本章に使用した遺物実測図は、森本朝子・井上涼子・上塘貴代子・大庭康時が作成し、森本・井上・上塘・萩尾・森若・森寿恵・陳矢哲夫・田中克子・小林義彦・大庭が製図した。
6．本調査で出土した銅銭は、大庭智子が錆落とし・判読し、拓本を作成した。
7．本章で報告する遺物については、遺構ごとに通し番号をつけて記述した。
8．本調査にかかわる遺構写真・遺物写真は、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
9．本書にかかわる遺物および記録類の整理には、今井民代・ド山慎子・萩尾朱美・森寿恵・森若知子・井上涼子があたった。
10．本報告書の記述にあたっては、備前焼については間壁忠彦氏の一連の編年、常滑焼きに関しては中野晴久氏の編年、瀬戸焼きについては藤沢良祐氏の編年、京都系土師器については伊野近富氏の編年を参考にした。
11．本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9752・9778・9952	遺跡略号	HKT-102・107・120
調査地地番	博多区上呉服町	分布地図番号	天神49
開発面積	2,625㎡	調査面積	225・120・350㎡
調査期間	1997年11月11日～1998年2月20日 1998年3月18日～1998年5月29日 1999年10月28日～2000年3月22日		

本 文 目 次

第一章 はじめに …… 1

1．調査にいたる経過 …… 1
2．発掘調査の組織と構成 …… 1
3．遺跡の立地と歴史的環境 …… 2

第二章 102次調査の報告 …… 5

1．発掘調査の方法と経過 …… 5
2．基本層序 …… 5
3．各遺構物の概要 …… 7
（1）第1面 …… 7
（2）第2面 …… 7
（3）第3面 …… 7
（4）第4面 …… 7
（5）第5面 …… 7
（6）第6面 …… 7
（7）第7面 …… 7
4．遺構と遺物 …… 15
（1）土坑 …… 15

007・008号遺構 …… 15　050号遺構 …… 16
058号遺構 …… 16　065号遺構 …… 18
110号遺構 …… 18　142号遺構 …… 21
197号遺構 …… 22　238号遺構 …… 23
255号遺構 …… 24　256号遺構 …… 29
297号遺構 …… 30　425号遺構 …… 33
455号遺構 …… 35

（2）井戸 …… 36

415号遺構 …… 36　426号遺構 …… 38
436号遺構 …… 40　456号遺構 …… 41

（3）溝状遺構 …… 42

414号遺構 …… 42　424号遺構 …… 42
427号遺構 …… 44　435号遺構 …… 46
451号遺構 …… 47　452号遺構 …… 47
457号遺構 …… 48

（4）池状遺構、庭園状遺構（不明遺構）…… 53
225号遺構 …… 53　226号遺構 …… 60
293・294・295・296号遺構 …… 61
（5）その他の出土遺物 …… 66

第三章　107次調査の概要 …… 88

1．発掘調査の方法と経過 …… 88
2．基本層序 …… 89
3．各遺構検出面の概要 …… 90
（1）第1面 …… 90
（2）第2面 …… 96
（3）第3面 …… 96
（4）第4面 …… 96
（5）第5面 …… 96
4．遺構と遺物 …… 97
A．古代以前の遺構と遺物 …… 97
（1）埋葬遺構 …… 97
159号遺構 …… 97　310号遺構 …… 99
（2）土坑 …… 101
237号遺構 …… 101　274号遺構 …… 102
280号遺構 …… 103　284号遺構 …… 104
（3）井戸 …… 105
349号遺構 …… 105
（4）溝状遺構 …… 106
246号遺構 …… 106　257号遺構 …… 107
342号遺構 …… 108
B．中世の遺構と遺物 …… 109
（1）祭祀関係遺構 …… 109
104号遺構 …… 109　171号遺構 …… 112
（2）土坑 …… 115
120号遺構 …… 115　132号遺構 …… 115
138号遺構 …… 116　276号遺構 …… 117
（3）井戸 …… 118
007号遺構 …… 118　022号遺構 …… 119
027号遺構 …… 121　309号遺構 …… 121
（4）溝状遺構 …… 122
012号遺構 …… 122　133号遺構 …… 123
253号遺構 …… 135　256号遺構 …… 136

（5）その他の遺構 …… 136
008号遺構 …… 136　014号遺構 …… 137
（6）その他の出土遺物 …… 138

第四章　120次調査A区の報告 …… 148

1．発掘調査の方法 …… 148
2．基本層序 …… 149
3．各遺構物の概要 …… 150
（1）第1面 …… 150
（2）第2面 …… 150
（3）第3面 …… 150
（4）第4面 …… 150
（5）第5面 …… 150
4．遺構と遺物 …… 155
（1）埋葬遺構 …… 155
376号遺構 …… 155
（2）土坑 …… 155
007号遺構 …… 155　008号遺構 …… 157
021号遺構 …… 157　049号遺構 …… 160
152号遺構 …… 162　179号遺構 …… 164
374号遺構 …… 165
（3）井戸 …… 169
412号遺構 …… 169
（4）溝状遺構 …… 169
122号遺構 …… 169　156号遺構 …… 171
158号遺構 …… 172　410号遺構 …… 178
（5）池状遺構・建物関連遺構 …… 180
101号遺構 …… 180　151号遺構 …… 184
408号遺構（375号遺構） …… 187
（5）その他の出土遺物 …… 193

第五章　120次調査B区の報告 …… 201

1．発掘調査の方法 …… 201
2．基本層序 …… 201
3．各遺構物の概要 …… 203
（1）第1面 …… 203

（2）第2面 …… 203
（3）第3面 …… 203
4．遺構と遺物 …… 207
（1）最下層出土人骨 …… 207
（2）礎石建物跡 …… 207
（3）土坑 …… 208
042号遺構 …… 208　056号遺構 …… 211
094号遺構 …… 213　100号遺構 …… 220
103号遺構 …… 222　133号遺構 …… 222
190号遺構 …… 224　360号遺構 …… 226
367号遺構 …… 227　390号遺構 …… 228
451号遺構 …… 229
（4）井戸 …… 229
233号遺構 …… 229　308号遺構 …… 230
324号遺構 …… 230
（5）その他の出土遺物 …… 230

第六章　まとめ …… 240

付篇　博多遺跡群第107次・120次調査出土の古代～中世人骨 …… 中橋孝博 243
博多遺跡群第102次調査出土銭貨について …… 櫻木晋一 249
福岡市博多遺跡群第102次調査出土銭貨の
誘導結合プラズマ発光分光分析法による分析 …… 咲山まどか・赤沼英男 255

第一章　はじめに

1．調査にいたる経過

福岡市博多区御供所町は、中世・近世の商都であった旧博多部のほぼ中央にあたる。近世では、聖福寺・妙楽寺・承天寺がつらなり、一区の寺町を形作っていた。この寺院群を南東から北西に縦断して道路を通す計画が立案されたのは、第二次世界大戦前にさかのぼる。博多港と博多駅とを直結する優れて軍事的な道路は、戦災からの復興に際して、都市再開発の一部として復活することとなる。そして、まず承天寺の寺域が分断されてしまった。これに反対する聖福寺と地域の識者は、根強い運動を展開し、聖福寺を国指定史跡とする事で、その中絶に成功するのである。宙に浮いた道路用地は、大陸からの引き揚げ者や強制的に日本に連れてこられ、帰国できなくなっていた中国・朝鮮の人々の居住地に当てられた。本道路が、御供所疎開跡地道路と仮称された由縁である。

その後の自動車の急激な普及による交通体系の変化は、都心の慢性的な渋滞を引き起こし、それを緩和させる迂回路として、聖福寺境内を避ける形での道路整備が、昭和60年頃から復活してきた。

ところで、旧博多部一帯の地下には、古代・中世を通じて、国際貿易港として栄えた「博多津」の遺跡が眠っており、昭和52年の福岡市営地下鉄の着工に先立つ発掘調査以来、各種開発に先立つ考古学的な発掘調査が不可欠なものになっていた。福岡市土木局東部建設二課は教育委員会埋蔵文化財課に事前審査を依頼し、埋蔵文化財課では試掘による確認調査を実施、着工にあたっては発掘調査が必要であるとの認識で協議を重ねた。その結果、平成９年度から立ち退きが終了した部分での発掘調査を開始、平成11年度で終了する事で合意を見、平成９年11月17日発掘調査に着手した。

2．発掘調査の組織と構成

調査委託	福岡市土木局東部建設二課			
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田英俊（前任）	生田征生（現任）
調査総括	同　埋蔵文化財課	課長	折尾　学（前任）	山崎純男（現任）
	同	第二係長	山口謙治（前任）	力武卓二（現任）
調査庶務	同	第一係	谷口真由美（前任）	
	文化財整備課	管理係	御手洗清　（現任）	
調査担当	同　埋蔵文化財課	第二係	大庭康時	
			本田浩二郎（第102次）・阿部泰之（第120次）	
調査補助	佐藤信（現大平村教育委員会）	大浜菜緒		
調査作業	笹田朋孝（東京大学文学部生）	北川貴洋（別府大学人文学部生）		

有田恵子　石川君子　泉本タミ子　井口正愛　岩隈史朗　江越初代　大久保五枝
大久保学　大瀬良貞哉　大庭智子　折茂由利　川崎良　倉野正明　清水明　杉山正孝
関加代子　曾根崎昭子　田中トミ子　都野浩之　永隈和代　長田嘉造　西山径子
沼田昌信　能丸勢津子　野口ミヨ　早川浩　播磨千恵子　平井武夫　福場真由美
北条こず江　宮崎タマ子　村崎祐子　森垣隆視　山内恵　吉田清　吉田昌敏

3．遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。博多遺跡群をめぐる自然地理的・史学的環境については、紙数の制約から、御愛読していただくので、福岡市教育委員会刊行の他の「博多」関係の報告書等をご参照いただきたい。本節では、御供所疎開跡地道路関係発掘調査地点の歴史的環境について略述する事にする。

本調査地点は、東は護聖院、南は瑠応庵に隣接する。護聖院は、聖福寺の開山である栄西をまつる開山堂であり、いずれも聖福寺の塔頭である。両塔頭の間には、Fig. 3に示すように近世までは、聖福寺塔頭である継光庵が存在した。今回の発掘調査地点を、Fig. 3にしたがって読むならば、第102次調査地点は金屋小路町の町屋、第107次調査地点は普賢堂下の町屋、第120次調査地点が継光庵の寺域に含まれる事になる。

なお、継光庵の開創がいつなのか、史料的に明らかではないが、山陰の大内政弘の重臣相良正任が「正任記」を記した場所として知られ、寺地が移っていないとすれば、少なくとも15世紀中頃まではさかのぼる事となる。

ところで、聖福寺に伝わる聖福寺古図（16世紀中頃）では、聖福寺の築地塀にかまれて、寺内町が描かれている。これまでの発掘調査結果では（Fig. 3）、聖福寺の前面を画する街路は、「博多」のいわばメインストリートとも呼べるもので、櫛屋町・奥堂町・御供所町あたりを斜めに横切っていた。そして、普賢堂道は、さらに延びて櫛屋町を通ってこの街路にあたり、寺中町の路地も、まっすぐに

Fig. 1　博多遺跡群位置図（1/25,000）

南西に延びて、街路に及んでいたと推定される。まさに、聖福寺古図に描かれたはしご状の街区が復元できるわけで、今回の発掘調査区一帯が聖福寺の広義の寺域内であった事はほぼ確実と言える。

宮本雅明　1991「中世後期博多聖福寺境内の都市空間形成」『建築史学』17

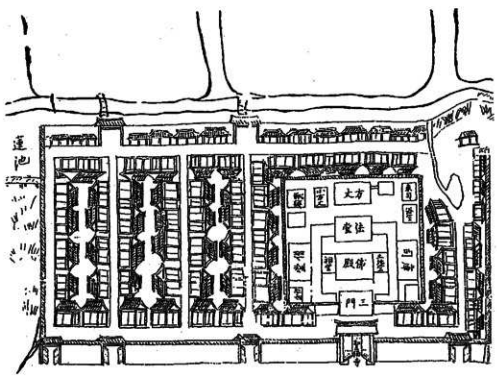


Fig. 2　聖福寺古図（宮本雅明1991による）

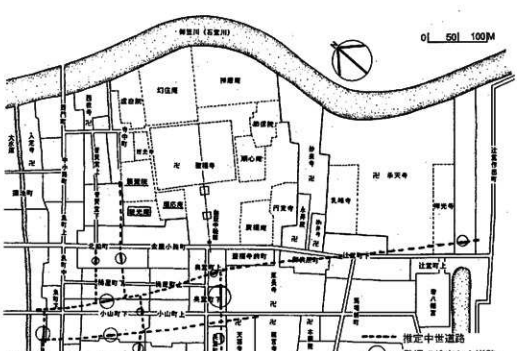


Fig. 3　文化期福博古図による聖福寺周辺（宮本雅明1991に加筆）

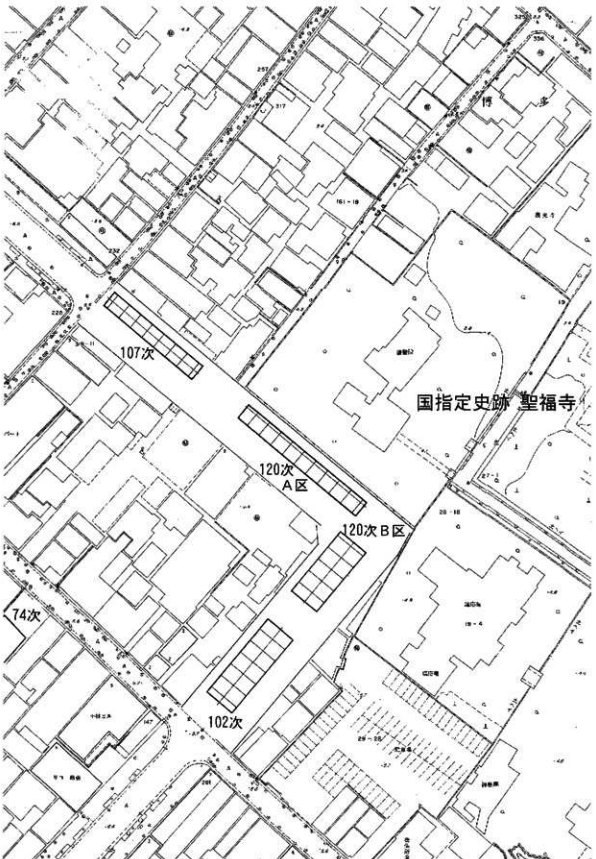


Fig. 4　発掘調査地点位置図（1/1,000）

第二章　第102次調査の概要

1．発掘調査の方法と概要

試掘調査に基づいて、現地表から1.2mまでは、表土として調査着手前にすき取りすることとなり、立ち会いのもと表土掘削・搬出を行った。

表土掘削後の面は、ほぼ全面的に整地面が広がっていた、柱穴は確認できたが顕著な遺物がなく、時期を決めがたかったため、さらに30cmほどを掘り下げ、第1面を設定した。

調査によって生じた残土はすべて搬出する事としたが、調査区が狭い割りに深く、また矢板の地中梁が入るためにベルトコンベアーが設置しにくいなど、悪条件が重なり、やむを得ず、最も道路側の一部を残土置き場として調査対象からはずし、ここに残土をためて重機で搬出する事とした。

包含層掘削にあたっては、調査区の長軸に合わせて、土層観察用のベルト・トレンチを設け、堆積状況を確認しながら、掘削の程度・遺構面の設定を行った。

2．基本層序

調査区中央に設定したトレンチ・ベルトにおける土層実測図をFig. 5に示す。

基盤は、砂の堆積であるが、砂丘砂ではなく、河口性の堆積であった。さらに、湿地的な状況を経て、人為的な埋立と考えられる砂層が堆積している（Ph. 1、第六章に後述）。

文化層の主体を占めるのは、整地層である。整地層は、砂層の厚い堆積を挟んで大きくは二段階に分かれるが、全体として大きな時期差はなく、また整地の方法も細かく均した上に数cm程度の粘土を敷くなど共通しており、一連の整地層群ととらえて良いものと思われる。

Ph. 1　基盤砂層堆積状況（東より）

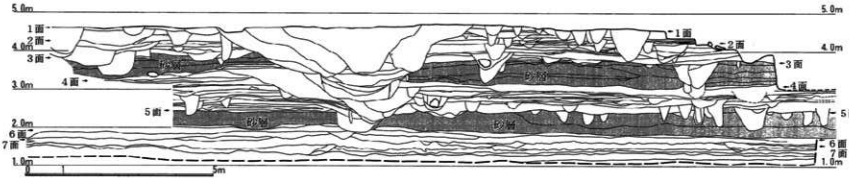
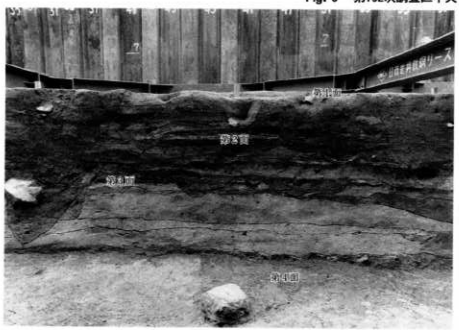


Fig. 5　第102次調査区中央ベルト土層実測図（1/100）



Ph. 2　整地層堆積状況1（東より）

Ph. 3　整地層堆積状況2（東より）

3．各遺構検出面の概要

（1）第1面

表土除去面から、30cm 程掘り下げて設定した遺構検出面で、黄灰色の粘土による整地面である。標高4.5～4.7m にあたる。

14世紀前半から現代にいたる遺構を検出している。第1面で検出した井戸は、ほとんどが近世以降に属する。110号遺構は、鍛冶滓を大量に廃棄した近世の土坑である。調査区南西部分で、きれいな白砂がひろがる範囲が認められた。第2面への掘り下げ時には、この一部に砂利を敷いた部分が確認されており、第2面で調査した庭園状遺構（225号遺構）に関連した遺構と考えられる。

（2）第2面

第1面から 30cm ほど掘り下げた標高4.2～4.4m で設定した遺構検出面である。黄灰色の粘土による整地面である。

円形の池（226号遺構）とそれに取り付く配石（225号遺構）など庭園と思われる遺構を検出している。14世紀前半として大過なかろう。

（3）第3面

標高3.9～4.0m で設定した遺構検出面で、整地砂直上の黄灰色粘土による硬化面である。

14世紀前半に属する。

（4）第4面

標高 2.9～3.1m で設定した面である。整地層中に厚く堆積する砂層の直下で、灰色嶺上質上の上面にあたる。

遺構はほとんど検出できなかったが、面としては撹乱を受けていない。14世紀初頭頃か。

（5）第5面

標高 2.4～2.7m で設定した遺構検出面である。黒色砂質上の整地面にあたる。13世紀後半。

残土搬出で調査区南端の未掘部分を掘り上げた際に、壁面観察から、東西に近い方向で走る溝状遺構（424号遺構）を確認した。本来、第3面あたりに伴うものであろう。

（6）第6面

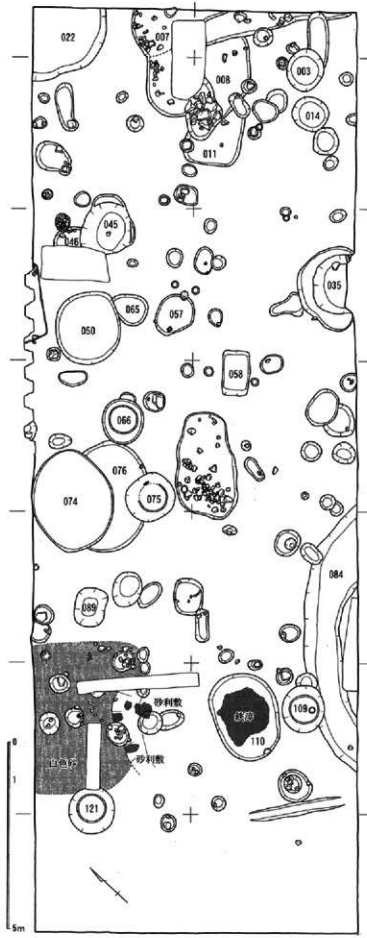
灰色砂質土層で設定した、標高1.8～1.9m の遺構検出面である。砂質土の堆積は南東から北西に傾斜しており、中央ベルト東側の溝群は、第7面ベルト西側の面に対応すると思われる。

ベルト東側は12世紀初頭、西側は12～13世紀に属する。

（7）第7面

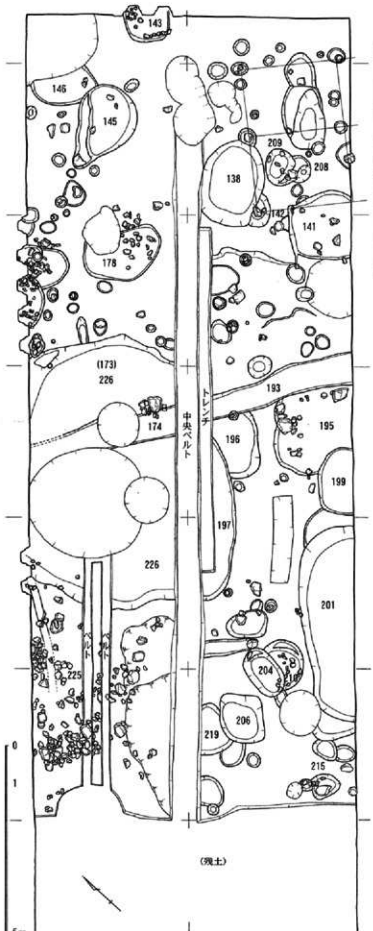
灰色砂で設定した面で、標高1.5～1.7m をはかる。12世紀代に属する。

第7面下に堆積した灰色砂中から、東海系のS字状口縁台付き甕が出土した（Ph.10）。ほぼ完形で流れ込んだものと思われる。その他、弥生時代前期末から古墳時代にかかる土器片が出土している。これらは、すべて遺構にともなわない流入遺物である。



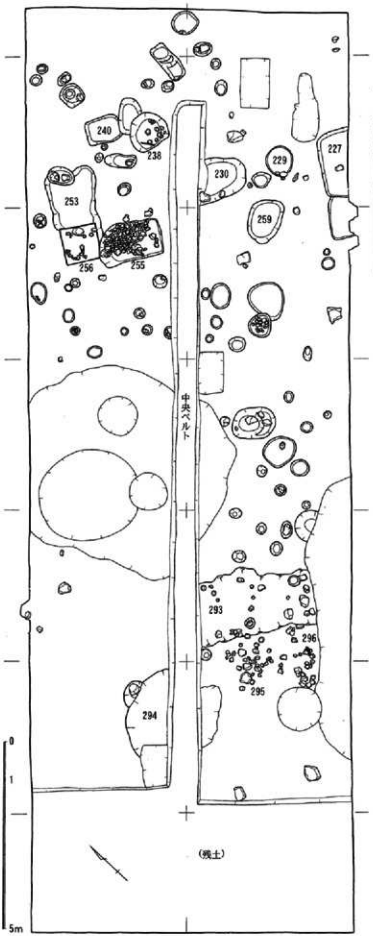
Ph. 4　第1面全景（南西より）

Fig. 6　第1面遺構全体図（1/100）



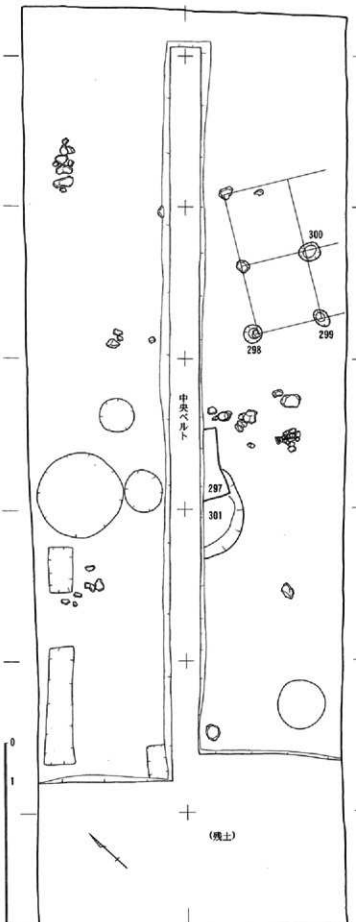
Ph. 5　第２面全景（南西より）

Fig. 7　第２面遺構全体図（1/100）



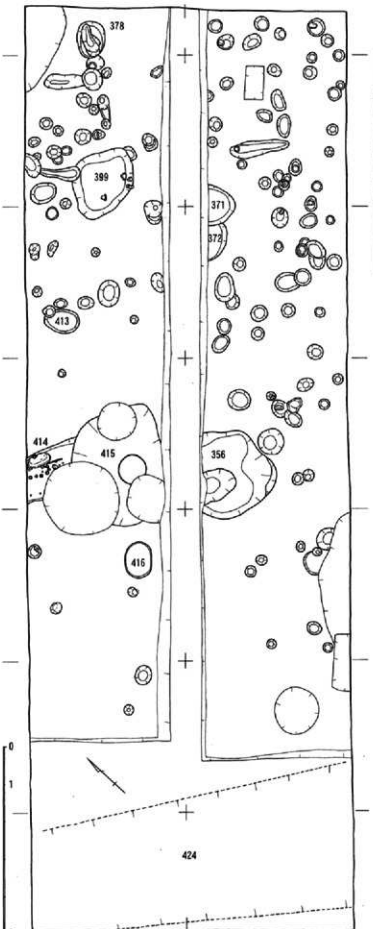
Ph. 6　第３面全景（南西より）

Fig. 8　第３面遺構全体図（1/100）



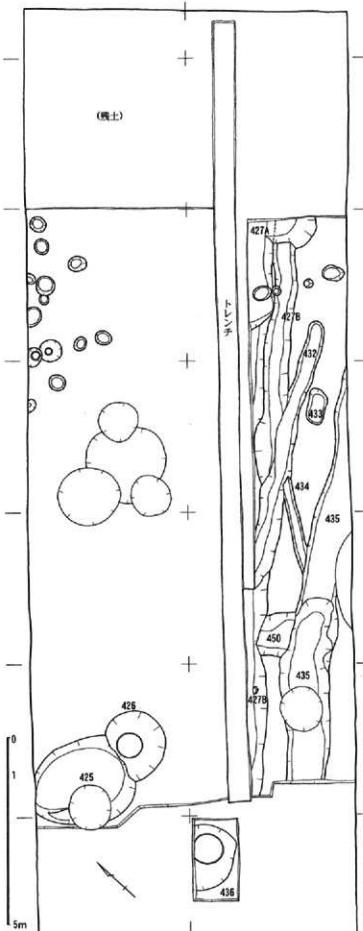
Ph. 7　第4面全景（南西より）

Fig. 9　第4面遺構全体図（1/100）



Ph. 8　第5面全景（南西より）

Fig. 10　第5面遺構全体図（1/100）



Ph. 9　第6面

Fig. 11　第6面遺構全体図（1/100）

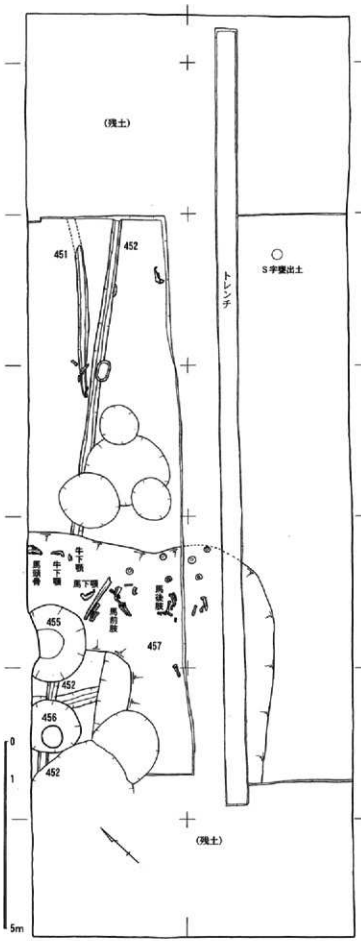


Fig. 12　第7面遺構全体図（1/100）

Ph. 10　S字状口縁台付甕出土状況(西より)

Ph. 11　第7面全景（南西より）

4．遺構と遺物

第102次調査では、柱穴・土坑・井戸・溝・庭園状遺構など457基の遺構とパンケース250箱の遺物を調査した。整理期間と報告書紙数の制約からそのすべてを詳述する事はできないので、主要な遺構と遺物について、遺構の種類別にその概要を記す。

（1）土坑

007・008号遺構

第1面北辺付近で検出した土坑である。

不整形の複数の土坑の切り合い状を呈し、007号が008号遺構を切っているが、感覚的には、大きな時期差はないものと考えている。

出土遺物の一部を、Fig.13に

Ph.12　007・008号遺構（西より）

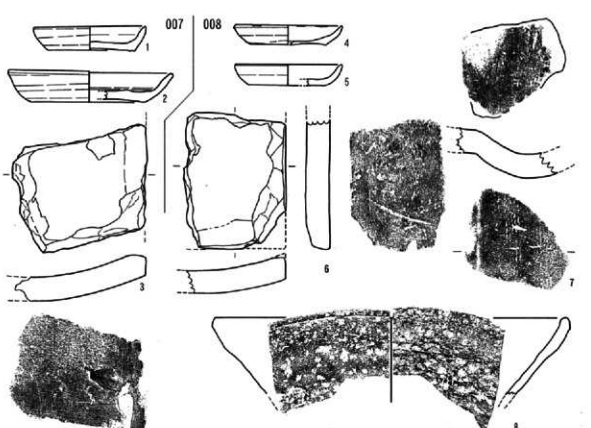


Fig.13　007・008号遺構出土遺物実測図（1/3）

示す。1～3は、007号遺構の出土遺物である。1・2は、土師器である。底部は、回転糸切りする。3は、平瓦片である。コビキ成形で、両面には離れ砂がぴっしりと付着している。このほか、青磁片・白磁片・中国陶器片・備前焼甕片などが出土している。

4～8は、008号遺構からの出土遺物である。4・5は、土師器で、底部を回転糸切りする。6・7は、瓦である。6は、コビキ成形の平瓦である。表面には、離れ砂が付着する。7は、桟瓦であろうか。屈曲の度合いが大きいようで、道具瓦の可能性も考えたい。下面には、薄く縄目が残る。8は、瓦質土器のすり鉢である。被熱により、表面ははげ落ちている。この他、青磁片・常滑焼甕片・石鍋片などが出土している。

両遺構とも、時期を確定できる遺物を欠くが、染付等が全く見られず、また、備前焼甕・常滑焼甕の口縁形状から見て、15世紀代と考えるのが妥当であろう。

050号遺構

第1面で検出した、径180～200cmをはかる大型の円形土坑である。

出土遺物の一部をFig.14に示す。1～6は、土師器である。1は小皿で、口径3.8cm、器高0.5cmを計るに過ぎない。2～5は皿である。皿には、器高が低いものと、器高が高く、途中で屈曲してまっすぐ上方に立ち上がるタイプとがある。6は、坏である。

7は、青磁碗である。端反り気味な口縁の内側に崩れた雷文帯がめぐる。8は、瀬戸焼の柄付片口である。取っ手部分と注口部を欠く。古瀬戸中Ⅱ期に属するものであろう。9は、瓦質土器の捏鉢である。この他、青磁・白磁・犬目・常滑・瀬戸卸皿・瓦などが出土している。14世紀後半に置くのが無難であろう。

058号遺構

第1面で検出した土坑である。120×70cmの長方形を呈する。

出土遺物をFig.15に図示する。1～4は、土師器である。1は小皿であるが、白色のきめ細かい胎土で、在地産土師器とは異なる。搬入土師器であろう。2・3の皿は、50号遺構のFig.14-4・5と共通した形態をとるが、法量的には一回り小さくなっている。4は、坏である。

5は、青磁碗である。口縁部外面には、雷文帯が巡る。6は、明代青花の碗である。7～9は、朝鮮王朝陶器の粉青沙器である。7は皿、8・9は壺で、9は接合できない2片に分かれるが、同一個体であろ

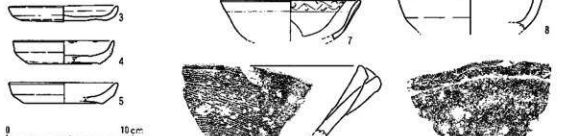


Fig.14　050号遺構出土遺物実測図（1/3）

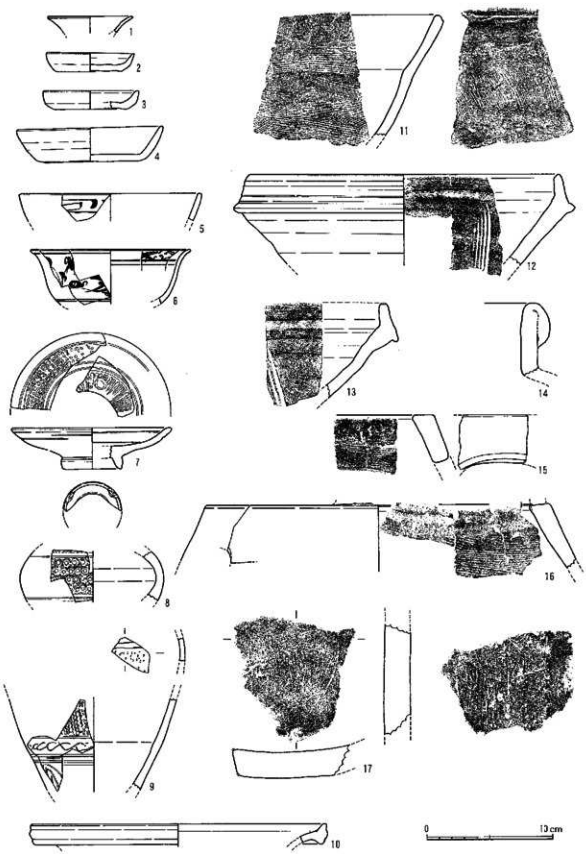


Fig. 15　058号遺構出土遺物実測図（1/3）

う。10は、黒褐釉陶器の壺口縁である。

11は、土師器の土鍋である。外面には、厚く煤が付着している。12～14は、備前焼である。12・13はすり鉢で、間壁編年ⅣB期にあたる。14は、甕の口縁で、間壁編年ⅣA期にあたる。15・16は、瓦質土器の火舎である。破片であるが、すぼまった口縁部の直下に、窓が開けられている。

17は、平瓦片である。コビキ整形で、表面には離れ砂が付着している。

これらの遺物から、15世紀後半頃の遺構と考えられる。

Ph.13　065号遺構（西より）

065号遺構

第1面検出の土坑である。前述した第50号遺構に切られる。土坑底面近くに、完形品の土師器がまとまって廃棄されていた。

土師器の一部を、Fig.16に示す。1・2は、皿である。小さ目で器高が高い1と、器高が低く扁平な2のタイプとが認められる。3～7は、坏である。3・6には、煤が付着しており、灯明皿として用いられたことを示している。

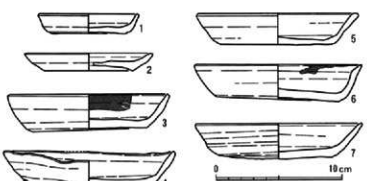


Fig.16　065号遺構出土遺物実測図（1/3）

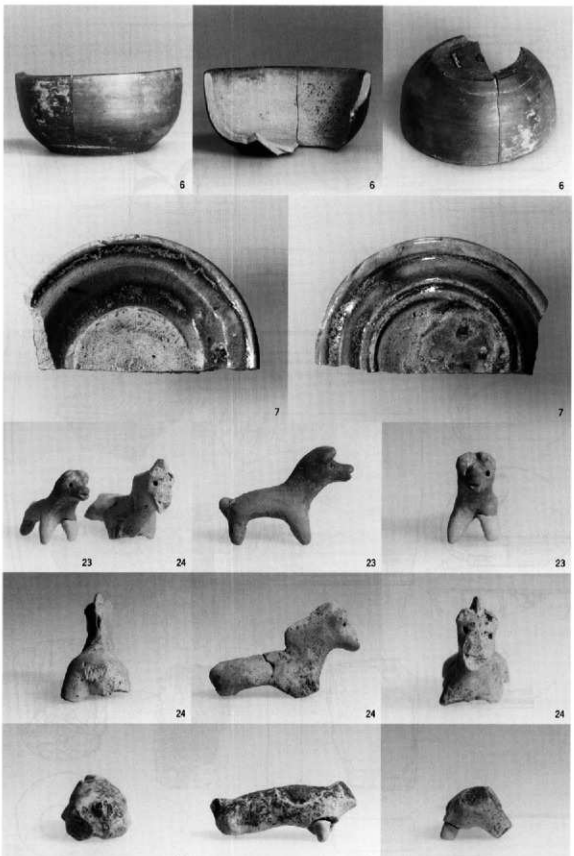
この他、青磁・白磁片が出土している。14世紀前半頃と考えられる。

110号遺構

第1面で検出した土坑である。ほぼ全面に鍛冶滓が廃棄されていた。

出土遺物をFig.17・Ph.14に示す。1～5は、土師器である。1－口径6.9cm、2・3－口径9.5～9.6cm、4・5－口径10.8～11.0cmの三法量が認められる。6は、瓦器の小鉢である。内面は撫で調整、外面は丁寧な横へら磨きで、外面はいぶされて銀化している。7は、瀬戸焼の灰釉折縁皿である。見込みは、丸く露胎となる。大窯4期後半あたりに位置付けられる。8～11は、唐津焼である。8・9は碗、10は鉢、11は壺であろうか。12は、陶器の壺口縁である。朝鮮王朝陶器であろうか。13～16は、明の青花であろう。17・18は、備前焼のすり鉢である。17は、間壁編年のⅤ期末からⅥ期初め、18はⅤ期前半であろう。19・20は、瓦質土器の火鉢である。二片に分かれているが、同一個体の可能性もある。21は、瓦磚である。器面は磨滅していて遺存状態は悪いが、板撫での痕跡が薄く見られる。22は、土師質のふいご羽口である。端部は溶け、鉄滓が付着している。土製犬・馬が出土しているので、Ph.14に示す。23は犬、24は馬で、25は頭・尾・四肢を欠くが、犬であろう。

17世紀初頭頃の、鍛冶関連の廃棄土坑と考えられる。



Ph. 14　110号遺構出土遺物

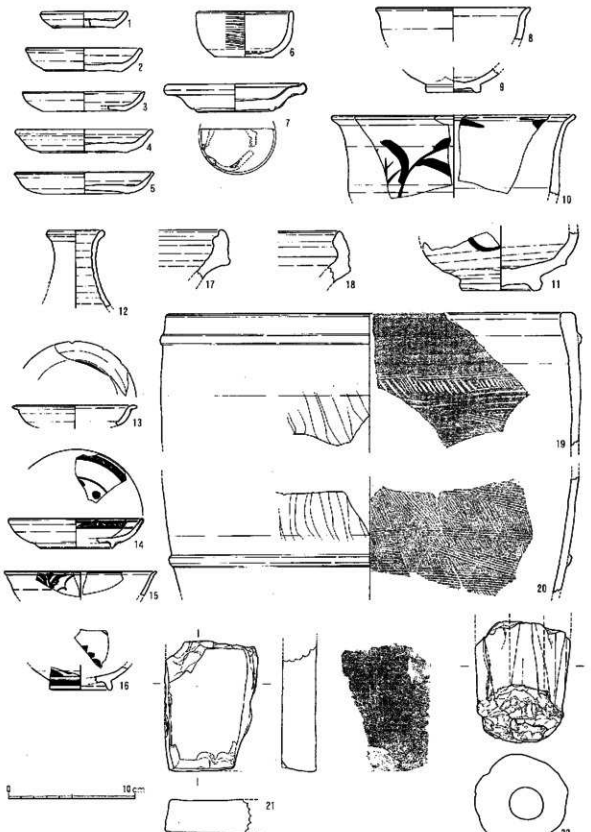


Fig. 17　110号遺構出土遺物実測図（1/3）

142号遺構

第２面で検出した遺構である。黄灰色粘土を貼った面から、掘り込んで火鉢を埋め込む。掘り方埋土は赤褐色の焼土、火鉢内部の埋土は褐色土である。火鉢を据えて埋め込んだことは明らかであるが、

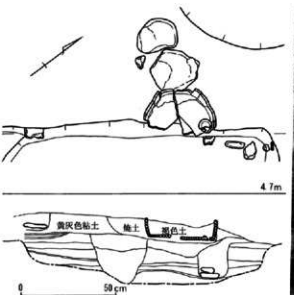


Fig. 18　142号遺構実測図（1/20）

Ph. 15　142号遺構（南東より）

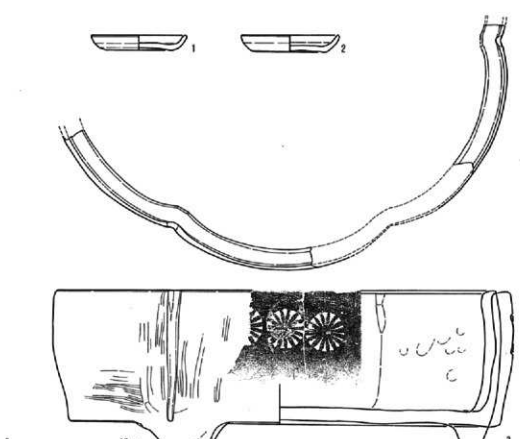


Fig. 19　142号遺構出土遺物実測図（1/3）

その内部で火を使った形跡はなく、機能は不明である。また、火鉢に接して礎石が据えられているが、火鉢との関係は明らかではない。

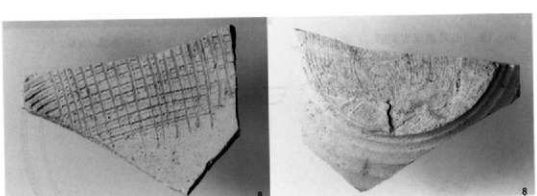
出土遺物を Fig. 19に図示する。1・2は、**土師器**の皿である。底部を回転糸切りする。3は、**瓦質土器**の火鉢である。体部は、八等分した輪花につくる。内面は指で押さえた後粗い磨き、外面は丁寧にへら磨きする。

これらの他には、出土遺物はなく、おおむね14世紀頃と位置付けておく。

197号遺構

第2面の中央ベルト際で検出した細長い落ちである。遺構掘削時には、土坑として遺物を取り上げたが、その後の検討で、後述する226号遺構（池状遺構）の一部と見た方が妥当であろうと考えを改めた。

出土遺物の一部を Fig. 20に示す。1～3は、**土師器**の皿である。底部は、回転糸切りである。4は、**白磁**の皿である。口縁部の釉を削り取って、口禿げに作る。5・6は、**青磁**である。5は小碗、6は端反り碗である。外面には、鎬蓮弁文を配する。7は、**陶器**の壺底部である。褐釉を施す。8は、**瀬戸焼**の卸皿である。見込みの卸目部分は、無釉である。口縁部を欠くためにはっきりはしないが、中期様式の終わりから後期様式の初めあたりに位置付けられようか。



Ph. 16　197号遺構出土瀬戸陶器卸皿

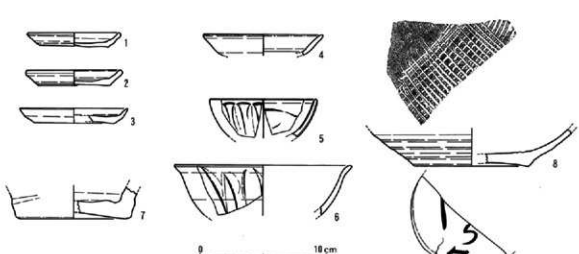


Fig. 20　197号遺構出土遺物実測図（1/3）

この他、白磁灯火器・瓦質土器すり鉢などが出土している。

14世紀頃の遺構と考えられるが、時期の判断は226号遺構の項で行う。

238号遺構

第3面で検出した土坑である。

埋土中位から下位にかけて、土師器を主とした遺物が出土した。埋積途中で、東側から廃棄された状況を示している。

出土遺物の主なものを、Fig.22に示す。1～38は、**土師器**である。1～14は皿で、底部を回転糸切りする。口径7.5～8.6cm、器高1.05～1.5cmをはかる。体部の立ち上がりが急な6・10・11と、比較的緩く立ち上がるものとがある。両者に大きな差異は認められない。

15～38は、坏である。底部は回転糸切りである。口径11.8～12.8cm、器高2.05～2.9cmをはかる。16・17・19の口縁部には油煙が付着しており、灯明皿として使用された事を示している。

39は、砥石である。粘板岩製で肌理は細かい。

このほか、青磁（鎬蓮弁文）・白磁（口禿）・陶器・棒状鉄器などが出土している。

13世紀後半頃の廃棄土坑と考えられる。

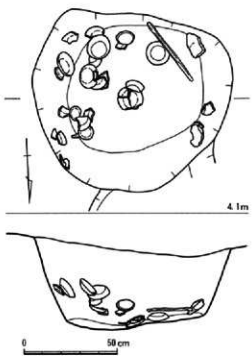


Fig.21　238号遺構実測図（1/20）

Ph.17　238号遺構（北西より）

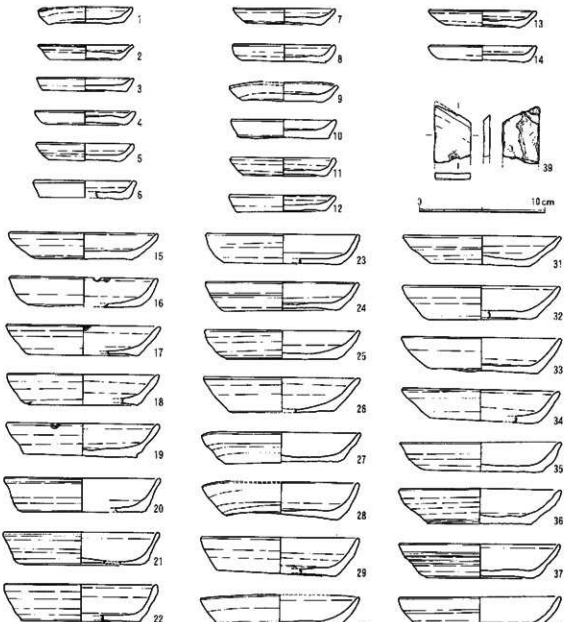


Fig. 22　238号遺構出土遺物実測図（1/3）

255号遺構

第3面で検出した土坑で、次に述べる256号遺構を切る。

土坑内には、ぴっしりと礫が詰まっていたが、規則性はなく、また敷き詰められた状態とも考え難い。被熱したような痕跡もなく、単にひとまとまりに廃棄したものと考えておく。

礫に混じって、瀬戸卸皿・備前すり鉢・瓦質こね鉢などが出土した。備前すり鉢は破片であったが、瀬戸卸皿や瓦質こね鉢は、完形またはそれに近い状態で礫の中から出土しており（Ph. 19）、意図的に埋め込まれた可能性も考えられる。

出土遺物を Fig. 24・25に図示する。1～5は、土師器の皿である。全て底部は回転糸切りである。

口径7.7～8.1cm、器高1.1～1.4cmをはかる。

6～9は、**青磁**の小鉢である。9は底部で、全面に釉をかけた後、高台畳付の釉を掻き取っている。

10～12は、**瓦質土器**の捏鉢である。ほぼ完形に接合できているが、12については片口部分は遺存していない。内面は刷毛目調整、外面は指押えおよび撫で調整で、内底部は使用のため磨滅している。

13は、**瀬戸焼**の卸皿である。全くの完形で出土した。外底部を除いてほぼ全面に施釉しているが、口縁端部の釉は禿げ気味である。内底面には、重ね焼きの痕跡が4ヶ所見られる。顕著な使用痕は認められない。藤沢編年の中Ⅲ期に属する。

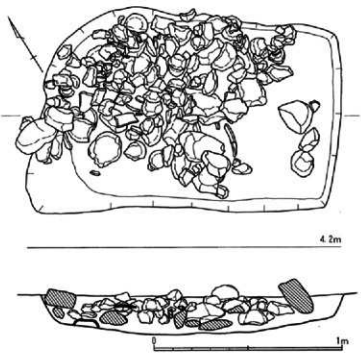
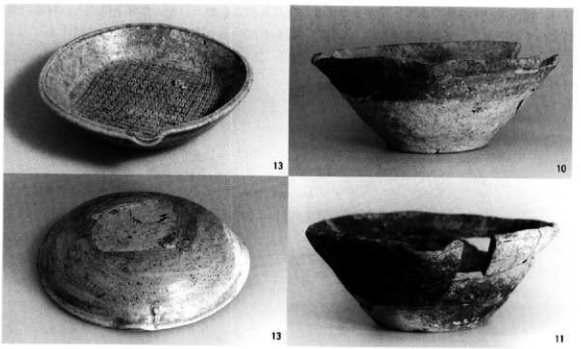


Fig.23　255号遺構実測図（1/20）

Ph.18　255号遺構（南東より）

Ph. 19　255号遺構遺物出土状況



Ph.20　255号遺構出土遺物

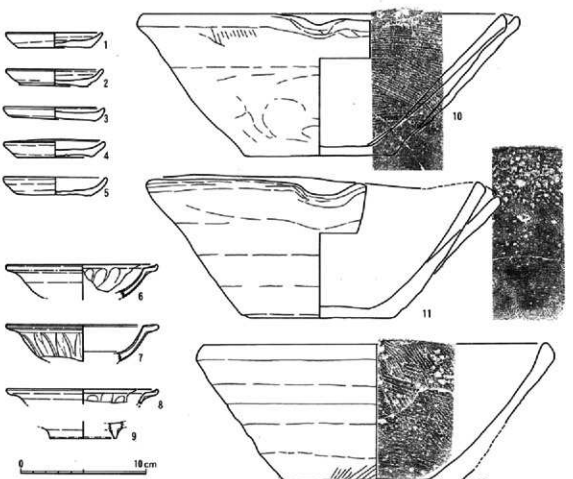


Fig.24　255号遺構出土遺物実測図1（1/3）

14は、備前焼のすり鉢である。7本を単位とした工具による磨り目が、体部下位から口縁部内端まで刻まれているが、一部に5本単位のすり目が加えられている。間壁編年Ⅲ期前半に属する。

そのほか、無釉陶器捏鉢片や多量の塩土塊が出土している。

14世紀前半の土坑であろう。

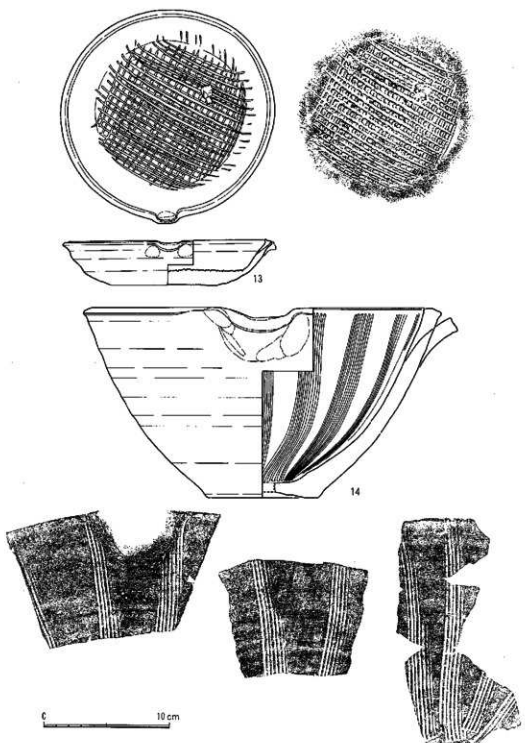


Fig. 25　255号遺構出土遺物実測図2（1/3）

256号遺構

第３面において検出した土坑である。前述した255号遺構に切られている。

４辺に板材を立てて、一辺96cm 程度の正方形に作る。板材の高さは、遺存状態の良い部分で、10cm をはかる。床面は平坦で、箱型の土坑となる。当然掘り方はあるはずであるが、精査したにもかかわらず、確認できなかった。板囲いの大きさぎりぎりに、掘り方を設定したものと考えざるを得ないであろう。

埋土中から、土師器・青磁（遠弁文小鉢）・白磁・鉄器（短刀？）などが出土した。

出土した**土師器**を **Fig. 27**に示す。１～８は、皿である。口径 7.4～8.4cm、器高 0.95～1.4cm をはかる。８は、皿の破片である。成形途中の未だ粘土が柔らかい時点で、大きく褶曲してしまったものであるが、それにもかかわらず焼成している。他に類品を見ないことから、意図的に曲げた可能性が考えられる。博多遺跡群では、これまでもしばしば作りそこないの土師器皿を焼成した出土例があり、粘土を掘りつぶした様なものもあることから、必ずしも数寄的な行為とは言いがたい。

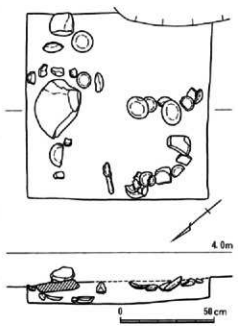


Fig. 26　256号遺構実測図（1/20）

Ph. 21　256号遺構（南より）

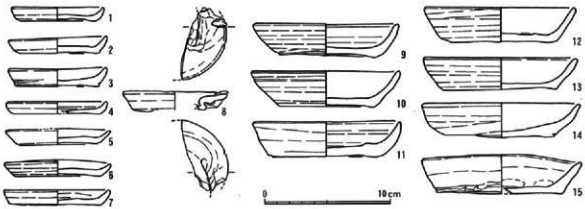


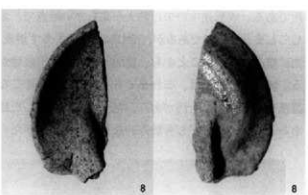
Fig. 27　256号遺構出土遺物実測図（1/3）

一方、博多遺跡群における土師器生産を前提としないとすれば、これら不良品もどきをどこかであえて焼かせていると考えざるを得ないことになる。今後注意していきたい遺物である。

9～15は、坏である。口径11.6～12.6cm、器高2.5～3.1cm を測る。

これら土師器皿・坏は、いずれも底部を回転糸切りしている。

14世紀前半頃の遺構と考えて大過ないであろう。



Ph. 22　256号遺構出土土師器皿

297号遺構

第4面の中央ベルトにかかって検出した土坑である。4辺に板を立てて、130×180cm の長方形に作る。板材の深さは、30cm 程度を測る。Fig. 5 の土層実測図に見るように板囲いのやや上から、白色砂・灰色砂質土・黒色粘質土などの互層が落ち込んでおり、その中から土器・陶磁器などが出土した。掘り込みの高さから見て、第3面付近から営まれた土坑であろう。

Ph. 23　297号遺構（西より）

出土遺物の一部をFig. 28 に図示する。1～18は、土師器である。いずれも底部は回転糸切りである。4・5など皿の体部には粘土の貼り合わせ目が見られ（Ph. 24）、底部となる粘土円盤の周りに体部となる粘土紐を貼り付けて成形したと思

われる。18は、京都系土師器の坏である。胎土はきめ細かく精良で、白色を呈する。伊野分類のGa－2類に該当する。

19・20は、東播系須恵器の捏鉢である。19は、片口部分を欠失する。

21～25は、白磁の口禿げ皿である。26は、青白磁の、梅瓶の蓋である。口縁部は釉を掻きとって、

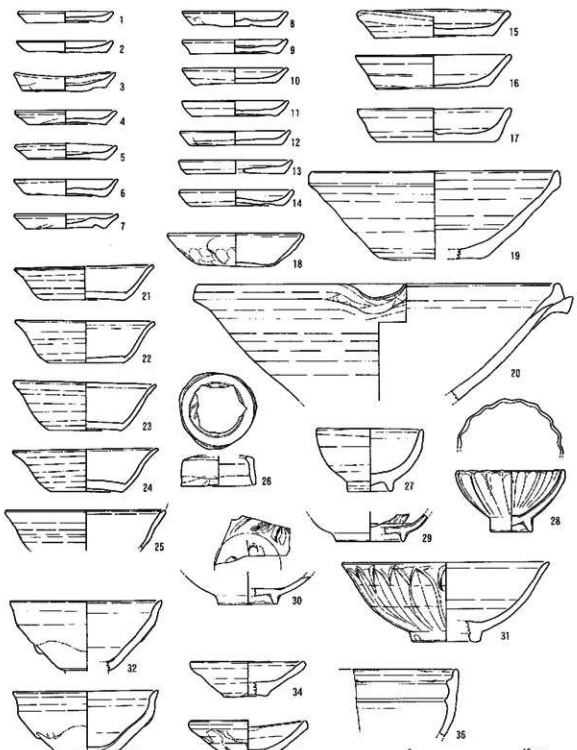
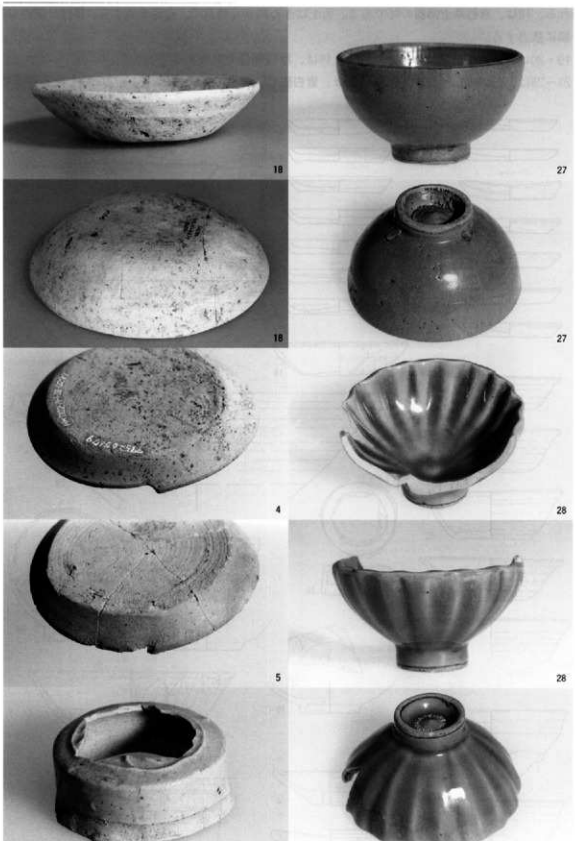


Fig. 28　297号遺構出土遺物実測図（1/3）



Ph. 24　297号遺構出土遺物

露胎とする。天井部は抜け落ちている。27～31は、**青磁**である。27は完形品の小碗で、口縁端部と高台畳付は、釉を掻きとって露胎とする。

32・33は**天目茶碗**、34・35は褐釉陶器皿、36は無釉陶器捏鉢である。

14世紀中頃の土坑であろう。

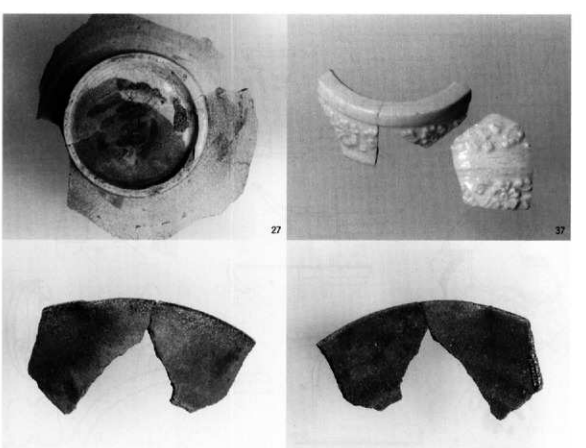
425号遺構

第6面で検出した、楕円形の大型土坑である。426号遺構（井戸）を切る。

遺構精査に着手した時点では、その大きさから井戸の掘り方を想定していたが、掘り上げたところ井側は検出されなかった。

出土遺物の一部を、Fig.29・Ph.25に示す。1～11は、**土師器**である。底部は回転糸切りする。1～8は皿で、口径8.0～10.0cm、器高0.9～1.4cm を測る。9～10は、坏である。口径12.5～13.5cm、器高2.1～2.3cm を測る。12～14は**瓦器碗**である。12は和泉型瓦器で、搬入品である。15は、**須恵器**の壺である。焼成は瓦質がある。16は、**瓦質土器**の鉢である。Ph.25の下段に示した捏鉢は、須恵器であるが、胎土は黒紫色で、ややきめが粗く、白色の細かい砂粒を含む。口縁部付近には降灰によるテリがつく。在地産ではなく、現時点では生産地に思い当たらない（実測図は Fig.57—50に図示）。

17～27は、**白磁**である。22は、口禿げの白磁碗である。27の外底部には、墨書が見られる。漢字一文字であろうが、判読できない。28は、**越州窯系青磁**である。総釉の精品で、外底部には目跡が並ぶ。29・30は、**竜泉窯系青磁**である。29は鎬蓮弁文碗、30は畳付を露胎にした鎬蓮弁文の小鉢である。



Ph.25　425号遺構出土遺物

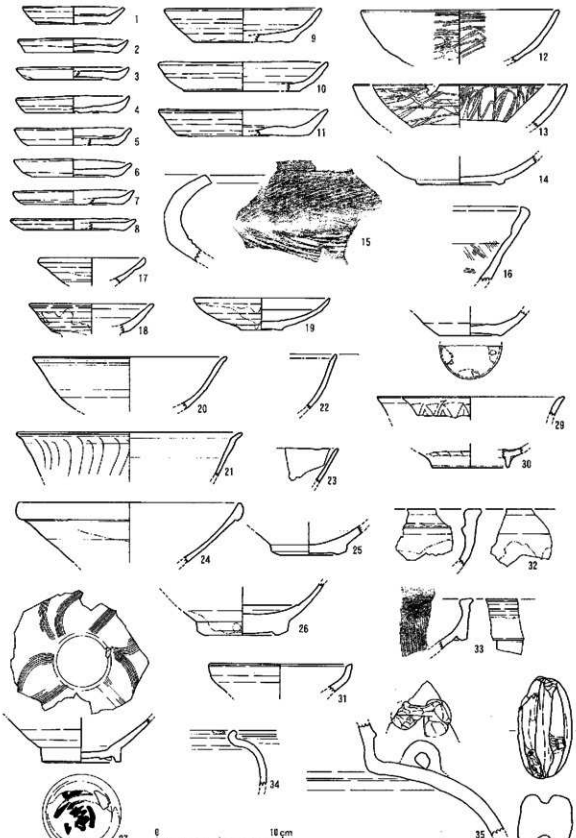


Fig. 29　425号遺構出土遺物実測図（1/3）

31～35は、**陶器**である。31は**天目茶碗**、32は灰褐釉陶器捏鉢、33は褐釉陶器すり鉢、34・35は褐釉陶器壺である。37は、**青白磁**の香炉であろう。体部全面に印花文が施される。

36は、**土錘**である。

この他、劃花文青磁碗・青白磁梅瓶などが出土しており、13世紀後半とみるのが妥当であろう。

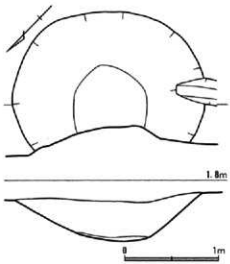


Fig. 30　455号遺構実測図（1/40）

455号遺構

第7面で検出した土坑である。457号遺構（溝）を切る。

出土遺物を、Fig. 31に示す。1・2は、**土師器**である。1は、底部へら切り、2は糸切りする。2の外底部の角は、へら削りで面取りしている。3は須恵器の甕、6は壺の底部である。4は、**白磁**皿である。平底に作る。5は、土師質の管状**土錘**である。

12世紀前半頃に比定できよう。

Ph. 26　455号遺構（南より）

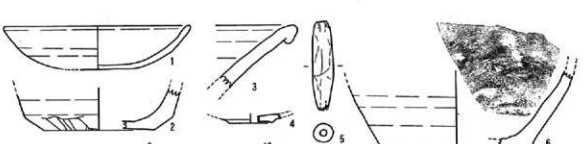


Fig. 31　455号遺構出土遺物実測図（1/3）

（2）井戸

第102次調査においては、第1面5基、第5面1基、第6面2基、第7面1基の9基の井戸が検出された。この内、第1面で検出した066号遺構、075号遺構、076号遺構、109号遺構、121号遺構は、近世以降の井戸である。076号遺構を除いて、いずれも井戸側にも井側用の瓦が積み上げられている。さらに066号遺構の最下部の井側はコンクリート枠、また109号遺構には土管を立ててポンプを通しており、近代以降に降る事を示している。これらの井戸についての記述は、省略する。

Ph.27　第1面検出井戸（南西より）

415号遺構

第5面で検出した井戸である。第1面の066号遺構・075号遺構・076号遺構などの井戸に切られている。

博多遺跡群一般に指摘されている事であるが、時期を異にした井戸が集中する傾向があり、砂丘下の伏流水との関連と考えられている。後述するが、415号遺構は13世紀後半の井戸であり、これを切る3基の井戸とは時代的に大きく隔たっている。やはり、地下水脈との関連であろう。

415号遺構の井側は結い桶であり、二段以上積んでいる状況が確認できた。木質の遺存状態は極めて悪かったが、部分的にたがの痕跡も認められた。

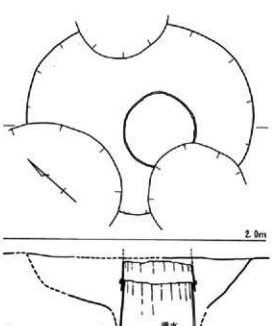


Fig.32　415号遺構実測図（1/40）

出土遺物の一部を Fig.33に示す。1～6は、**土師器**である。6は碗もしくは坏の破片であるが、薄手の精品である。ロクロ成形で、内面にはコテをあて平滑に仕上げる。7・8は**青磁**、9・10は**白磁**である。11

は青白磁の碗である。型作りで無文、口縁を口禿にする。12は、褐釉陶器の鉢である。
13世紀後半頃の井戸である。

Ph. 28　415号遺構井側（南より）

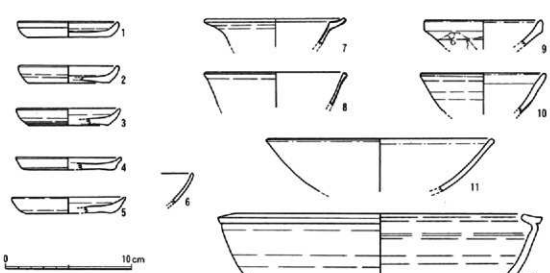


Fig. 33　415号遺構出土遺物実測図（1/3）

426号遺構

第6面で検出した井戸である。前述した425号遺構（土坑）に切られている。

遺存状態が極めて悪いながら、井側の一部が残っていた。井側は結い桶であったが、検出したのは短冊状の縦板が3枚突き立っていたのと板状のたがが上下二段痕跡をとどめていたに過ぎない。縦板は、たがの背面に立っており、たがで締められていた桶のものではない。またレベル的にも、下のたがまでは達していない。おそらく、上に重ねられた結い桶の一部であり、426号遺構においては、井戸を廃するにあたって、井側を抜き取ったものと推測される。検出できたのは、その取り残しであろう。

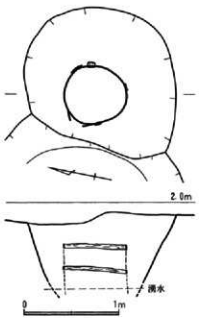


Fig. 34　426号遺構実測図（1/40）

出土遺物をFig. 35に図示する。1～3は、**土師器**である。底部は回転糸切りであるが、2・3にみるようにやや丸底気味に押し出している。4は、**東播系須恵器**のこね鉢である。胎土の肌理は細かく、神出窯の製品と考えられる。5は、**白磁**の碗である。6～9は、**陶器**である。6・7は**天目茶碗**、8は褐釉陶器の水注、9は茶釉陶器の甕である。10は、平瓦である。須恵質に焼成されている。

この他、**劃花文青磁碗片**・**和泉型瓦器碗**などが出土している。

12世紀後半の井戸である。

Ph. 29　426号遺構（南西より）

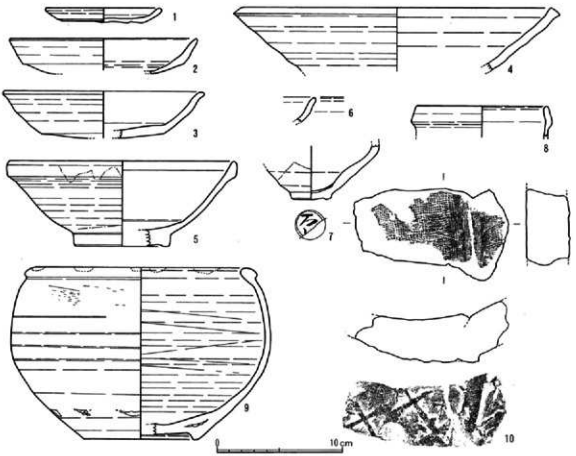


Fig. 35　426号遺構出土遺物実測図（1/3）

Ph. 30　426号遺構出土遺物

436号遺構

第6面で検出した井戸である。井側には結い桶を用いており、下から二段分を検出することができた。木質の遺存状態は悪いが、板幅約9cmを確認している。

第5面まで残土置き場にしていた箇所からの検出で、井戸の掘り込み面の確認はできなかったが、後述する年代観からみて、第5面以上に営まれた可能性は少ないものと考えている。

出土遺物を**Fig. 36**に示す。1～3は、**土師器**である。底部は、回転糸切りする。4は、**瓦玉**である。

Ph. 31　436号遺構井側（西より）

Ph. 32　456号遺構（南より）

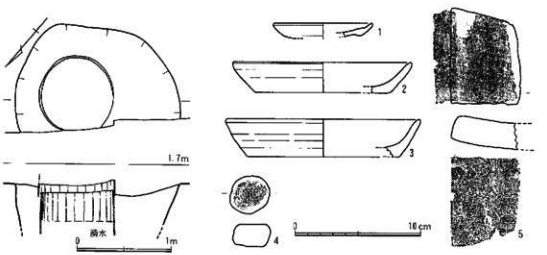


Fig. 36　436号遺構・出土遺物実測図（1/40・1/3）

瓦の周囲を擦って円盤状に作る。4は、平瓦片である。

この他、瓦器・青磁・白磁などが出土している。

12世紀後半の井戸であろう。

456号遺構

第7面で検出した井戸である。結い桶を井側とする。最下段の桶が残っていたのみであるが、桶の高さは84cm以上を測る。かなり縦長い桶を用いたものと言えよう。たがは一条を確認することができた。なお、年代観からみて、本来は第5面あたりで検出できた筈の遺構である。

出土遺物をFig. 37にかす。1～7は、土師器である。底部は回転糸切りする。8は、無釉陶器のこね鉢である。内面は摩耗している。9は、土師質の土玉である。

鎬連弁文の青磁なども出土しており、13世紀前半の井戸と考えられる。

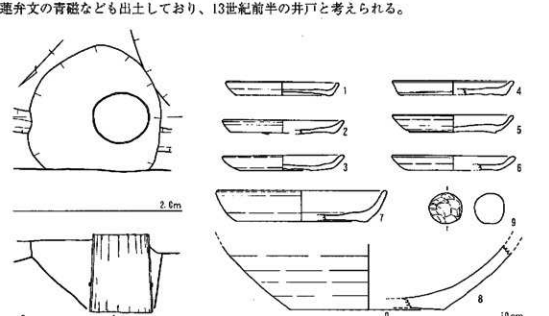


Fig. 37　456号遺構・出土遺物実測図（1/40・1/3）

（3）溝状遺構

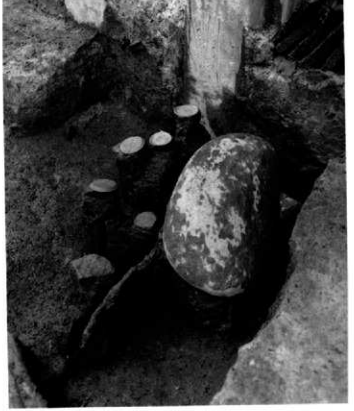
414号遺構

第5面で検出した溝状遺構である。東側を415号遺構に切られ、西側は調査区外に出るため、調査できたのは150cm分に過ぎないが、板を立てて杭で固定しており、砂が堆積していることから水が流れたことが推測できたため、溝状遺構と判断した。なお、南側の側板は残らず、杭のみが立っており、抜き取られたものと考えられる。

出土遺物をFig.38に示す。1～8は土師器である。底部は回転糸切りする。なお、8の外底部には墨書がみられる。習字であろう。9・10は、白磁である。10は、口禿の碗である。11は、青白磁の碗で、口縁を幅広く口禿にする。12～14は、陶器である。15は、土師質の土鍋である。

この他、蓮弁文の青磁などが出土している。

13世紀前半の溝であろう。



Ph.33　414号遺構（北東より）

424号遺構

第5面調査段階に、残土置き場としていた調査区南側部分の壁面を精査して確

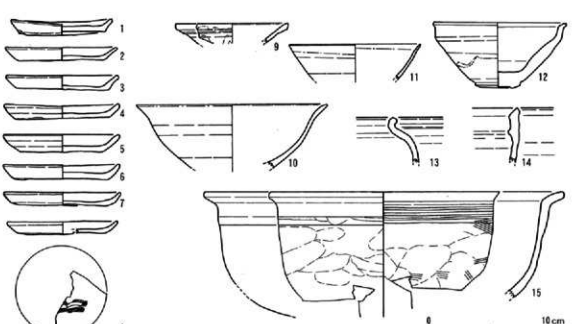


Fig.38　414号遺構出土遺物実測図（1/3）

認した溝状遺構である。壁面で確認できた限りでは、東端で360cm、西端で300cm の幅を持つ。溝の方向は、第２面193号遺構（溝）、第４面掘立柱建物跡、第５面414号遺構などと共通しており、一連の敷地を区画したものと推測できる。想像をたくましくして言えば、聖福寺塔頭の南辺を画した溝（堀）と言うことができようか。なお、確認したレベルから、第２面か第３面あたりに伴う溝と思われる。

埋土は腐食土質の黒褐色粘質土で、木製品を含む多様な遺物が出土した。

出土遺物の一部を Fig. 39に図示する。１～８は、土師器である。底部は、回転糸切りする。１～

Ph. 34　424号遺構断面（西より）

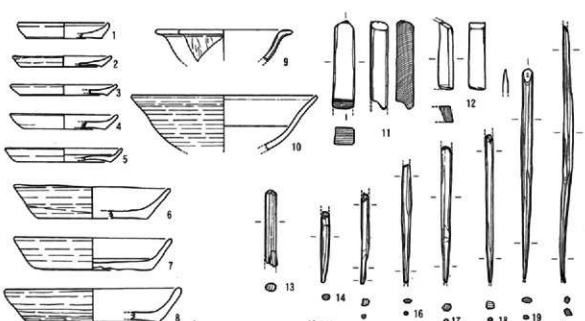


Fig. 39　424号遺構出土遺物実測図（1/3）

5は皿であるが、口径が小さい割りに器高が高いもの（1）と、偏平（2～5）なものとがある。9は、**青磁**の小鉢である。体部外面には、鏡蓮弁文を配する。10は、**白磁**の口禿碗である。

11～20は、**木製品**である。11は、板材から切りだした木っ端を加工して、角棒状に作ったものである。12は、板状製品の破片である。下端の際には、刃物傷がみられる。13は、何かの軸木であろう。細かい削りで角を落とし、丸みの強い棒状に整えている。14～20は、箸である。19は完形品だが、握る側の端を箆状に平らに削りだしている。長さは、17cm を測る。20は最も長い箸で、一端を若干欠くが、20.4cm 分が残っている。

これらの他、蓮弁文の青磁や陶器などが出土した。

おおむね、14世紀前半頃の溝と考えられる。

427号遺構

第6面で検出した溝である。遺構検出時には1条の溝と思われたが、精査したところ2条の溝の重複であることが判明した。したがって、427A、427Bとした。なお、427Aが、427Bを切っている。

427Aおよび、427Aと427Bまたがって調査した段階での**出土遺物**を、Fig. 40-1～6に図示する。1は、**土師器**の丸底坏である。底部は箆切りで、粘土紐巻き上げ成形の痕跡が底部のラセン状の凹凸となって残っている。2は、**緑釉陶器**である。土師質の胎土に濃緑色で磨り胡麻がある釉をかけており、近江産と思われる。3～5は**白磁**碗で、3・5はⅣ類、4はⅡ類に分類される。6は、**褐釉陶器**の壺底部である。このほか、土師器碗が出土している。

Ph. 35　427・432・434号遺構（南より）

Ph. 36　427号遺構（南より）

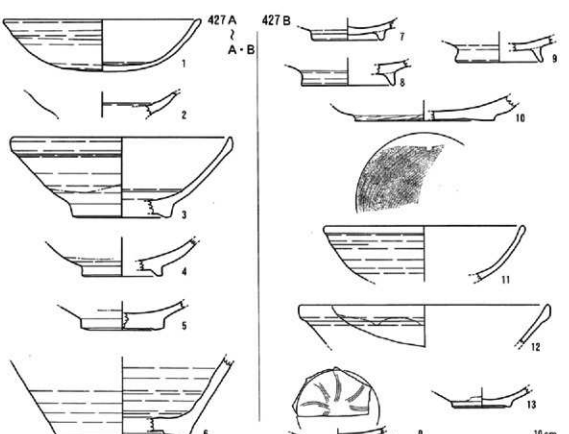
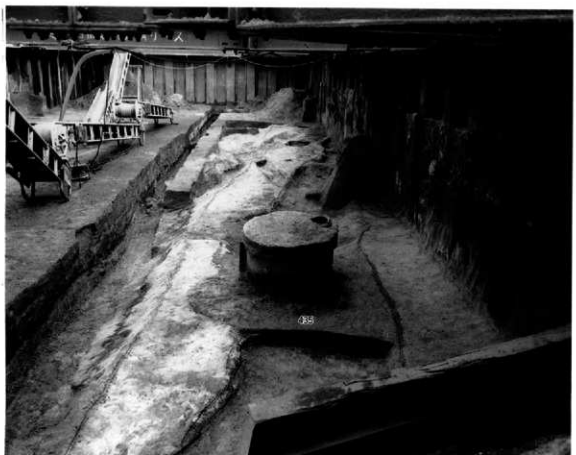


Fig. 40　427号遺構出土遺物実測図（1/3）



Ph.37　435号遺構（南より）

Fig40−7〜14に示したのは、427Bの出土遺物である。7・8は土師器碗、9は黒色土器A類碗である。底径が広めで、高台も高い。10は、東播系須恵器の鉢である。神出窯の製品であろう。外底部には、回転糸切り痕跡が残っている。11〜14は、白磁である。11はⅠ類の碗で、口縁を小さい玉縁に作る。12は、Ⅳ類碗である。

いずれも11世紀後半に位置づけられ、短い間に掘り直された溝と考えられる。

435号遺構

第6面から検出した溝である。幅80〜100cmで、南西から北東に直線的に延びる溝である。延長11m分を調査したが、まだ両側に続いている。途中でわずかな段が付き、そこから西側が若干深くなっているが、顕著な段差ではなく、強いて掘り直しや切り合いを考える必要はないだろう。

出土遺物をFig.41に図示する。1〜3は、土師器の碗である。底径は広いが、高台は断面三角形で低い。4は、土錘である。指押さえで成形した後、棒状工具で溝を刻む。

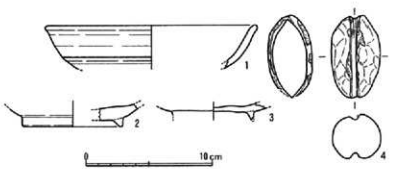


Fig.41　435号遺構出土遺物実測図（1/3）

この他、黒色土器A類碗、白磁が出土している。
11世紀代の溝と考えられる。

451号遺構

第7面で検出した溝である。やや下げすぎた面で検出したので380cm分を調査したにとどまるが、本来はさらに両側に続いていた溝である。

Fig. 42-1に出土した口禿の**白磁碗**を示したが、これは混入遺物である。時期を決定するに足る遺物に欠けるが、須恵器片が出土している。

452号遺構

第7面で検出した溝である。幅30cm程度の小溝であるが、一直線に延びており、延長15m分を調査した。

出土遺物の一部を、Fig. 42に示した。2は、**須恵器**の高台坏である。3は、**平瓦**である。須恵質に焼成される。このほか、篦切りの土師器片・白磁片などが出土している。

11世紀頃の溝であろうか。

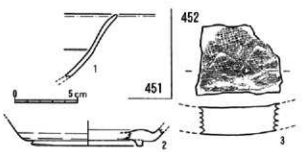


Fig. 42　451・452号遺構出土遺物実測図（1/3）

Ph. 38　451・452号遺構（南より）

457号遺構

第7面で検出した溝状遺構である。遺構検出時点では、腐食土質黒褐色粘質土が頭を覗かせていると言う認識で、遺構とは考えていなかったが、精査段階で、断面を検討した結果、溝状遺構と判断したものである（Ph. 40）。溝状遺構の幅は290～370cmを測るがほぼ直角に折れ曲がる角を検出したのみで、全容や機能については、不明である。

埋土である腐食土中から牛・馬骨が出土している。Ph. 41に示した馬の前肢骨と後肢骨は脊椎・腰椎・骨盤・肋骨などを欠くものの、位置関係からは埋葬された可能性が考えられる。この馬のものと

Ph. 39　457号遺構（南西より）

Ph. 40　457号遺構断面（南より）

Ph. 41　457号遺構獣骨出土状況 1 （西より）

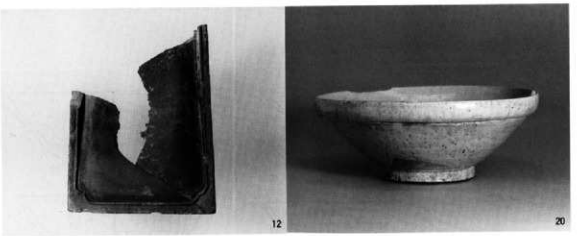
Ph. 42　457号遺構獣骨出土状況 2 （南西より）

Ph.43　457号遺構馬頭骨出土状況（北より）

Ph.44　457号遺構牛下顎骨出土状況（北より）

思われる下顎骨は後ろ向きで出土している（Ph.42）。また、他に牛や馬の頭骨・四肢骨などが遊離した状態で出土しており（Ph.43・44）、廃棄されたものと思われる。

出土遺物の一部を、Fig.43・44に示す。1～8は、土師器である。1は回転糸切りするが、他は篦



Ph.45　457号遺構出土遺物

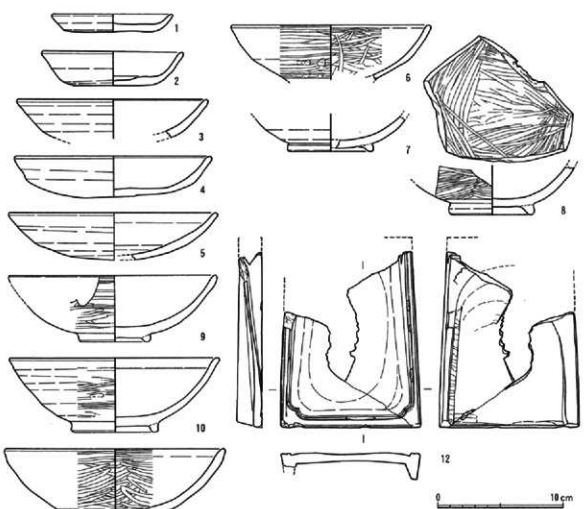


Fig.43　457号遺構出土遺物実測図1（1/3）

切りである。9～11は、筑前型瓦器碗である。12は、石硯である。側面と上縁には、茶色の漆を施す。

13は、越州窯系青磁碗である。全面施釉の精品に属する。14～35は、白磁である。22の外底部には花押が墨書されている。

83ページ、Fig.70に木製品を示している。296はしゃもじ、297は曲げ物である。しゃもじが、曲げ物の中に入った状態で出土している。

12世紀初頭の溝と考えて大過なかろう。

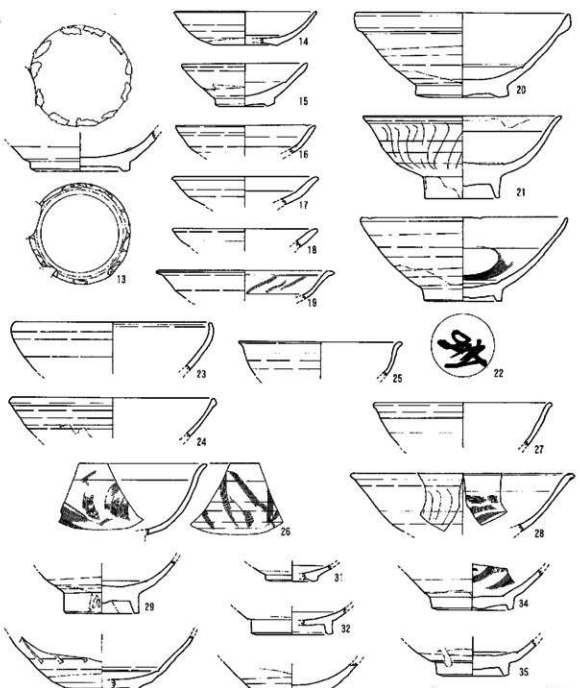


Fig.44　457号遺構出土遺物実測図2（1/3）

（4）池状遺構・庭園状遺構・不明遺構

第102次調査では、池の可能性が考えられる大型土坑、溝を伴う配石で庭園の可能性が想定できる遺構、遺構としての実態が良く把握できないが、前二者に関係する可能性がある遺構などが検出されている。以下、遺構番号順に略述する。

225号遺構

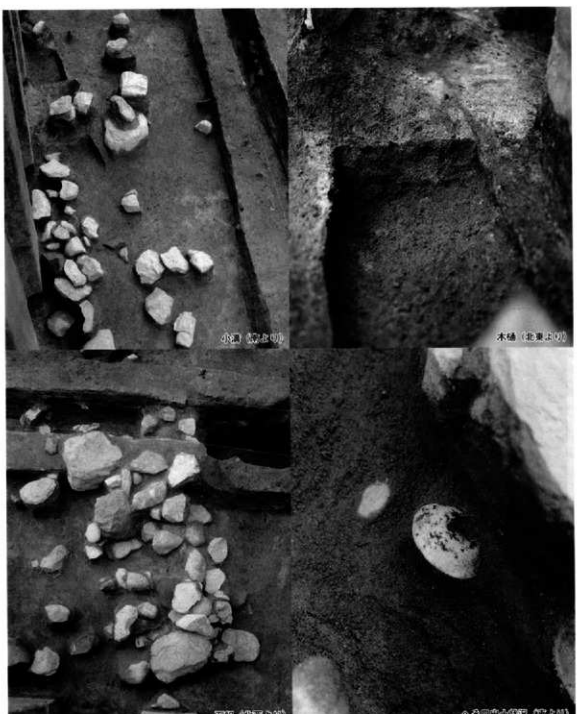
第2面で検出した配石遺構である。南側には160×80cmの方形の集石が作られ、その北側にやや疎らに石が配置される。配石の範囲は、300×400cmにわたる。配石の間から板を両側に立てた幅20cmの溝が北に延びていく。溝には砂が詰まっており、水が流れたことを示している。溝壁の木質は170cmにわたって検出されたが、この南側延長部の配石には同じ幅で隙間が開いており、配石の中から導水していたことがうかがわれる。発掘調査では直接確認できなかったが、導水溝は次項で述べる226号遺構（池状遺構）に接続していた可能性も考えられる。

なお、225号遺構直上の第1面においては、ほぼ重複する範囲で白色の砂が分布しており、配石を砂で埋め込んで、庭園として存続したものと考えられる。さらに、第1面からの掘り下げに際しては、白色砂の東の部分で、傾斜して砂利が敷かれていた状況が検出されており、白色砂による庭園部分が緩く盛り上がっていた可能性が考えられる。

配石の間や溝から、多種多量の遺物が出土した。京都系土師器が多いのも特筆すべきことで、配石の間から完形のへそ皿が出土している。

Ph.46　225号遺構（西より）

出土遺物の一部を、Fig.45～49に示す。1～67は、土師器である。1～35は皿で、薄く偏平なタイプ（1～5）、器高が高いタイプ（6～12）、その中間のタイプ（13～35）に分かれる。36～52は、坏である。36～50のタイプと明らかに大きい51・52のタイプとわかれる。以上の1～52の皿・坏は、すべて底部を回転糸切りする。53は、口径23.0cmに復元できる大型の土師器で、おそらく鉢になろう。54～59は、白色系土器で京都系土師器である。54はコースター型皿で、底部中央に穿孔がある。55～58は、へそ皿である。伊野分類ではGb-1型に分類される。59の皿は、D型にあたる。60～67



Ph.47　225号遺構細部

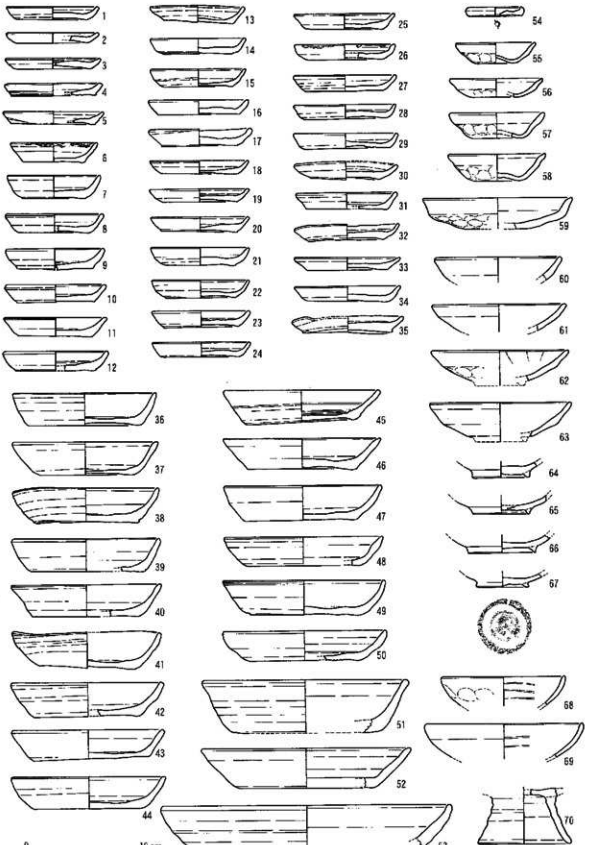
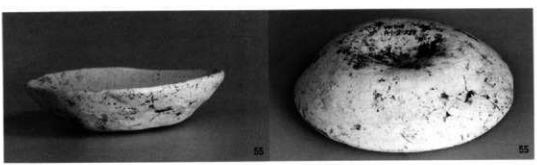


Fig. 45　225号遺構出土遺物実測図1（1/3）

は、吉備系土師質土器椀である。小型化しているが、高台はまだ正円を保っている。68・69は、楠葉型瓦器椀である。外面には暗文はなく、内面にのみ疎らに施されている。70は、土師器の脚である。

71～77は、瓦質土器である。71～74は、こね鉢である。75・76はすり鉢で、内底部は使用のため摩耗している。77の鉢は、内面にコテ状の工具をあて、平滑に仕上げている。

79～85は、国産陶器である。79は、常滑焼きのこね鉢である。中野分類では7型式に編年される。80～85は、東播系須恵器である。85の甕は破片で、すべてが接合できるわけではないが、同一個体と考えられる。外面は矢羽根状の叩き、内面は指撫でする。



Ph. 48　225号遺構出土遺物1

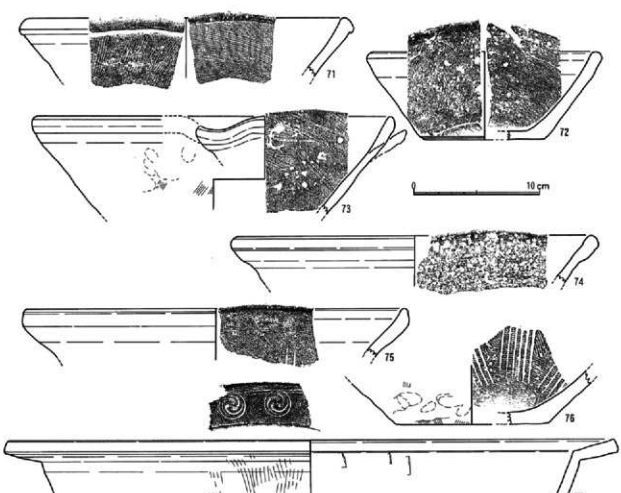


Fig. 46　225号遺構出土遺物実測図2（1/3）

86〜90は、白磁である。86・87は、口禿の皿である。88は枢府の腰折皿である。見込みには、印花文が認められる。89は碗である。90は人形で、頭部と脚を欠くが、あぐらをかいて合掌している。91〜101・122（Ph.49）は、青白磁である。94・95は型造りで、口縁を口禿にする。100は瓶の頚であろう。101は、梅瓶の口縁部である。122は、八角の小壺で、三片に分かれている。102〜105は、青磁

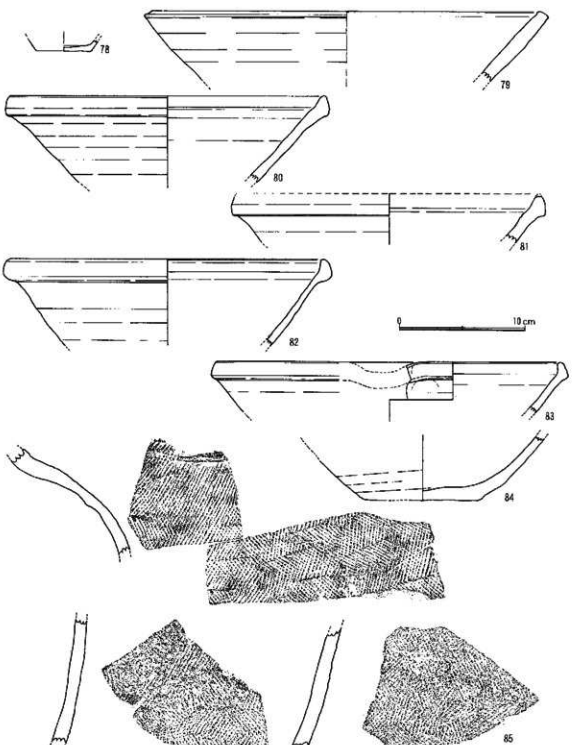


Fig.47　225号遺構出土遺物実測図3（1/3）

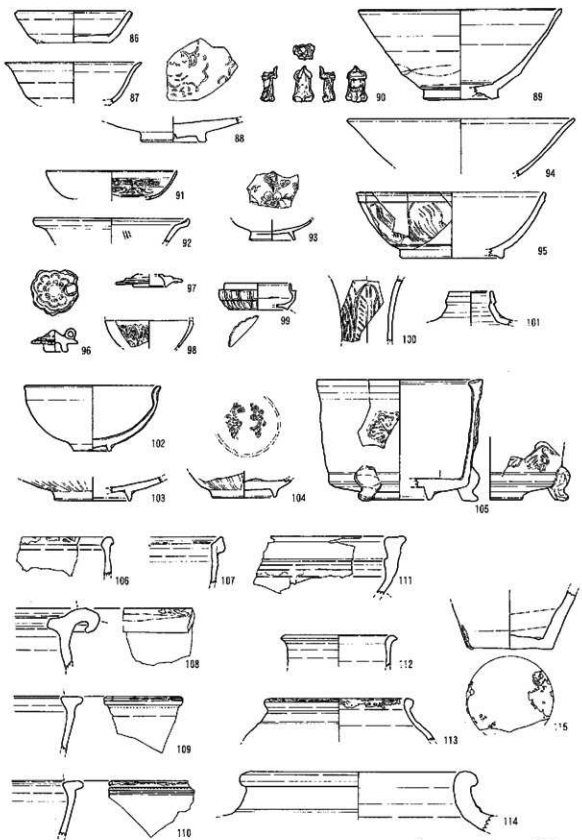
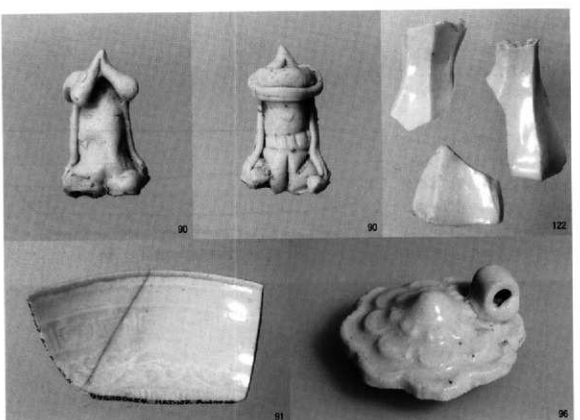


Fig. 48　225号遺構出土遺物実測図 4 (1/3)

である。102は東口小碗、103は皿、104は小鉢、105は香炉である。105は、口縁部片と底部片に分かれ、接合できないが、図上復元している。106～115は、**陶器**である。106～110は黄釉盤、111は灰褐釉こね鉢、112～114は褐釉の壺、115は褐釉瓶である。

116～118は**瓦玉**である。瓦や瓦質土器を打ち欠いて、周囲を擦ってつくる。119は**円盤状土製品**である。全面撫でで平滑に整えている。

120は、滑石製石鍋片である。121は、平瓦片である。両面にコビキ痕が残る。



Ph. 49　255号遺構出土遺物 2

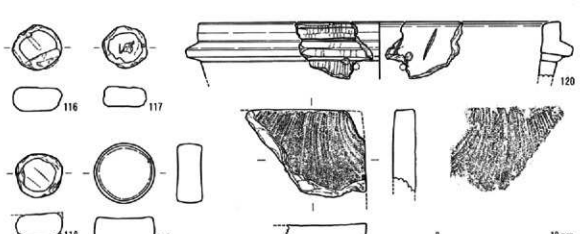


Fig. 49　225号遺構出土遺物実測図 5（1/3）

これらの出土遺物から、14世紀前半の庭園遺構と考えられる。

226号遺構

第2面で検出した大型土坑である。差し渡しで7mを超え、深さは最も深いところで90cmを測る。埋土からは、湛水していた形跡は認められない。

前項で触れたように、225号遺構と一連の庭園（池）の可能性が考えられる。

出土遺物の一部をFig.51に示す。1～11は、土師器である。1～5は皿で、小振りで器高が高い1と、その他のものとの2タイプがある。1の口縁部には、油煙が付着しており、灯明皿に

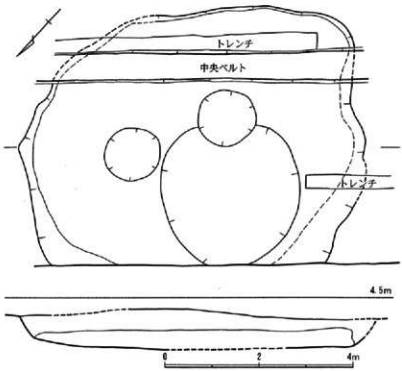


Fig.50　226号遺構実測図（1/80）

Ph.50　226号遺構（南西より）

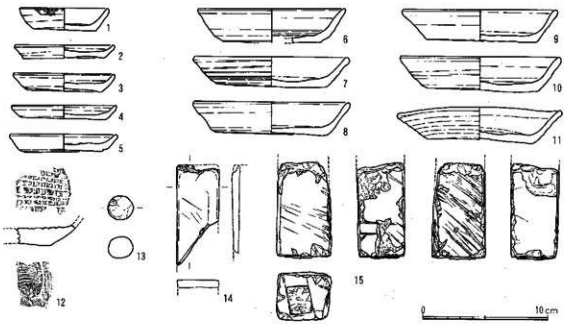


Fig.51　226号遺構出土遺物実測図（1/3）

使われていたことを示している。1は口径7.0cm、器高1.8cm、2～5は口径8.0～8.6cmを測る。6～11は、坏である。6はやや小さく、口径11.6cm、器高2.6cm、7～11は口径12.3～13.1cm、器高2.3～2.7cmを測る。土師器の皿・坏は、すべて回転糸切りである。

12は、瀬戸焼きの灰釉卸皿である。底部の小片であるが、藤沢編年の中Ⅱ期に属すると考えられる。

13は、土師質の土玉である。14・15は、砥石である。14は、粘板岩製で板状を呈する。15は、凝灰岩で方柱状を呈する。小口には、4辺から鋸をいれ、折取った痕跡がみられる。

これらの出土遺物から、14世紀前半の池状遺構と考えられる。

293号・294号・295号・296号遺構

第3面で検出した遺構群である。

293号遺構は、浅い溝状のくぼみで、中央ベルトを挟んで第2面225号遺構に相対する位置にあたる。294号遺構は、中央ベルトに向かって落ち込む浅いくぼみである。295号遺構は、293号遺構の南に接し、中央ベルトを挟んで294号遺構と相対する。集石遺構である。296号遺構は295号遺構の東に並ぶ集石である。293号遺構・295号遺構・296号遺構一帯には、完形の土師器皿・坏が散らばっており、個々の遺構を明瞭に区分することはできない。294号遺構については、上の3遺構とは直接結びつかないが、第2面庭園状遺構との位置関係から、これら全体で庭園に関わる一連の遺構と考えたものである。出土遺物の取り上げに際しても、第3面上に散っていた土師器皿・坏などに関しては、293号・295号・296号遺構出土として遺構番号を併記して取り上げ、個別の遺構出土遺物とは区別した。

293号遺構出土遺物を、Fig.52に示す。1～27は、土師器である。1～18は、皿である。底部は、回転糸切りである。15は、口縁部を小刻みに打ち欠き、鋸歯状に作る。19～20は、坏である。底部は、回転糸切りする。25～27は、京都系土師器である。いずれも胎土はきめ細かく精良で、白色を呈する。25は伊野分類Ga-2タイプ、26・27は、Ga-1タイプである。

28は、白磁の口禿皿である。Fig.61-155は、型造りの凸磁碗である。内面には、印花文が見られる。

Ph.51　293・295・296号遺構（東より）

29～33は、青磁である。34～36は、青白磁である。34は梅瓶蓋、35は型造りの口禿皿、35は型造り碗である。37～40は、陶器である。37は天目茶碗、38は褐釉皿、39は茶褐釉壺、40は黄釉の盤である。

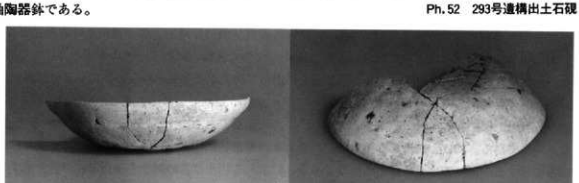
41は砂岩の石玉、42は石硯である。

294号遺構出土遺物をFig.53-1～13に示す。1～9は、土師器である。9は、吉備系土師質土器の碗である。10は楠葉型瓦器碗、11は青磁小鉢、12は白磁皿、13は東播系須恵器鉢である。

Fig.53-14・15は、295号遺構出土遺物で、14は白磁口禿皿、15は黄釉陶器鉢である。

42

Ph.52　293号遺構出土石硯



Ph.53　293号遺構出土京都系土師器

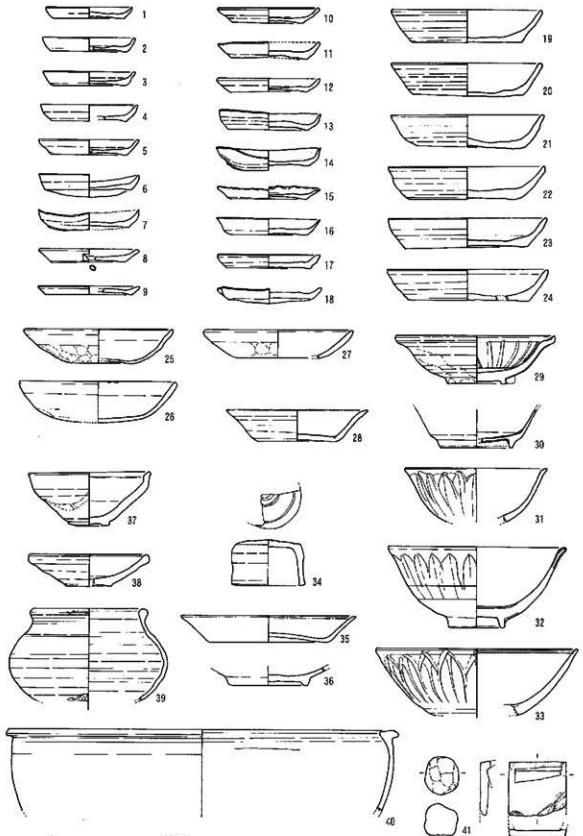
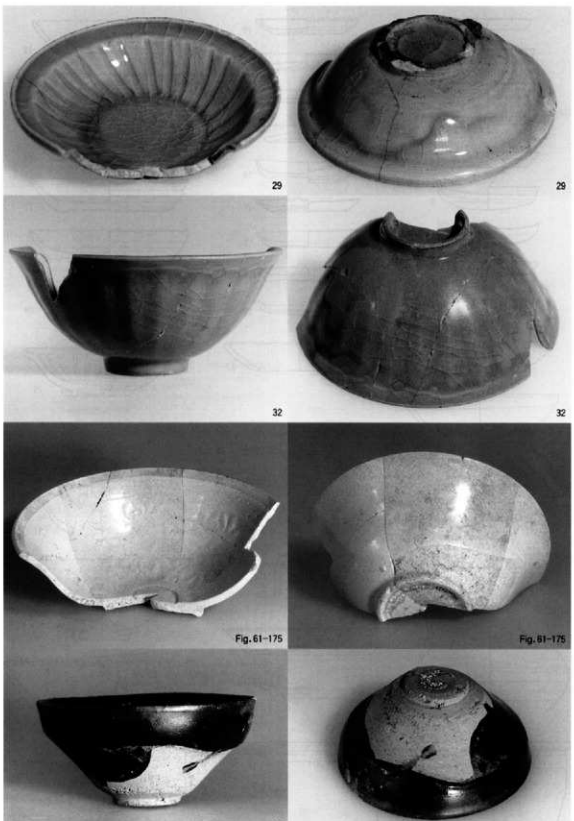


Fig. 52　293号遺構出土遺物実測図（1/3）



Ph. 54　293号遺構出土遺物

Fig.53-16～20は、296号遺構から出土した土師器である。底部を回転糸切りする。

293号遺構・295号遺構・296号遺構の上面に散らばっていた遺物を、Fig.54に図示した。1～16は、土師器である。皿は、著しく歪んだものが多い。7の口縁部には油煙がつき、灯明皿であったことを示している。17は、平瓦である。コビキ痕がみられる。18は、土師質の鍋壺である。19・20は白磁で、19は合子蓋、20は口禿皿である。

これらの遺物からみて、各遺構の間には時期差は認めがたく、おおむね14世紀前半の遺構群と考えられる。

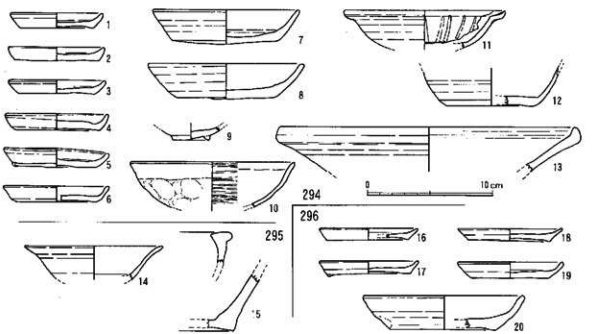


Fig.53　294・295・296号遺構出土遺物実測図（1/3）

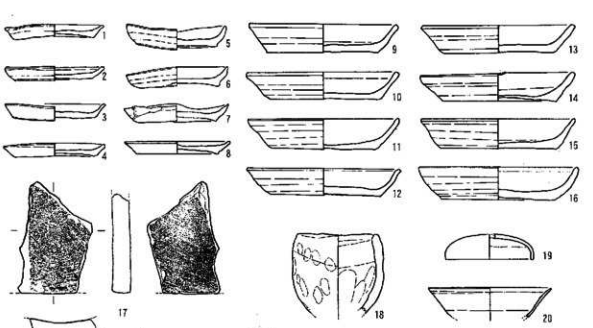


Fig.54　293・295・296号遺構出土遺物実測図（1/3）

（5）その他の出土遺物

これまでの記述から漏れた遺物の中から、看過できないものを以下に略述する。

1～7は、東海系S字状口縁台付き甕である。特に1は口縁から脚部まで接合でき、復元することができた。第六章で述べるように東海地方から搬入されたことはほぼ確実である。1は赤塚分類のB類古段階、2・3・5・7はA類、4・6はB類である。

8～10は、須恵器の硯である。8は円面硯の破片だが、脚の全体数は推定できない。9・10は甕を転用した鏡面硯である。11・12は、墨書須恵器である。蓋坏で、11は内面に「万福」、12は外面に記号が書かれている。13は、円盤高台の緑釉陶器である。京都系。14～16は、灰釉陶器碗である。17は、朝鮮半島の陶質土器の甕である。数片に分かれているが、同一個体であろう。

18～26は、中世土師器である。18は、コースター型皿であるが、底部を糸切りしており、在地で模したものと知れる。19～20は京都系土師器で、19はへそ皿（伊野分類Gb－1）、20は「て」の字状口縁皿、21は皿（伊野分類Ga－1）である。22・23は、吉備系土師質土器碗である。24～26は、底部が小さく体部が大きく開くタイプの皿である。24は、赤色系土器で在地の胎土である。25・26の胎土はきめ細かく、白色を呈する。搬入と考えられる。27～36は、瓦器である。27は、楠葉型のコースター型皿である。28・29は筑前型の皿、30・31は和泉型瓦器、32～36は楠葉型瓦器である。

37～58は、国産陶器である。37～45は瀬戸焼きで、37は入子皿、38は灰釉小皿、39は仏華瓶、40～44は卸皿、45は灰釉瓶子である。46は常滑焼きのこね鉢である。片口部の両側は、口縁端部を軽く打ち欠いている。同一個体と思われる破片が別にあり、それにも片口がみられるので、双口の鉢であったと推測できる。47・52～56は、東播系須恵器である。48は、土師質土器のすり鉢であるが、すり目は内底部の角付近のみに刻まれており、皿型を呈する可能性も考え得る。49は、京都篠窯の鉢であろう。50・51は、須恵器系陶器の鉢である。50については、425号遺構の項で述べた。51は、黒灰色の肌理のやや粗い胎土で、強い横撫で痕をとどめる。57は、瓦質土器の短頸壺である。58は、壺の底部である。外面は平行叩き、内面は指撫でである。胎土は、初期の備前に似る。

59～113は、青磁である。59～69は、越州窯系青磁である。

Ph.55　その他の出土遺物1

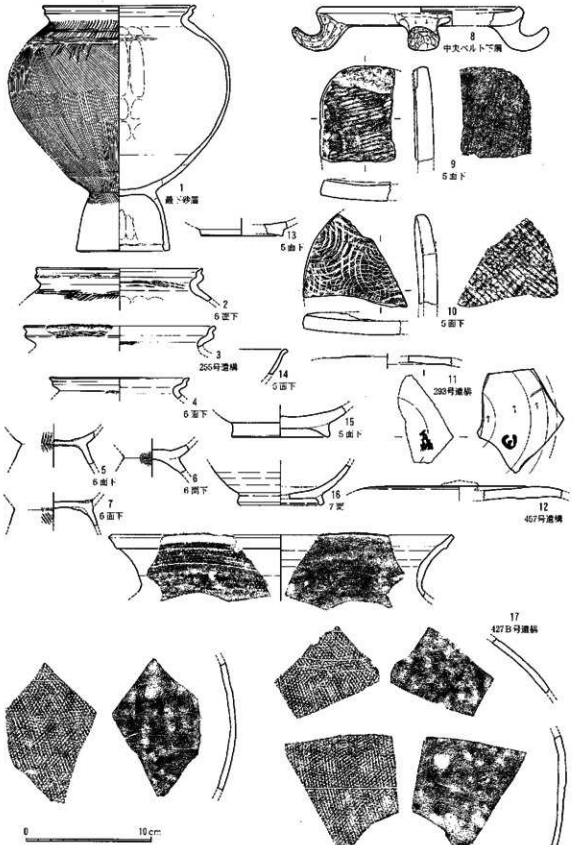


Fig. 55　その他の出土遺物実測図 1（1/3）

80・81は、同安窯系青磁である。81の外面には、篦描きの蓮弁文がみられる。70～79、82～113は、龍泉窯系青磁である。72は瓶であろう。73は香炉の底部である。113は、植木鉢もしくは香炉で、内面は施釉されていない。

114～151は白磁、152～187は青白磁である。129～134、135～139は包含層からではあるが、セットで出土している。188は、元青花の大皿片である。

189～227は、陶器である。189～207は天目茶碗、208～211は茶入れである。

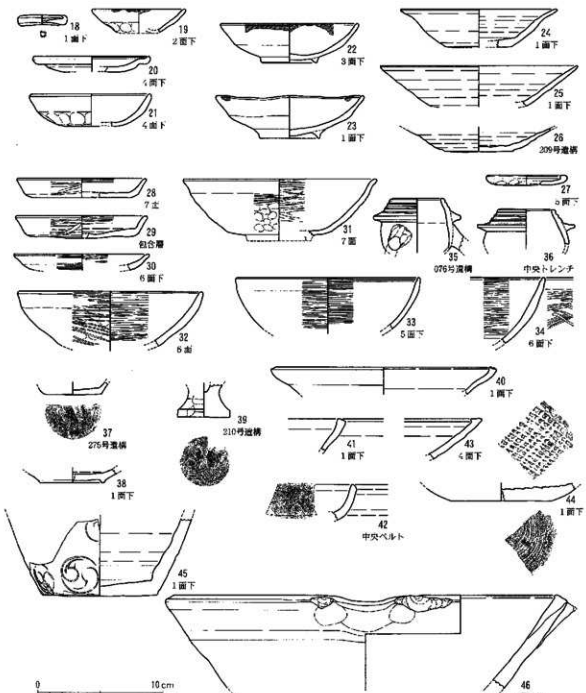
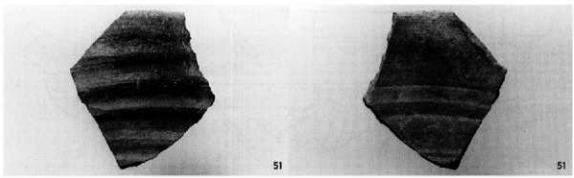


Fig.56　その他の出土遺物実測図2（1/3）



Ph.56　その他の出土遺物2

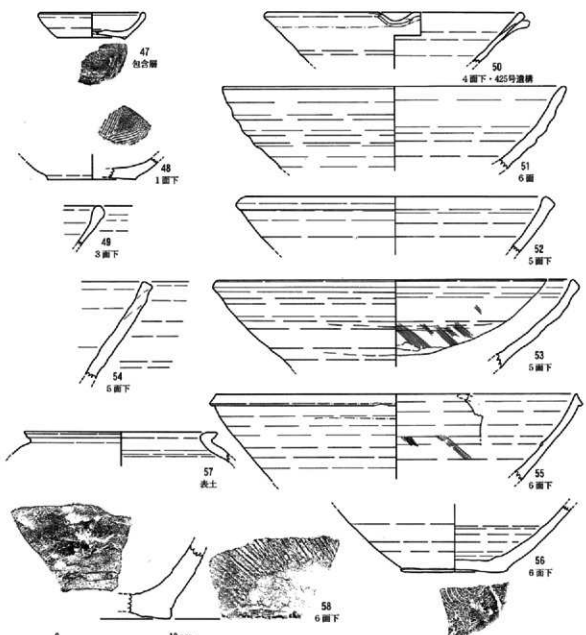


Fig.57　その他の出土遺物実測図3（1/3）

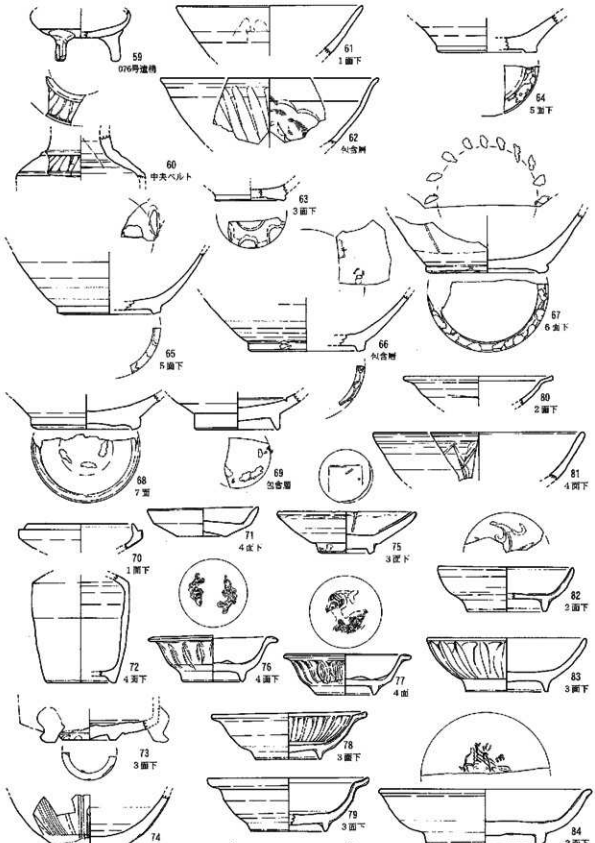


Fig. 58　その他の出土遺物実測図 4（1/3）

Ph. 57　その他の出土遺物 3

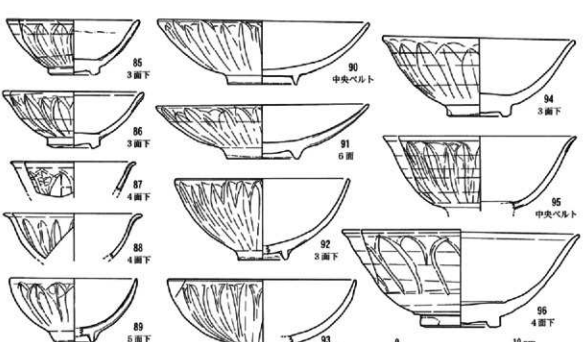


Fig. 59　その他の出土遺物実測図 5（1/3）

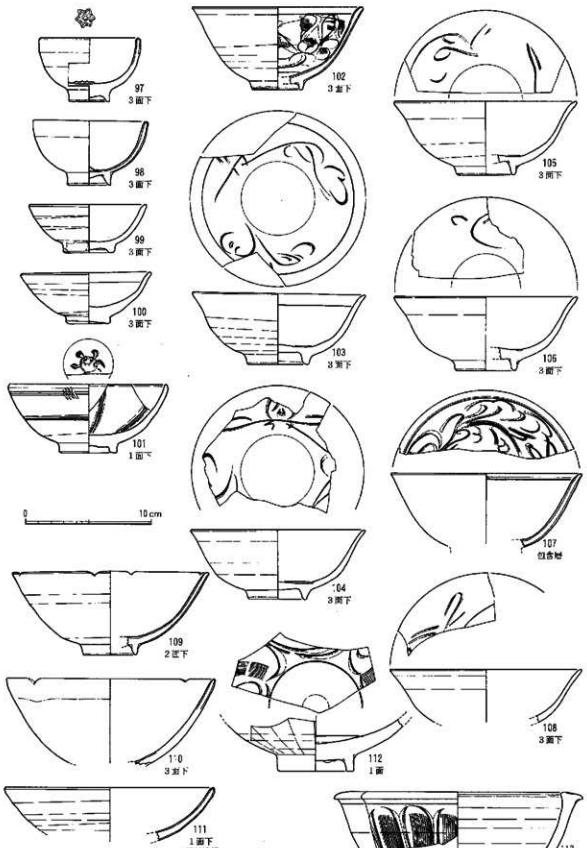
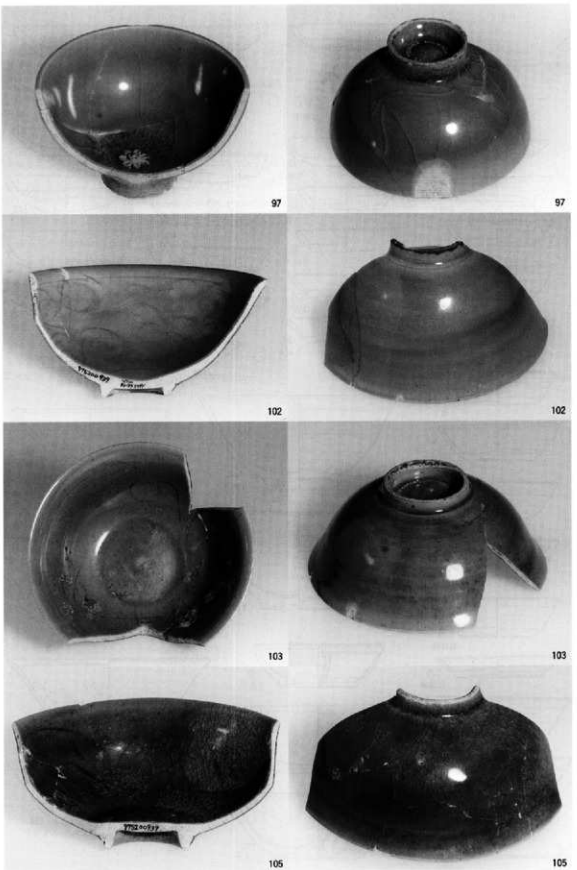


Fig. 60　その他の出土遺物実測図 6（1/3）



Ph. 58　その他の出土遺物 4

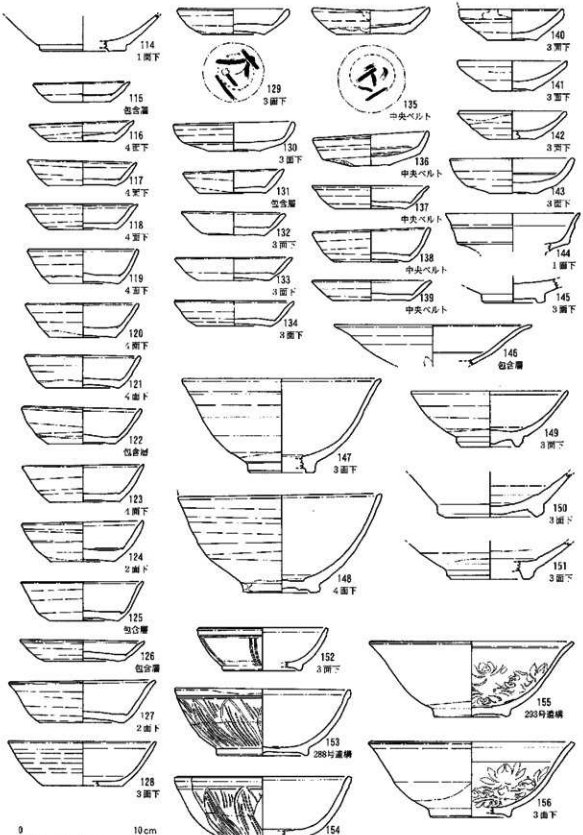


Fig. 61　その他の出土遺物実測図 7（1/3）

Ph. 59　その他の出土遺物 5

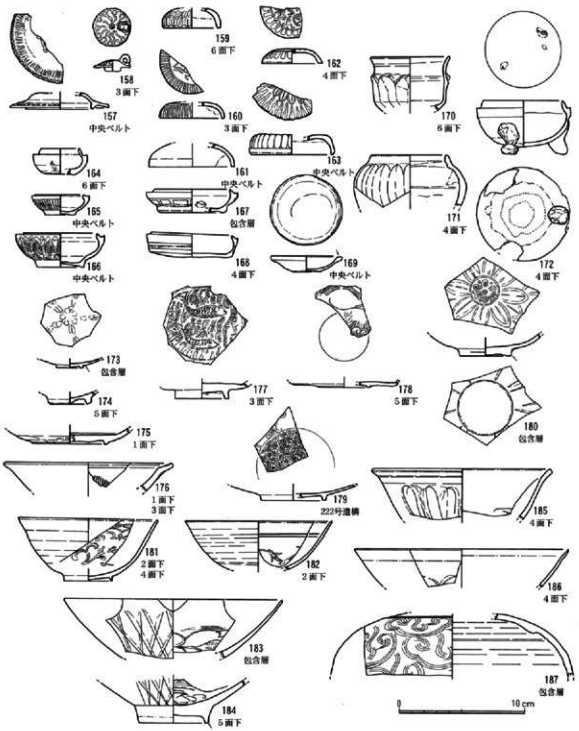


Fig. 62　その他の出土遺物実測図 8（1/3）

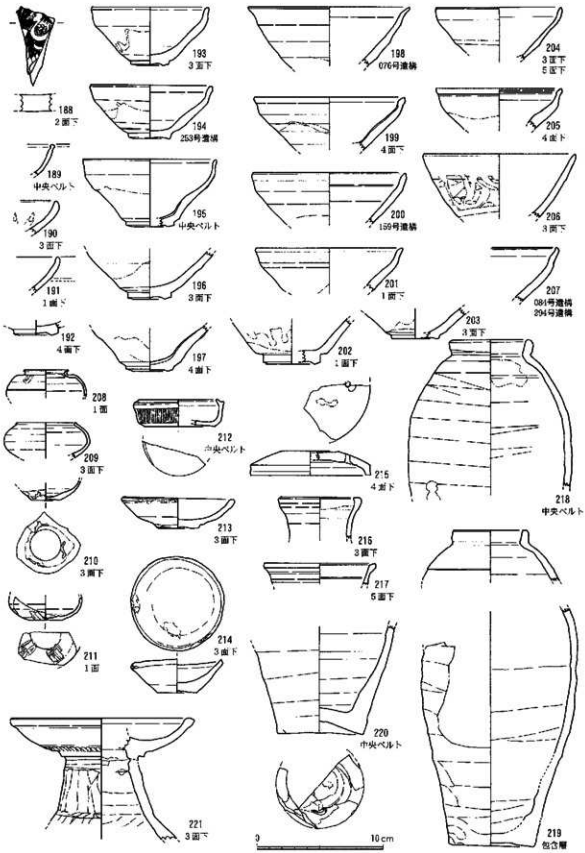
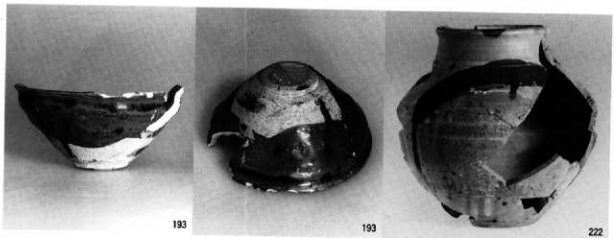


Fig. 63　その他の出土遺物実測図 9（1/3）



Ph. 60　その他の出土遺物 6

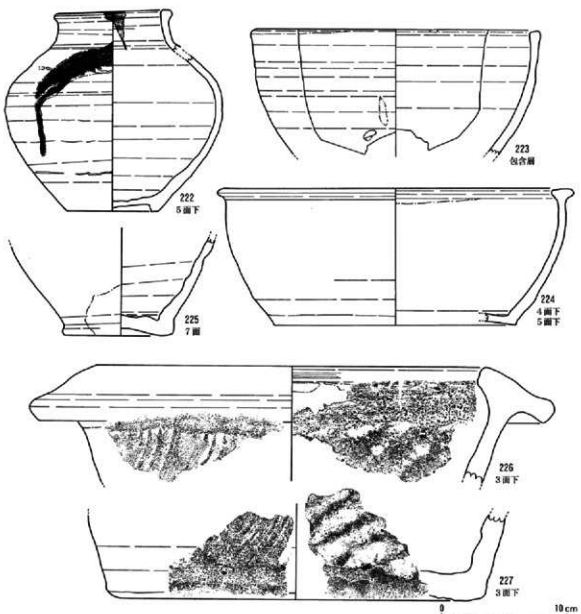


Fig. 64　その他の出土遺物実測図10（1/3）

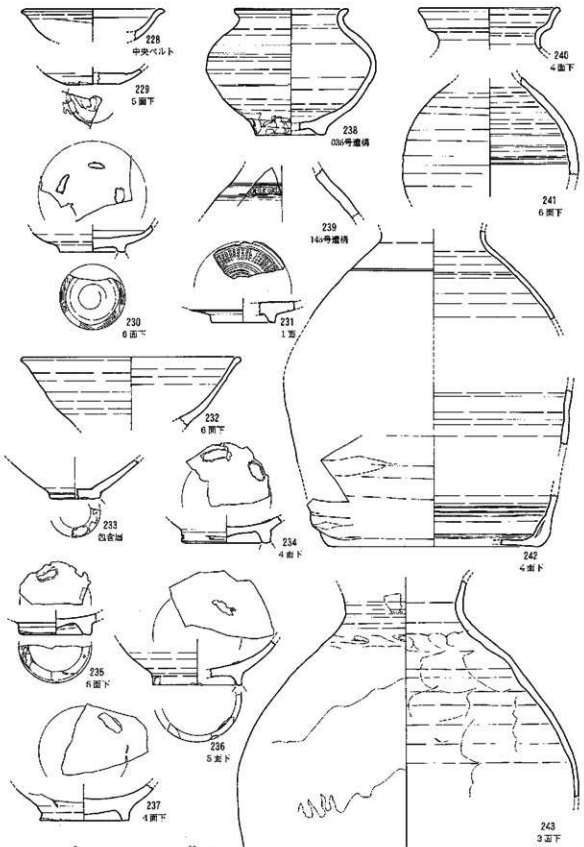


Fig. 65　その他の出土遺物実測図11（1/3）

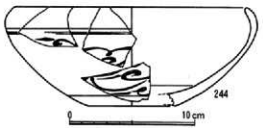
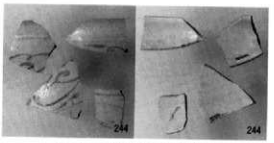


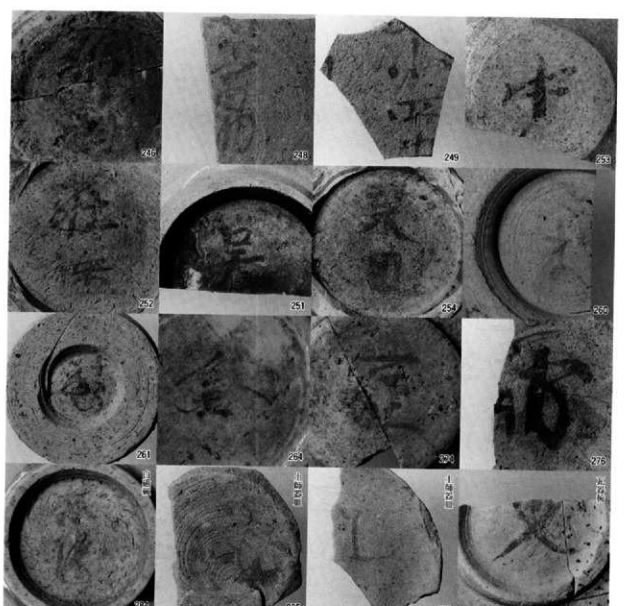
Fig. 66　その他の出土遺物実測図12（1/3）



Ph. 61　その他の出土遺物 7

228～243は、高麗・朝鮮王朝の陶磁器である。228～230・232～237・240は高麗、他は朝鮮王朝の産品である。

244は、ベトナム鉄絵陶器の鉢である。わずか4片の出土だが、図上復元できた。



Ph. 62　その他の出土遺物 8

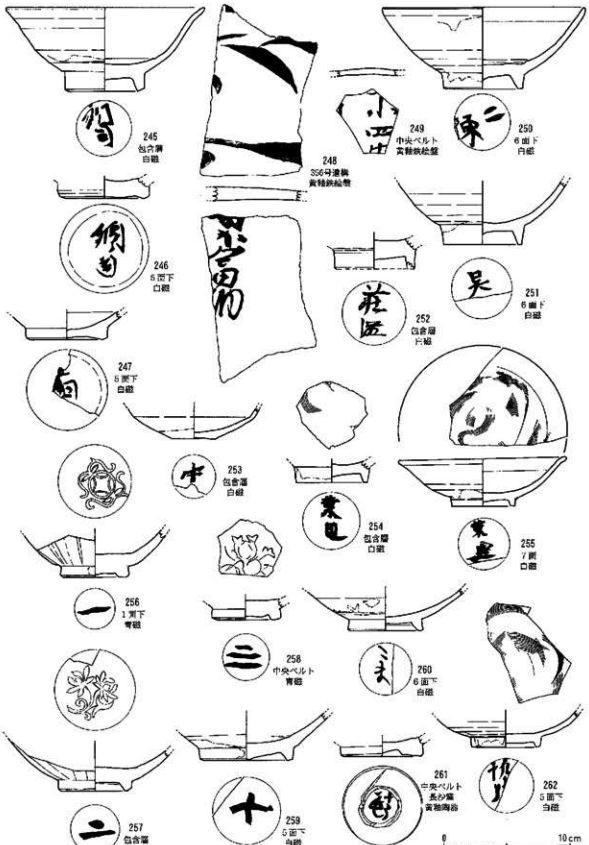


Fig. 67　その他の出土遺物実測図13（1/3）

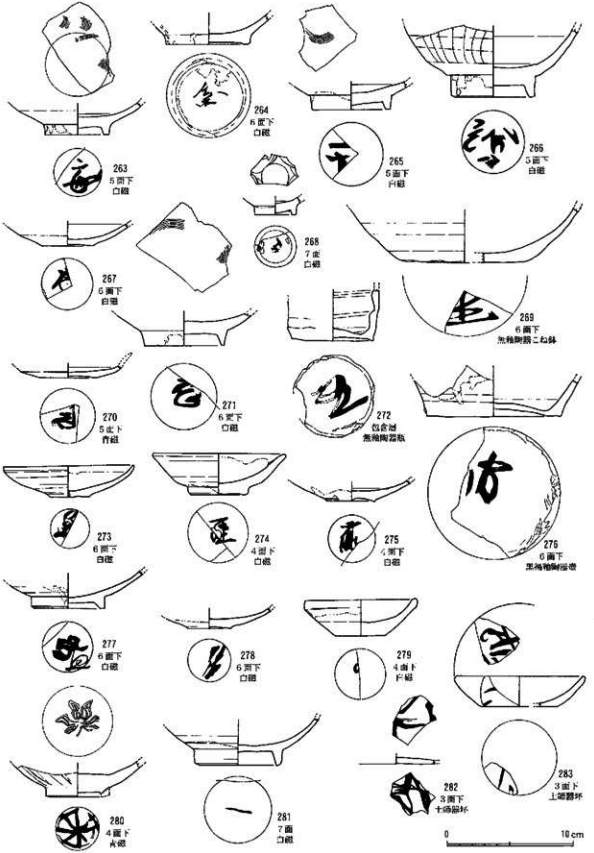
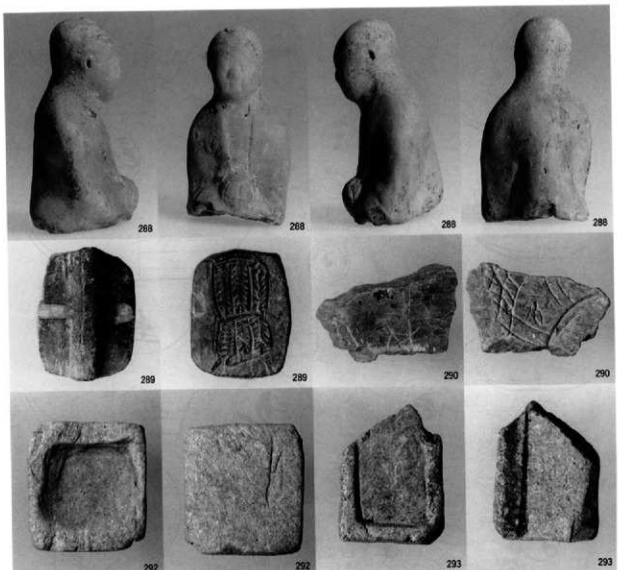


Fig. 68　その他の出土遺物実測図14（1/3）



Ph. 63　その他の出土遺物 9

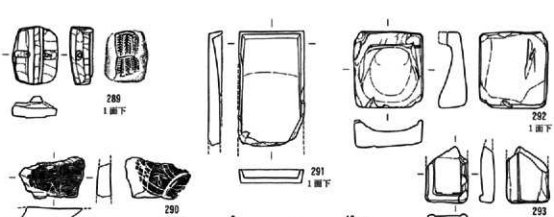


Fig. 69　その他の出土遺物実測図15（1/3）

Ph. 64　その他の出土遺物10

第102次調査では、78点の墨書資料が出土した。245～283・Ph. 62-284～287には、墨書資料の内、実測に耐えたものを示した。245・246-「綱司」、247-□「綱」、248-□「富綱」、249-□「小四」□／□、250-「二」／「陳」、251-「呉」、252-「荘」花押、253-「中」、254・255-「葉」花押、284-「林」花押、256-「一」、257-「二」、258-「三」、259-「十」、260-「こま」、261-仮名、262-□□、263～266・287-漢字、267～278-花押、280-記号、281-墨痕、282・283・285・286-習字ほか、と判読できる。

288は、土人形である。童子像で、類品は、博多遺跡群・新安沖沈没船などで出土している。

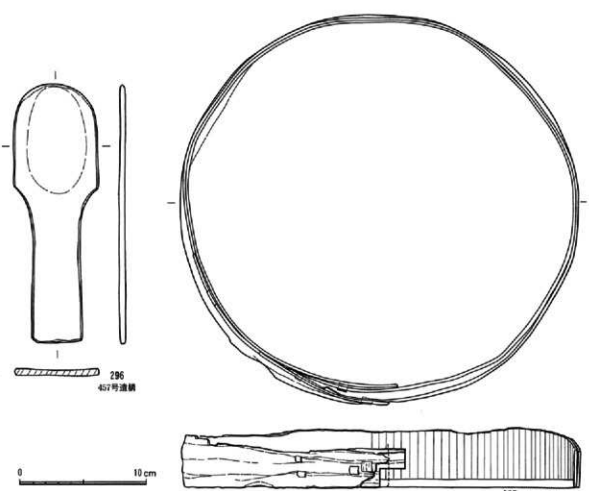


Fig. 70　その他の出土遺物実測図16（1/3）

289～295は、**石製品**である。289は、滑石のスタンプである。意匠は、米俵であろう。290も滑石で、両面に沈線で図案があるが、不明。291は赤間石の硯、292・293は滑石の硯である。294は、滑石石鍋である。完形であるが、底部中央に四角い穴が開いている。295は、砂岩製の石鉢である。

296～312は、**木製品**である。296・297については、457号遺構の項で述べた。298～308は、箸である。309・310は、扇の骨である。311・312は、短刀の鞘である。(313) に示したように、311と312を貼り合わせて一本の鞘となる。上部のくり込みは、呑み口式の柄がおさまる部分である。

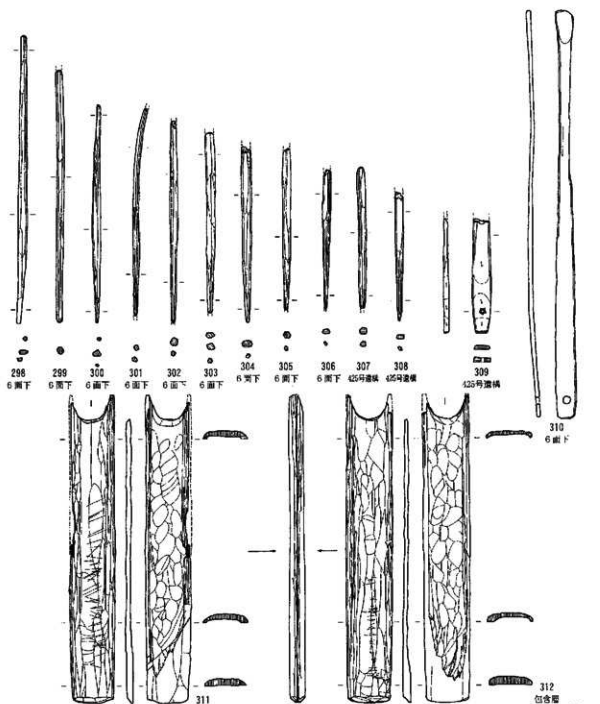


Fig. 71　その他の出土遺物実測図17（1/3）

今回の調査では、101点の銅銭が出土した。半数強の51点が、錆のため判読できなかった。内訳は、唐銭-5点、北宋銭-43点、南宋銭-1点、明銭-1点である。北宋銭には、3点の折二銭が含まれていた。また、背面の輪・郭が不明瞭または認められない銭が、2点含まれていた。

なお、模鋳銭の疑いのある銭・明銭など6点の銭について岩手県立博物館に委託して成分分析を行い、また102次調査出土銭に関するコメントを下関市立大学の櫻木晋一氏より頂戴した。併せて、本書末尾に掲載しているのでご参照いただきたい。

表1　第102次調査出土銅銭一覧

銭貨名	初鋳年	王朝名	年号	枚数	銭貨名	初鋳年	王朝名	年号	枚数
開元通寶	621	唐	武徳4年	5	元祐通寶	1086	北宋	元祐元年	3
至道元寶	995	北宋	至道元年	1	紹聖元寶	1094	北宋	紹聖元年	3
咸平元寶	998	北宋	咸平元年	1	元符通寶	1098	北宋	元符元年	3
景徳元寶	1004	北宋	景徳元年	2	聖宋元寶	1101	北宋	建中靖国元年	1
祥符元寶	1009	北宋	大中祥符元年	3	大観通寶	1107	北宋	大観元年	3
天禧通寶	1017	北宋	天禧元年	1	政和通寶	1111	北宋	政和元年	2
天聖元寶	1023	北宋	天聖元年	2	景定元寶	1260	南宋	景定元年	1
明道元寶	1032	北宋	明道元年	1	萬曆通寶	1576	明	萬暦4年	1
皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	6					
嘉祐通寶	1056	北宋	嘉祐元年	1	解読不能				51
熙寧元寶	1068	北宋	熙寧元年	2					
元豊通寶	1078	北宋	元豊元年	6	総数				101

本集計表は、遺物整理時に作成したもので、巻末の桜木集計とは若干異なる部分がある

表2　出土遺構別銅銭一覧

遺構番号	銭貨名	初鋳年	王朝名	径(cm)	備考
1面008	(　)道元寶			2.56	半道元寶か
1面008	景(　)元寶			2.48	景徳元寶か
1面008	元豊通寶	1078	北宋	2.5	折二
1面023	皇宋通寶	1038	北宋	2.37	
1面050	景定元寶	1260	南宋	2.43	
1面050	解読不能				折二
1面058	元(　)(　)□				
1面084	熙寧元寶	1068	北宋	2.33	
1面108	皇宋(　)(　)				皇宋通寶か
1面110	大観通寶	1107	北宋	2.43	
2面126	紹聖元寶	1094	北宋	2.36	左下キズか
2面136	聖宋元寶	1101	北宋	3.04	折二
2面142	元符通寶	1098	北宋	2.49	背面輪・郭なし
2面166	元豊通寶	1078	北宋		
2面173	解読不能				2枚錆着の1
2面173	解読不能				2枚錆着の2
2面184	紹聖元寶	1094	北宋	2.36	
2面195	紹聖元寶	1094	北宋	2.37	
2面195	皇宋通寶	1038	北宋	2.51	
2面203	解読不能				

遺構番号	銭貨名	初鋳年	王朝名	径(cm)	備考
2面203	元豊通寶	1078	北宋	2.5	
2面204	解読不能				
2面206	大観通寶	1107	北宋	2.45	
2面208	開元通寶	621	唐	2.25	背面輪・郭なし　星孔
2面212	元豊通寶	1078	北宋		
2面215	開元通寶	621	唐	2.42	背面上に月　薄い
2面215	元祐通寶	1086	北宋	2.42	
2面222	解読不能				
2面225	祥符元寶	1009	北宋	2.51	
2面225	解読不能				
2面225	解読不能				
2面225	解読不能				
2面225	解読不能				2枚錆着
2面225	解読不能				
2面225	解読不能				
2面225	解読不能				
2面225	(　)□□寶				
3面256	(　)厂□寶				
3面267	解読不能				
3面293	元□□□				
3面293	凵宋(　)寶				
3面293	解読不能				
3面293	□寧□寶			2.81	折二
3面293	解読不能				
3面293	冂定□匚				
3面296	祥符元寶	1009	北宋	2.45	
3面293・295・296	解読不能				
3面293・295・296	解読不能				

□は判読不能、(　)は欠字

A-1区-1面
開元通寶

1面
咸平元寶

A-1区-3面下掘り下げ
天禧通寶

A区-3面
天聖元寶

A-1区-2面-195
大観通寶

A-1区-中央ベルト1～4面下
政和通寶

A-1区-2面
元祐通寶

Fig. 72　出土銅銭拓本1 (1/1)

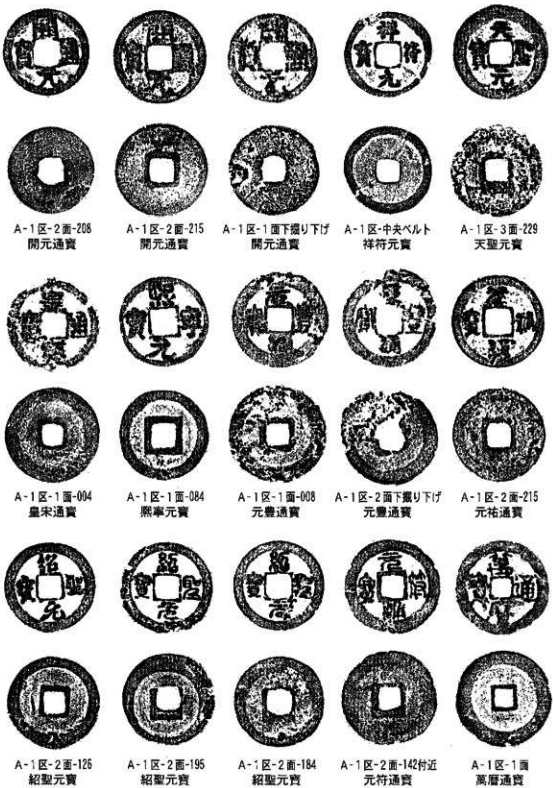


Fig. 73　出土銅銭拓本 2 (1/1)

第三章　第107次調査の概要

1．発掘調査の方法

第107次調査は、第102次調査と平行して矢板打ち込み・表土掘削を行い、第102次調査の終了を待って、調査作業に着手した。この過程で、当初予定されていた工区の内、南東端の10m分が、既存建物の解体の遅れから、対象範囲からはずれた。この部分は、第107次調査区と路地との間で、その後の第120次調査においても独立した矢板工の対象にはならず、結局調査から漏れることとなった。また、この部分の道路用地幅の南西半分は、すでに舗装し生活道路として共用されており、店舗等もあったことから、発掘調査対象とはできなかった。そのため、調査区としての幅は、わずか5mを設定できたに過ぎない。

発掘調査に際しては、上で述べた、南西端の取り残し部分にバックホーを据え、ダンプを横付けして残土を搬出することとしたが、残土置き場自体が調査区外で確保できず、第102次調査と同様に調査区の南西端の約5m分を残土置き場とし、ベルトコンベアーで残土を積み上げ、溜まったところで搬出、という手間をかけざるを得なかった。

発掘調査にあたっては、現地表下2mまでを表土として予め掘削することになった。これは、矢板の地中梁施工深さに関わって設定された深さである。それ以下については、人力による掘削・遺構

Ph.65　107次調査地点遠景（南東より）

検出・遺構精査を繰り返して、最終遺構検出面までの発掘調査を実施した。
なお、発掘調査着手は1998年3月18日、終了したのは同5月28日である。

2．基本層序

第107次調査地点の基盤層は、淡黄色の砂層である。これは、砂丘の上面にあたる。この砂丘砂層

Ph.66　土層断面（北東より）

Ph.67　土層壁硬化面（北より）

の上には、暗褐色の砂層が乗る。古代の包含層である。古代の遺構は、最下面の砂丘上面で検出されることが多いが、本来は暗褐色砂層上面並びにその中から掘り込まれたものと考えられる。

中世の包含層・生活面は、暗褐色・暗灰色を基調とした壌土質土層中に認められる。第107次調査では、顕著な整地層や生活面は存在しなかった。ただし、Ph.67に示したように鉄分が沈着した黄色の硬化面が部分的に広がっていた。凹凸が激しく、鉄分の滲み込みの程度によるものと思われ、これ自身が生活面を示すとは考え難いため、遺構検出面としては設定しなかった。

3．各遺構検出面の概要

（1）第1面

バックホーによる表土掘削後、第1面の確定のためトレンチを設けたが、顕著な土層の変化は認められなかった。そのため、一応調査区全体を水平に均して設定した遺構検出面が、第1面である。標高は、3.9~3.95mを測る。

検出できた遺構は極めて少なく、集石列（008号遺構）・溝（012号遺構）・陶磁器一括廃棄遺構（014号遺構）などが主要な遺構である。007号遺構は、調査が下層に進んで行くにつれ、井戸の掘り方であることが確認できた。そのほか、5基の井戸を検出したが、027号遺構（後述）を除いて、近世以後の井戸である。

14世紀前半以後の遺構を検出した遺構検出面である。

Ph.68　第1面全景（南東より）

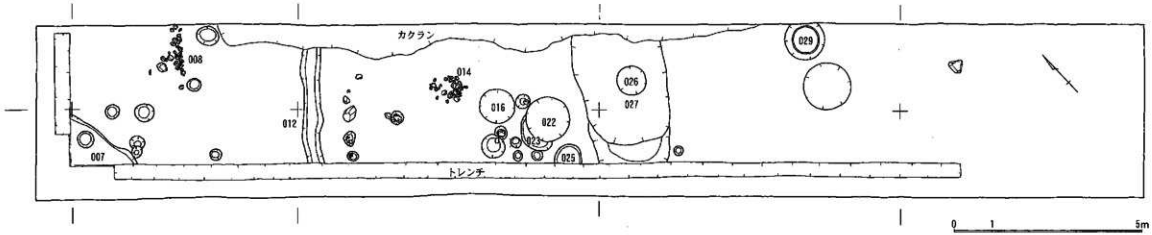


Fig. 74　第 1 面遺構平面図（1/100）

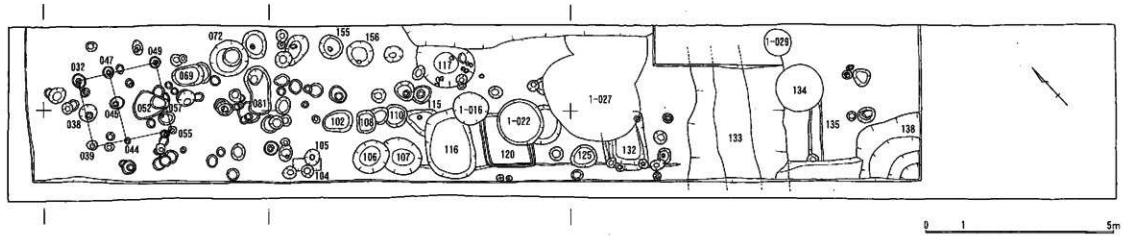


Fig. 75　第 2 面遺構平面図（1/100）

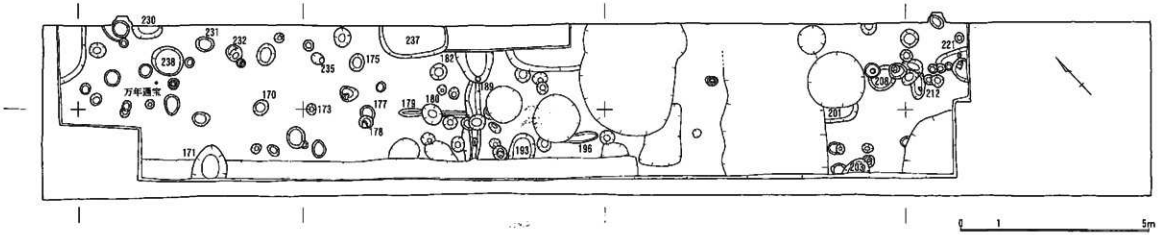


Fig. 76　第 3 面遺構平面図（1/100）

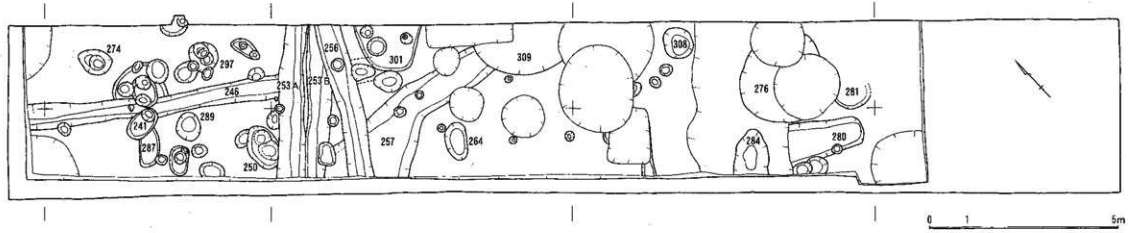


Fig. 77　第 4 面遺構平面図（1/100）

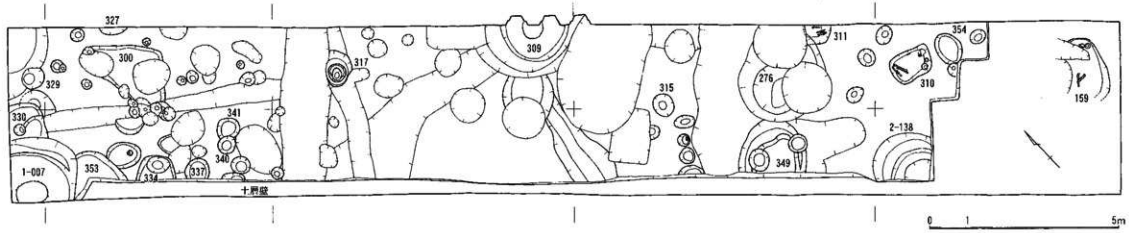


Fig. 78　第 5 面遺構平面図（1/100）

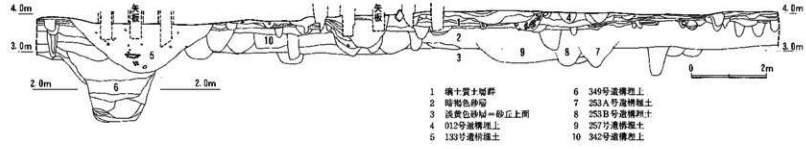
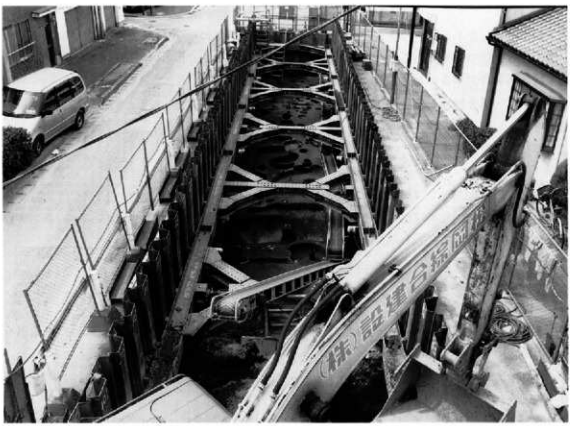


Fig. 79　107次調査南西壁土層実測図（1/100）



Ph. 69　第２面全景（南東より）

Ph. 70　第３面全景（南東より）

（2）第2面

第1面で設定したトレンチの底から、蓋を被った壺型陶器（104号遺構、後述）が検出されていた。第1面よりも下位の遺構であることは、トレンチ壁面から明らかで、この陶器の検出された高さを目安に、第2面を設定することとした。標高は3.4～3.55mである。

柱穴・土坑・溝を検出した。133号遺構（溝、後述）は、年代観からみて、明らかに第1面に属する遺構である。

12～13世紀の遺構を検出している。

（3）第3面

トレンチをさらに掘り下げたところ、ほぼ水平位置で湖州鏡が出土した。よって、その高さを目安に第3面を設定した。標高3.2～3.35mを測る。

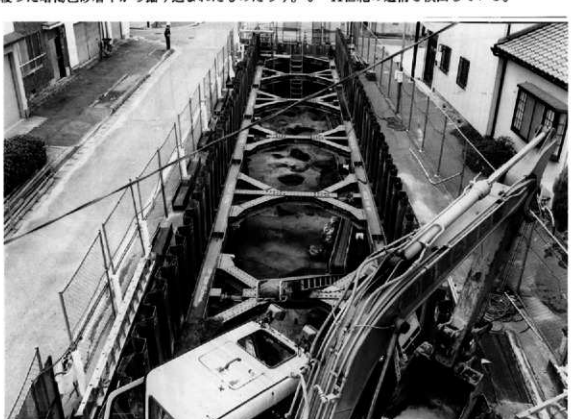
12世紀代の遺構を検出した。なお、面上から「万年通宝」が採集された。

（4）第4面

暗褐色砂の上面で設定した遺構検出面で、標高3.0～3.1mを測る。8～11世紀にいたる遺構を検出している。

（5）第5面

砂丘砂層上面にあたる。標高2.8～2.9mである。遺構の大部分は、第4面での検出漏れと、砂丘を覆った暗褐色砂層中から掘り込まれたものだろう。6～11世紀の遺構を検出している。



Ph.71　第4面全景（南東より）

4．遺構と遺物

A．古代以前の遺構と遺物

第107次調査地点は、本書に報告する他の調査地点とは異なり、砂丘が基盤となっている。そのため、特に古代以前の遺構が多数検出されており、特に一節を設け、報告することにする。

（1）埋葬遺構

第107次調査では、3基の土坑から人骨が出土しており、埋葬と認定した。人骨はないが、副葬品などから墓の可能性が推定できるという遺構は、想定できなかった。

なお、人骨に関する所見を九州大学の中橋孝博教授よりいただいたので、巻末に載せている。ご参照いただきたい。

159号遺構

第2面調査時、残土置き場の隅に、砂層の確認のためトレンチを入れたところ、頭蓋骨を切ってしまい検出できた埋葬遺構である。急遽該当部分の残土を脇に寄せ、土坑のプランを確認し精査した。残

Ph.72　159号遺構頭骨副葬土器出土状況（北より）

Ph.73　159号遺構（北西より）

土崩壊の危険が厳しく、そのため、短時間で調査・記録作成を済ませなくてはならなかったため、十分な精査ができなかった。土坑の平面が、人骨の配置に対して大きく膨らんでいるのは、そのための検出ミスであろう。

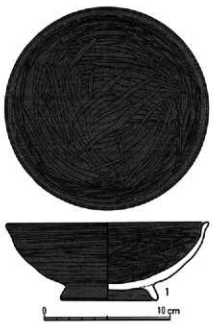


Fig. 80　159号遺構出土遺物実測図（1/3）

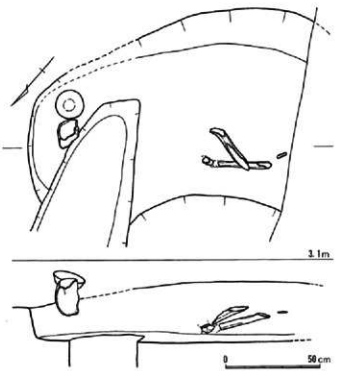


Fig. 81　159号遺構実測図（1/20）

Ph. 74　159号遺構出土遺物

なお、第2面調査段階での検出だが、出土層位的には、第5面に伴う遺構である。

人骨の遺存状態は悪く、頭蓋骨と大腿骨が検出されたのみである。鑑定結果によれば、熟年以上の女性で、仰臥位で埋葬されたものと推定される。

後頭部に接して、**黒色土器B類**碗が副葬されていた。Fig. 80に図示する。丸みの強い体部に高く外方に張った高台を付ける。口縁部は、小さく外反している。体部押し出し技法の痕跡は、認められない体部外面は、密な平行篦磨き、内面は横撫での上から左回りで篦磨きを行う。高台部分は横撫で、外底部は撫で調整である。全面に黒色処理が行われ、漆黒色を呈する。

10世紀後半から11世紀にかかる時期の、埋葬遺構であろう。

310号遺構

第5面で検出した、土壙墓である。墓壙は、おおむね100×75cmの長方形を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。

Ph. 75　310号遺構（西より）

Ph. 76　頭骨と副葬遺物（北西より）

頭蓋骨・右鎖骨・右上腕骨・左右大腿骨・脛骨が、遺存していた。人骨の所見から、熟年以上の男性で、右側臥位で埋葬されたと考えられる。

左肩の横から、副葬土器が出土した。Fig. 83−1は、土師器の坏である。底部は回転篦切り、体部は横撫で、内底部は撫で調整する。2は、**黒色土器A類**の椀である。腰が張った体部から、口縁部は緩く外反する。高台径は広く、「ハ」字型に開く。内外面ともに、密に分割篦磨きを行う。高台脇から外底部は、横撫で調整する。内面から口縁部の外面にかけて、黒色処理がなされ、漆黒色を呈している。また、外底部には「一」の篦記号が認められる。

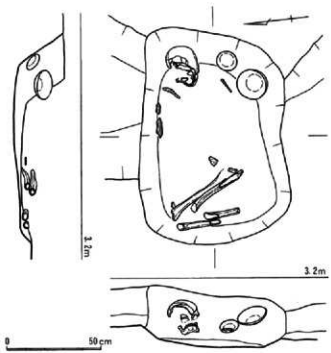


Fig. 82　310号遺構実測図（1/20）

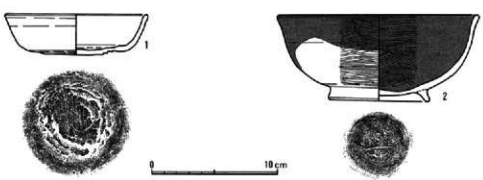


Fig. 83　310号遺構出土遺物実測図（1/3）

Ph. 77　310号遺構出土遺物

これらの出土遺物から、10世紀前半の土壙墓と考えるのが妥当であろう。

311号遺構

第5面から検出した土壙墓である。調査区全体を囲む鋼矢板に切られ、半ば以上を失っている。

人骨は出土しているが、下肢骨と上肢骨の一部が調査できたに過ぎない。人骨の所見から、男性で、おそらく成人と推定される。埋葬姿勢は、不明である。

副葬品はないが、310号遺構と同様の10世紀前半と推定したい。

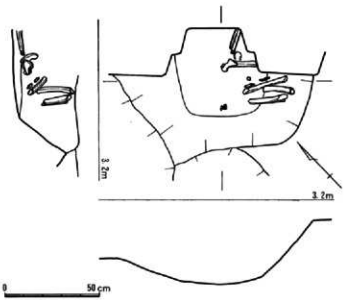


Fig. 84　311号遺構実測図（1/20）

Ph. 78　311号遺構（南西より）

（2）土坑

237号土坑

第3面で検出した土坑である。調査区の壁にかかっているので、全容は知り得ない。

出土遺物の内、実測に耐えたものを Fig. 85に示した。1・2は、**須恵器**である。1は、蓋で、端部を小さくおり曲げて受け状に作る。内外面は横撫で、外面天井部は回転篦削りを行っている。2は、平底坏である。外底部は回転篦切り、内外面は横撫で調整する。3は、**土師器**の甕である。口縁は、

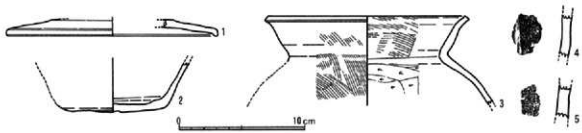


Fig. 85　237号遺構出土遺物実測図（1/3）

「ハ」字型に大きく外反する。外面は刷毛目調整で、口縁部はさらに横撫でを加える。口縁部内面は横位の刷毛目調整、体部内面は篦削りである。4・5は、土師器の焼塩壺の破片である。内面には、目の細かい布目圧痕が見られる。

8世紀末頃の土坑であろう。

274号遺構

第3面から第4面に掘り下げる途中で検出した遺構である。まず、後述する胞衣壺が出土し、第4面上で土坑のプランを検出したものである。したがって、胞衣壺と土坑とは、無関係という可能性も考えられる。検出レベルからみれば、胞衣壺は第3面付近からの掘り込みであろう。

土坑底面からは、木炭と炭粒が出土している。

Fig. 87に、胞衣壺の土器を示す。1は、須恵器の蓋である。天井部は平坦で、低平な擬宝珠型のつまみがつく。2は、土師器の広口壺である。口縁部の内外は横撫で、体部外面は縦の刷毛目調整で、下位の3分の1は擦過痕が刷毛目を消してる。体部内面は削りで、底部は指押さえする。

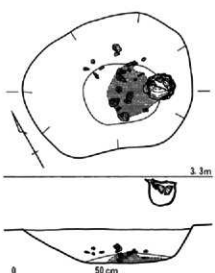


Fig. 86　274号遺構実測図（1/20）

Ph. 79　274号遺構（西より）

蓋を裏返して、壺の口に落としてあった。

胞衣壺は、8世紀後半に属するものと考えられる。

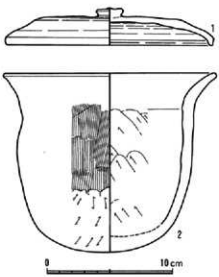


Fig. 87　274号遺構出土遺物実測図(1/3)

Ph. 80　274号遺構出土遺物

280号遺構

第4面で検出した土坑である。灰褐色の砂質土を埋土とする。

出土遺物を Fig. 89に示す。1・2は、**土師器**である。1は坏で、口縁部は緩く屈曲し、内面に暗文を配する。薄手で、茶色を呈する。搬入土器であろう。2は、皿の底部である。内面は平滑に研磨されている。3は、**緑釉陶器**の碗である。胎土は暗紫灰色で、肌理が細かく、須恵質に焼成されてい

Ph. 81　280号遺構（北より）

る。濃緑色の釉を、全面に薄くかける。東濃窯の製品であろう。4は、土師器の甕である。口縁部内面は横刷毛、外面は横撫で、体部外面は縦に刷毛目調整する。5は、須恵器の甕である。外面には、刷毛目痕跡が薄く残っている。6・7は、土師器の焼塩壺である。内面には、目の細かい布目圧痕が見られる。外面は指押さえである。

緑釉陶器の年代観から、10世紀後半の土坑と考えられる。

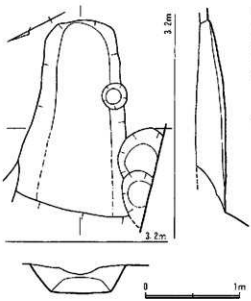
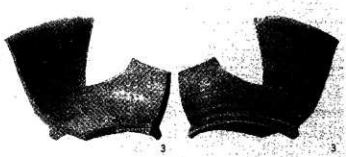


Fig. 88　280号遺構実測図（1/40）



Ph. 82　280号遺構出土緑釉陶器

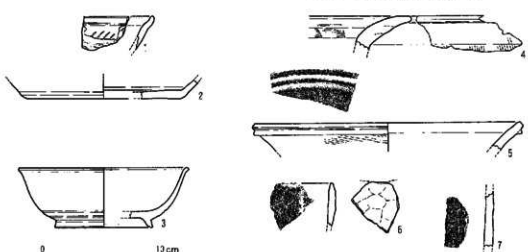


Fig. 89　280号遺構出土遺物実測図（1/3）

284号遺構

第5面で検出した土坑である。後述する133号遺構（溝）の底に、わずかに検出されたに過ぎない。

土師器片・須恵器片が出土しているが、図示できたのは、土師器の2点にとどまる。Fig. 90-1は、坏である。底部は篦切り、体部は横撫でで、内底部は静止撫でを施す。2は、甕である。横撫で調整する。古代の遺構であるが、時期を示すにはいたらなかった。

Fig. 90　284号遺構出土遺物実測図（1/3）

（3）井戸

349号遺構

第5面で検出した遺構である。調査区の壁にかかっているため、全容を知り得ないが、ほぼ円筒形の土坑である。Fig.79の土層図でも看取できるが、井側の痕跡は全くなく、素掘りである。坑底も現在の湧水標高には達しておらず、井戸とする根拠は薄い。発掘調査時には、その円筒形の形状と、深さがあることから、井戸跡と考えており、本報告書でも、発掘調査時の所見に従うこととした。

出土遺物の内、実測に耐えたものを**Fig.91**に示した。1～8は、**須恵器**である。1～3は、坏蓋である。いずれも、口縁端部を下方に折曲げている。内外面は横撫でで、天井部外面は回転篦削りする。4～7は、坏である。4・5には、低い角高台が貼り付けられている。6・7は体部片で、高台の有無は不明である。内外面とも、横撫で調整する。8は、脚部の破片である。全形は知り得ない。

9～12は、**土師器**である。9は、坏である。底部は回転糸切りされる。体部は、横撫で調整である。10・11は、甕である。外面は縦方向の刷毛目、口縁部内面は横刷毛、体部内面は篦削りする。12は、移動式竈の脚部分であろう。外面は撫で調整、内面は粗く篦削りする。

13は、**転用硯**である。須恵器の大甕の胴部破片を使ったもので、周囲の破面には特に加工した形跡はない。本来さらに大きかったものであろうか。外面には平行叩き痕が見られるが、滑らかに擦り潰している。内面は、格子叩き目が使用のため摩耗しており、一部には炭が染み込んでいる。

14は、**石玉**である。

8世紀後半の遺構と考えて大過ないであろう。

Ph.83　349号遺構（北より）

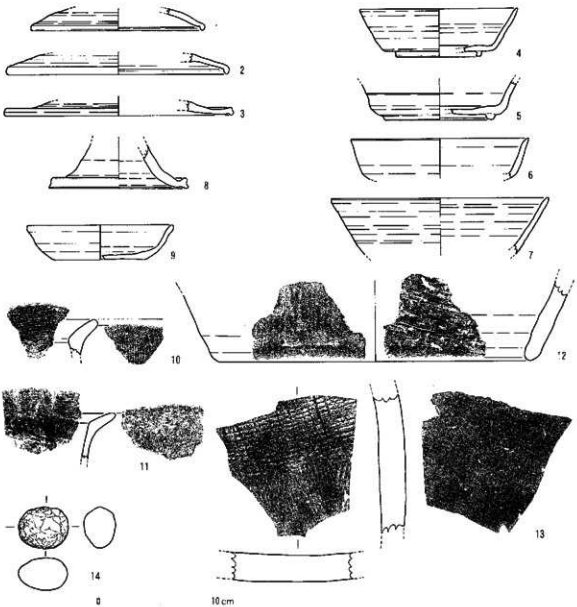


Fig.91　349号遺構出土遺物実測図（1/3）

（4）溝状遺構

246号遺構

第4面で検出した、溝状遺構である。調査区の北西から南東に向かって、一直線に延びている。幅は、60～70cmを測る。

出土遺物をFig.92に示す。1～5は、須恵器である。1・2は蓋で、口縁端部は下方向に屈曲している。3・4は、坏の高台部分である。低平な高台が、貼り付けられている。5は、甕の口縁部である。口縁端部は、垂直方向に面取りされている。外面は刷毛目を施で消し、内面は横施で調整する。

6は、花崗岩の円礫である。敲打で丸く整えているが、側面には摩耗した痕跡がみられ、磨り石のように用いられたものと推測される。

8世紀後半代の溝である。

Ph. 84　246号遺構（北西より）

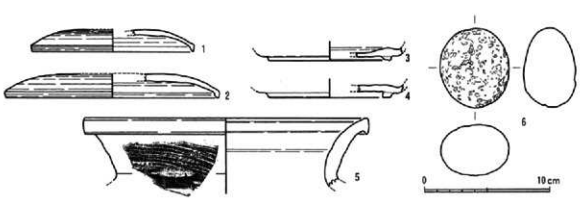


Fig. 92　246号遺構出土遺物実測図（1/3）

257号遺構

第4面で検出した溝状遺構である。調査区中央を、東西に横切る。

出土遺物を Fig. 93に示す。1～6は、**須恵器**である。1・2は坏蓋、3・4・6は高台坏、5は平底坏である。坏蓋の端部の折り返しは小さく、2にいたってはわずかに屈曲するに過ぎない。高台は、高さを増し、やや外方に踏ん張る。7は、**土師器**の高台坏である。高台は断面三角で、外方に張る。8は、**焼塩壺**であろうか。外面は指押さえ、内面は撫での様で、布目の圧痕はみられない。

9世紀初頭に位置づけるのが妥当であろう。

Ph.85　257号遺構（北西より）

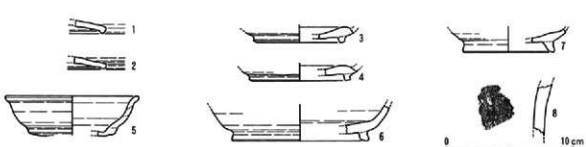


Fig.93　257号遺構出土遺物実測図（1/3）

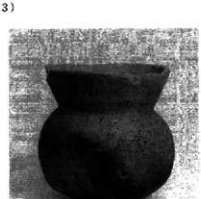
342号遺構

第5面で検出した溝状遺構である。調査区中央を、南北方向に横切る。幅、50～120cmと一定しない。

完形の土師器小壺・砥石・勾玉が出土した。Fig.95に図示する。1は、土師器の小壺である。口縁部から体部上半は横撫で、体部下半は篦削りする。内底は指押さえで、体部内面は指で削り上げる。外底部中央には、指で突き上げたくぼみがみられる。

2は砥石、3・4は勾玉である。

6世紀代の溝であろう。



Ph.86　342号遺構出土遺物

Ph.87　342号遺構（北西より）

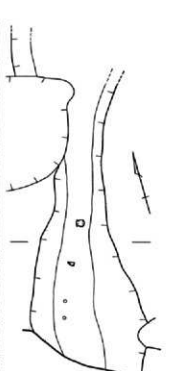


Fig.94　342号遺構実測図
(1/40)

Fig.95　342号遺構出土遺物実測図（1・2…1/3，3・4…1/1）

B．中世の遺構と遺物

（1）祭祀関連遺構

今回の発掘調査では、経筒埋納遺構と鏡・土師器などを埋め込んだ遺構が調査された。本書では、両遺構をあわせて一節をたて、「祭祀関連遺構」として報告する。

104号遺構

第1面で設定したトレンチの底から顔を覗かせたもので、第2面において精査した。掘り込み面は、第1面と第2面の間にあるものと思われる。まず、筒型の陶器が直立しているのを確認した訳だが、その部位から同質の陶器の蓋片が出土しており、また、筒の口縁部やや下には、蓋の口縁破片が、原位置を保って貼り付いていた。それらから、Ph.89の下段に示す様な状況が復元できた。埋納土坑は、長径35cm、短径29cmの楕円形を呈し、その中に蓋をかぶせた陶器を直立させていた。埋土中・陶

器内には、周囲とほとんど変わらない土壌が詰まっていただけで、特筆すべき要素はない。

Fig. 97の1は蓋で、天井部には目痕が見られる。2は筒である。ともに灰緑釉を施す。これらは経塚に埋納する経筒として焼かれた陶器であり、104号遺構についても、簡略ではあるが、経塚の一種と見て大過なかろう。経筒の類例としては、12世紀前半の出土例が知られている。

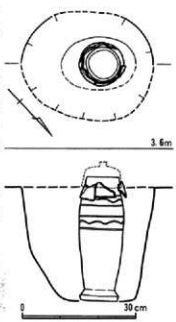


Fig. 96　104号遺構実測図
(1/10)

Ph. 88　104号遺構出土遺物

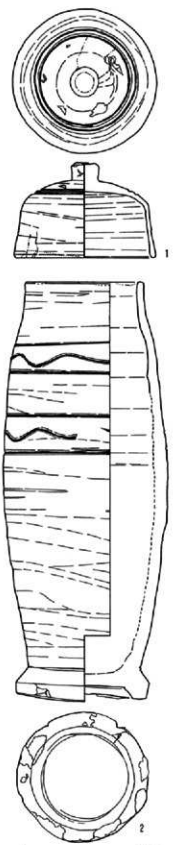


Fig. 97　104号遺構出土遺物実測図
(1/3)

Ph. 89　104号遺構（北東より）

171号遺構

第２面で設定したトレンチの底で確認した遺構で、第3面において検出・精査した。楕円形を呈する土坑で、土層的には分層できるが、埋土全体を通じて炭粒を多く含み、鉄釘が散乱するなど、埋積状況に時間差を想定することはできない。また、埋土中程から、遺存状態は極めて悪かったが、木製容器と思われる木質を確認した。木製品の上端とほぼ同レベルからは、土師器皿・坏・鉄鉄・湖州鏡が水平位で出土しており、埋納されたものであろう。皿・坏・鉄は直に重ねてあったが、坏の口縁部は一部を除いて欠失していた。これらの点から、何らかの祭祀的な意味を持った埋納土坑と考えるのが妥当だろう。

出土遺物をFig.99に示す。１・２は、土師器の皿・坏である。皿が偏平な点、坏が薄手でロクロ目が強い点など、通有の土師器とは若干異なる特徴を持つ。３は、青磁の小碗である。初期龍泉窯系青磁である。小破片が出土した。５は、

Ph.90　171号遺構出土ガラス片

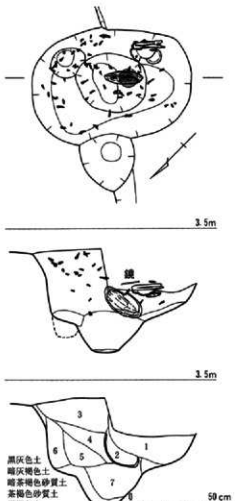


Fig.98　171号遺構・土層実測図（1/20）

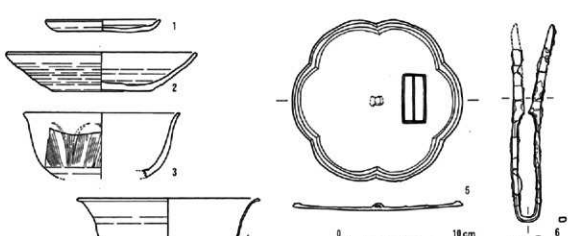


Fig.99　171号遺構出土遺物実測図（1/3）

Ph.91　171号遺構（北西より）

湖州鏡である。銘文は判読できなかったが、福岡市埋蔵文化財センターでX線を当てた結果、末尾が「照子」であることは確認できた。6は、鉄鉢である。4は、ガラス容器の口縁である。171号遺構からは、熱を受けて変形したガラス容器片とガラス滓が出土している(Ph.90)。いずれも表面の風化は著しく、また歪が激しいため接合できなかったが、黄緑色の薄手のガラスで、同一個体と考えられる。

青磁小碗、土師器の年代観から、12世紀前半を当てることができよう。

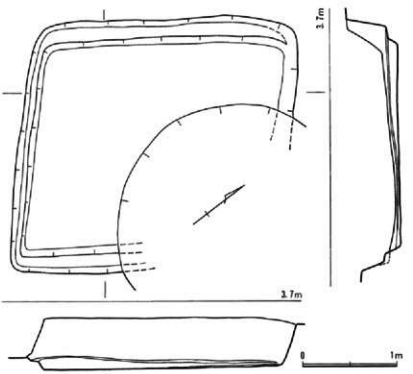


Fig.100　120号遺構実測図（1/40）

Ph.92　120号遺構（北東より）

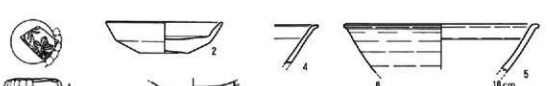


Fig.101　120号遺構出土遺物実測図（1/3）

（2）土坑

120号遺構

第2面で検出した土坑である。ほぼ140cm四方の、やや歪んだ正方形を呈する。南西壁は、トレンチのため低まっているが、北西壁の高さは、38cmを測る。北東壁以外では、床面から10～15cmで段がつき、二段になる。埋土は灰色土であるが、段部分から壁側では白色粘土が混じっており、裏込め状となる。おそらく、板壁を立てていたものであろう。板壁の内のりは、125×110cmとなる。

出土遺物をFig.101に示す。1は、**青白磁**の合子蓋である。天井には印花文で、花を描く。2は**青磁**皿である。龍泉窯系。3～5は、**白磁**である。この他、土師器小片が出土している。

12世紀後半の方形竪穴状土坑であろう。

132号遺構

第2面で検出した土坑である。150×110cmの長方形を呈し、各隅には柱穴を設ける。床面は、中

Ph.93　132号遺構（南西より）

Fig.102　132号遺構出土遺物実測図（1/3）

央部がやや深くなる。検出面から最深部までの深さは77cmを測る。前述の120号遺構とは、180cmの間をおいて平行するが、遺物の示す年代観は異なっており、同時並存したものとは考えられない。

出土遺物を**Fig.102**に示す。1～3は、**土師器**の皿である。完形品で出土した。底部は回転糸切り、内底部には**静止**撫でを加え、外底部に板状圧痕がつく。4は、**東播系須恵器**の鉢である。5・6は、**白磁**である。ともに口縁端部の釉を削り取って、露胎とする。7は、**無釉陶器**のこね鉢である。

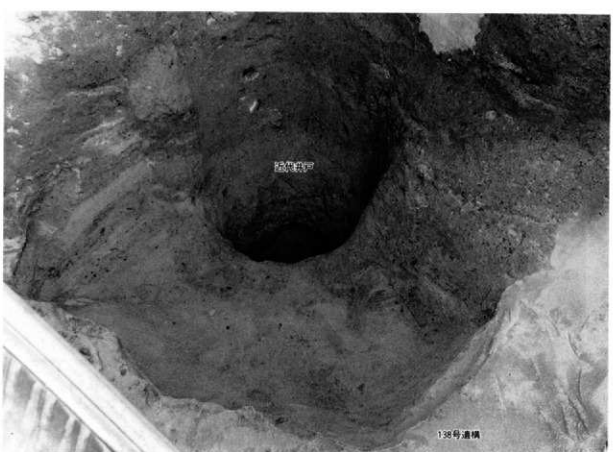
この他、常滑甕片・陶器片・鉄小刀などが出土している。

13世紀代の方形竪穴状土坑であろう。

138号遺構

第2面で検出した大型土坑である。第2面から土坑床面までの深さは、210cmを測る。素掘りの井戸の可能性もあるが、中世の井戸にしては井側がみられない点、床面の最深部でも標高1.6m前後と湧水レベルに達しない点、などから疑問が残る。大型の廃棄土坑と考えた方が、妥当であろう。

出土遺物を**Fig.103**に示す。1～10は、**土師器**である。1は、盃である。口径5.3cm、底径3.0cm、器高2.8cmと筒状を呈する。在地産であるが、特異な形状と言える。2～5は、皿である。小振りで器高が高いもの(2)、体部の立ち上がりが急なもの(3)、偏平なもの(4・5)がある。6～9は、坏である。体部が丸みを持って急角度で立ち上がるもの(6・7)、緩く開くもの(8・9)とがある。1～9の底部は回転糸切りで、体部は横撫でする。10は、**吉備系土師質土器**碗である。11～15は、**青磁**である。11は椅腰の香炉、12～15は碗である。13は東口碗で、体部外面に蓮弁文を刻む。16は、褐



Ph.94　138号遺構（北より）

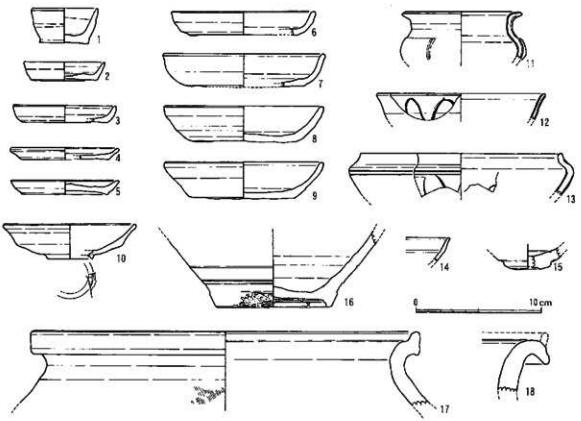


Fig.103　138号遺構出土遺物実測図（1/3）

釉陶器の甕である。内外面とも施釉されている。外底には、目土が付く。17は瓦質土器の甕である。口縁を屈曲させ、常滑風に面取りする。18は、常滑焼きの甕である。中野編年の6a型式にあたる。

これらの遺物から、13世紀後半の土坑と考えることができよう。

276号遺構

第5面で検出した大型土坑である。近世以後の井戸2基に切られているため全形は知り得ないが、差し渡し200cmの円形を呈し、深さは130cmを測る。

出土遺物をFig.104に示す。1・2は、土師器の碗である。丸底に、高い高台を貼り付ける。内面は平滑に磨いている。3・4は、白磁碗である。5は、滑石の石錘である。6は、土師質の土錘である。

11世紀後半の廃棄土坑であろう。

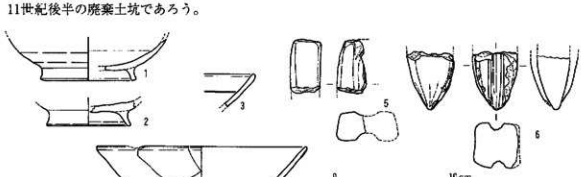


Fig.104　276号遺構出土遺物実測図（1/3）

（3）井戸

007号遺構

第1面で検出したが、最終的には第5面において井側を確認、井戸と認定した。4分の3程が調査区外となるため全体を調査できていないが、おおむね径3m程の掘り方に、結い桶を据えて井側としている。

出土遺物をFig.106に示す。1～4は、土師器の皿・坏である。底部は、回転糸切りする。5は、東播系須恵器の鉢である。6は、常滑焼きの甕である。中野分類の6b型式にあたる。7は、白磁の口禿皿である。8・9は、青磁の小鉢である。9の体部外面には、鏑連弁文が認められる。10～12は、陶器である。10は褐釉陶器の合子蓋で、天井部には印花文が見られる。11は、灰釉をか

Ph.95　007号遺構（東より）

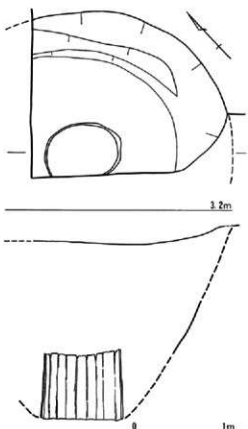


Fig.105　007号遺構実測図（1/40）

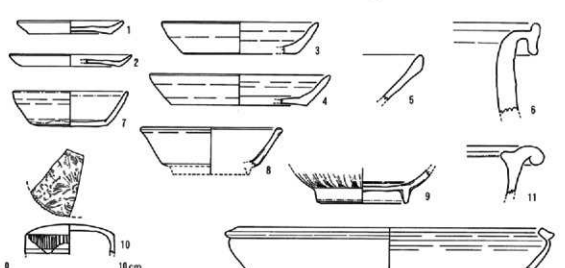


Fig.106　007号遺構出土遺物実測図（1/3）

けた盤または鉢である。口縁部上面から体部外面にかけては、露胎となる。12は、褐釉陶器の鉢である。この他、青白磁皿片・瓦片・鉄釘が出土している。

13世紀後葉の井戸であろう。

022号遺構

第1面で検出した井戸である。直径120cmの掘り方を持つ。井戸側は結い桶である。

出土遺物を**Fig.107**に示す。1は、碧玉の**管玉**である。古代以前の遺物が、混入したものであろう。2は、**瀬戸焼き**である。黄灰色の灰釉を施す。口縁をフリル状に作る。大窯の3段階・4段階あたりの製品であろう。3は、**青磁**の香炉である。龍泉窯系青磁で、脚付近の破片のみが出土した。4・5は、**常滑焼き**の甕である。4は、胴部下位の破片である。粘土帯の接合部分に、叩き目が並ぶ。5は、底部片である。4と5については同一個体の可能性があるが、部位としては離れており、器厚も異なっており、確認はできなかった。

この他、白磁（口禿）・青磁（蓮弁文）・近世初頭の国産陶器などが出土している。

17世紀初頭前後に位置づけるのが、妥当であろう。

Ph.96　022号遺構（東より）

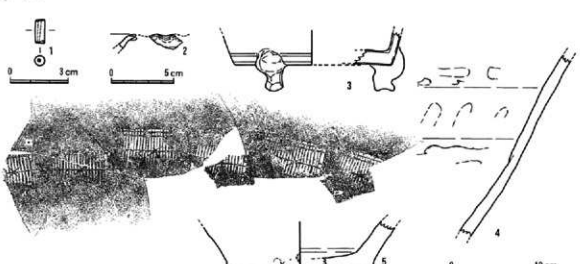


Fig.107　022号遺構出土遺物実測図（1…1/2，2・3…1/3，4・5…1/4）

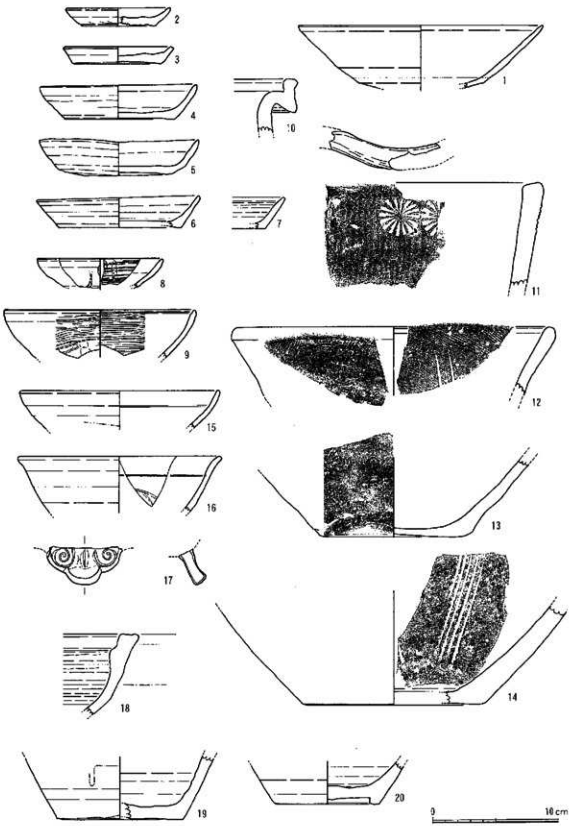


Fig.108　027号遺構出土遺物実測図（1/3）

027号遺構

第1面で検出した井戸である。北東側で別の遺構と切りあっており、第4面遺構検出時点で識別できた。第4面上での実測では、掘り方は、長径230cm、短径200cmの楕円形を呈し、その中央から東寄りに径約70cmの井側を掘える。井側は、結い桶であろうが、木質の遺存状態は悪く、確認できていない。

Ph. 97　027号遺構（南西より）

出土遺物をFig. 108に示す。1は、古式土師器の高坏である。2～7は、土師器の皿・坏である。底部を、回転糸切りする。8・9は、楠葉型瓦器である。10は、常滑焼きの甕である。6a型式にあたる。11～13は、瓦質土器である。11は火鉢、12はすり鉢、13はこね鉢である。14は、備前焼のすり鉢である。全体に赤色化しておらず、Ⅲ期以前に編年されるものであろう。15～17は、青磁である。15は同安窯系、16・17は龍泉窯系で、17は水盤などの装飾的な脚であろう。18～20は、陶器である。18はこね鉢で、口縁部に褐釉をかける。19・20は、褐釉の壺である。

14世紀前半の井戸である。

309号遺構

第5面で検出した井戸である。過半が、調査区外で、井側には、結い桶を掘えている。

Ph. 98　309号遺構（西より）

Fig. 109-1は、口禿の白磁皿である。2は、青磁小鉢、3は褐釉陶器の茶入れである。4～16は、陶器である。4・5・7は黄釉の盤、6・8は褐釉の鉢である。9は壺の口縁で、無釉である。10～13は、壺または瓶の底部である。14～16は、甕の口縁である。

13世紀後半の井戸であろう。

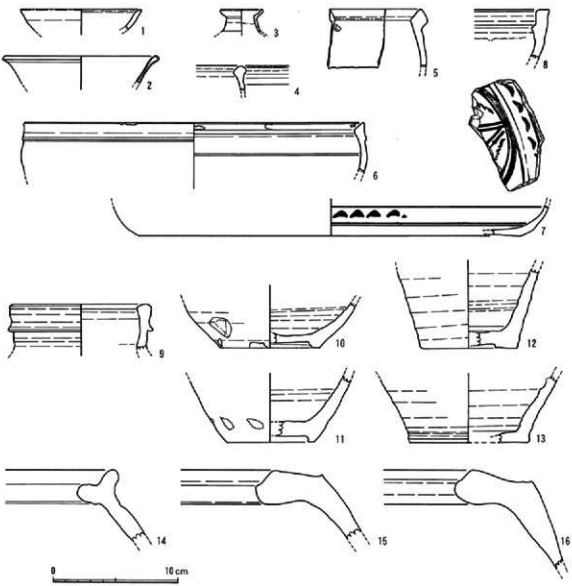


Fig. 109　309号遺構出土遺物実測図（1/3）

（4）溝状遺構

012号遺構

第1面で検出した溝である。幅40～55cm、深さ20～25cmで、北東から南西に調査区を横断する。

出土遺物をFig. 110に示す。1は、**土師器**の皿である。底部は回転糸切りされる。2・3・5・6は、**白磁**である。2は口禿皿、3は口禿碗になる。5は四耳壺、6は壺の底部である。4・7は、**青磁**の碗である。7は2片に分かれるが、同一個体である。8～13は、**陶器**である。8は黄釉の盤、9は褐釉の鉢、10は褐釉の蓋、11は無釉の壺、12は黒褐釉の鉢、13は褐釉の甕である。

13世紀後半から14世紀前半に属する溝であろう。

Ph. 99　012号遺構（南西より）

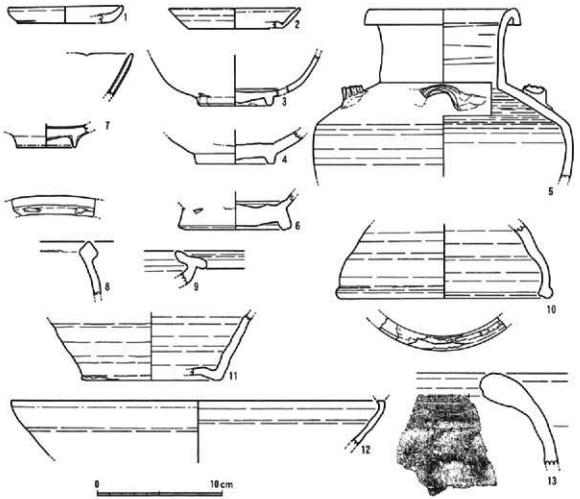


Fig.110　012号遺構出土遺物実測図（1/3）

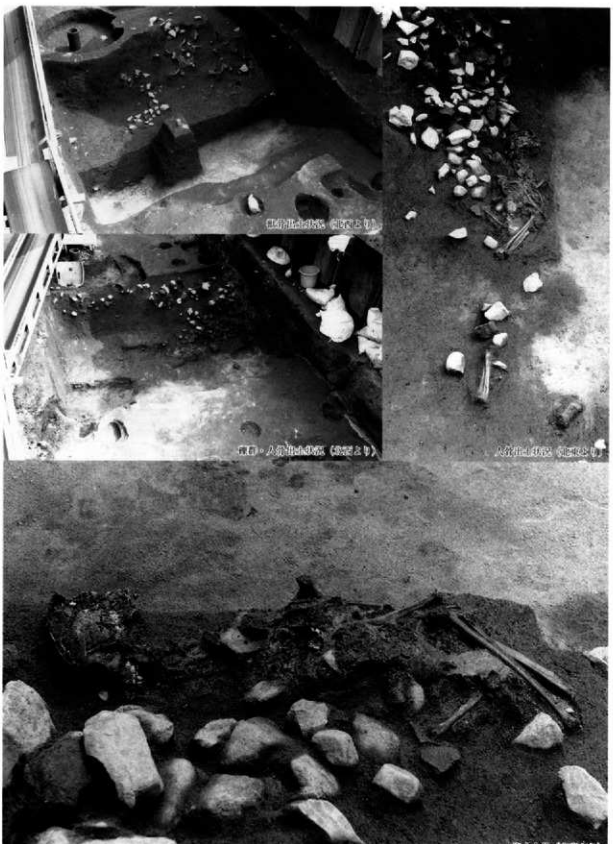
133号遺構

第２面から検出した溝である。幅240～260cm、深さ120～140cmで、調査区を南西から北東に横断している。

溝の底から、人骨が出土した。九州大学中橋孝博教授の鑑定によると、10～11歳程度の小児骨と、２歳前後の幼児骨で、小児骨の腹部あたりに幼児の頭蓋骨片が散らばっていた。

なお、人骨の配列には若干の乱れがあり、関節した部位もない。また幼児骨が頭蓋骨片のみである点など、埋まった時点ですでに白

Ph.100　133号遺構断面（北東より）



Ph. 101　133号遺構

骨化が進んでいたものと思われる。しかし、獣などに喰い散らかされた状況ではないから、露出していたものではないだろう。およそ埋葬とはいい難いが、遺体を運んで来て、溝の底に埋め込んだことは想定して良いだろう。

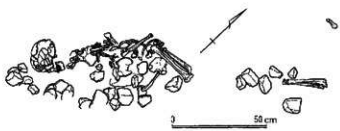


Fig. 111　133号遺構実測図（1/20）

なお、人骨の直上には、溝の南東方向から、礫が投棄されていた。しかし、この礫群によって人骨が破損した様子はみられないことから、礫の投棄と人骨の埋め込みがほぼ同時であった可能性は高いと思われる。その後、礫群の上には、さらにイルカ等の獣骨が廃棄されており、溝がごみ捨て場になりながら次第に埋まっていった様子がうかがわれる。獣骨の出土状況も、南東壁に沿って流れ込んでおり、南東側から廃棄されたことを示している。

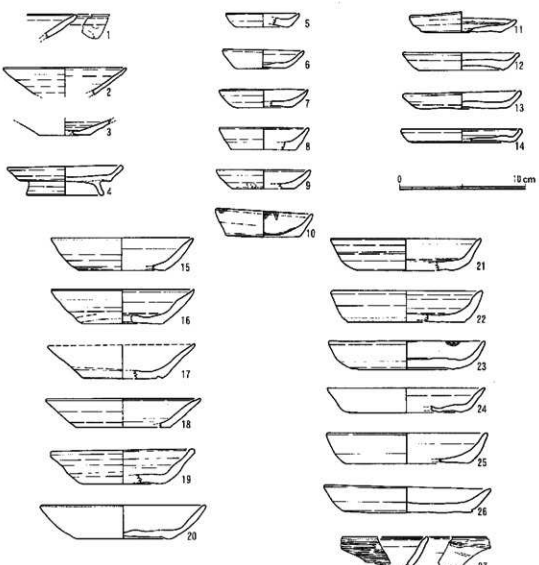


Fig. 112　133号遺構出土遺物実測図1（1/3）

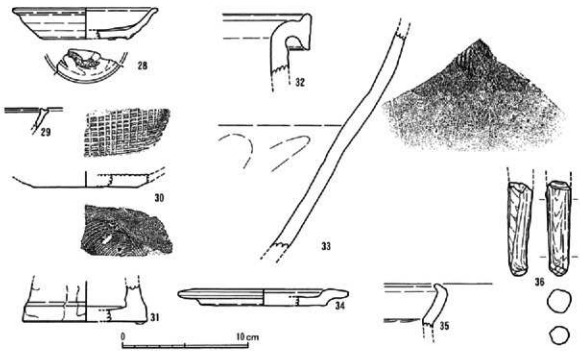


Fig. 113　133号遺構出土遺物実測図２（1/3）

出土遺物の一部を Fig. 112～122に示す。１～26は、土師器である。１は京都系土師器で、伊野分類のⅠタイプである。２・３は、口径に対して底径が極端に小さく、体部が大きく開く皿で、山口の大内氏館出土土器に類似している。４は、高台付き皿である。５～14は皿、15～26は坏で、底部は回転糸切りである。27は、楕葉型瓦器碗である。28～31は瀬戸焼きである。28は端反皿で、大窯２期の製品である。29・30は卸皿、31は瓶子である。32・33は、常滑焼きの壺である。34は、瓦質土器の落とし蓋である。35は土鍋の口縁で、脚鍋になろうか。36は、瓦質の脚で、脚鍋であろう。37～44は備前焼のすり鉢である。43が編年的に最も下る資料で、間壁Ⅴ期に属する。45・46は瓦質土器のすり鉢である。45は口縁を内側に肥厚させており、周防タイプの特徴を示す。47・48・51は土師質土器の鉢、49・50は東播系須恵器の鉢である。52～61は、瓦質土器である。52～57は湯釜、58は風炉、59～61は火鉢である。62～64は、土師質土器である。62は盤、63は火舎、64は鉢であろうか。65は瓦質土器の

Ph. 102　133号遺構出土遺物

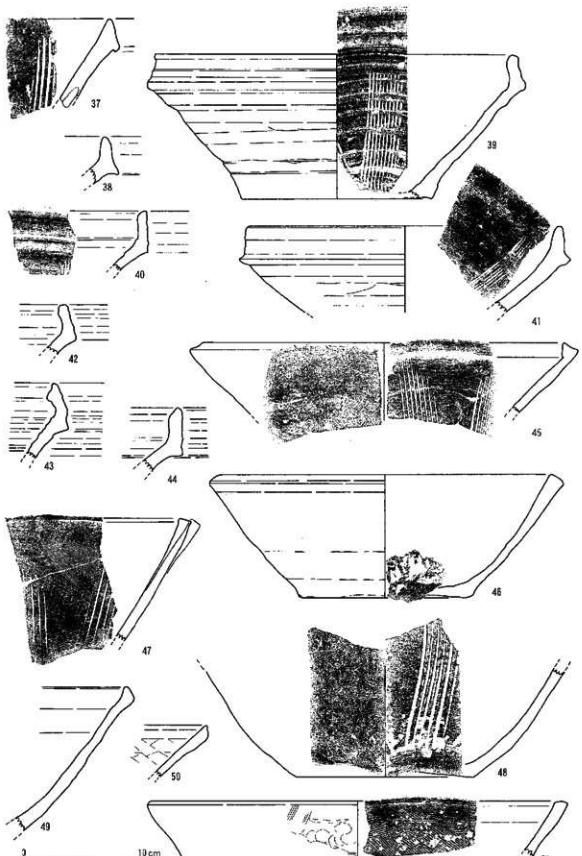


Fig. 114　133号遺構出土遺物実測図３（1/3）

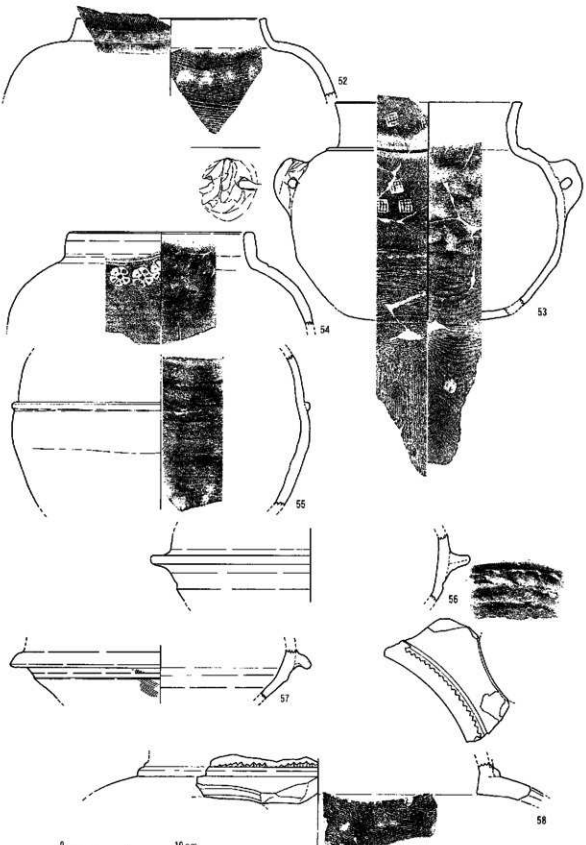


Fig.115　133号遺構出土遺物実測図 4（1/3）

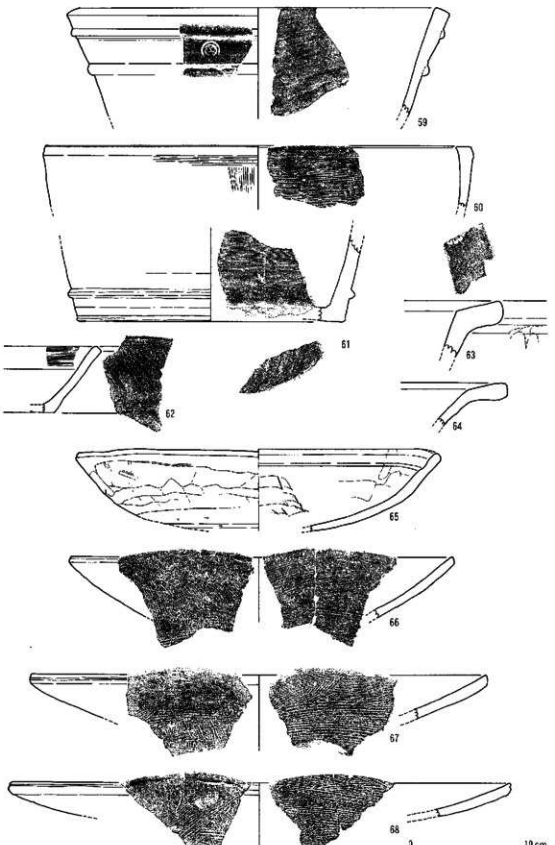


Fig.116　133号遺構出土遺物実測図5（1/3）

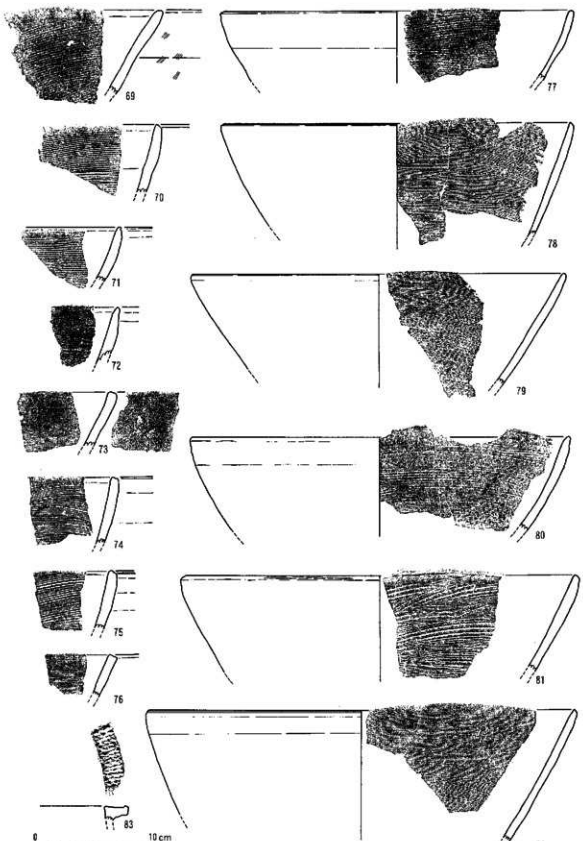


Fig. 117　133号遺構出土遺物実測図 6（1/3）

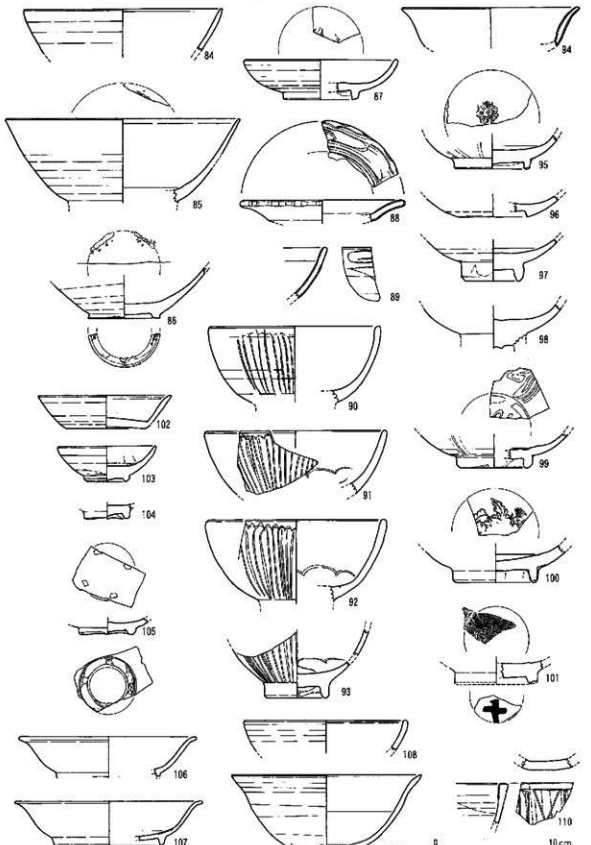
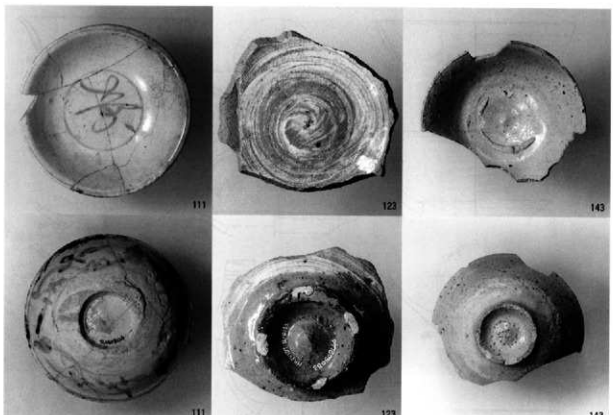


Fig. 118　133号遺構出土遺物実測図 7（1/3）



Ph. 103　133号遺構出土遺物

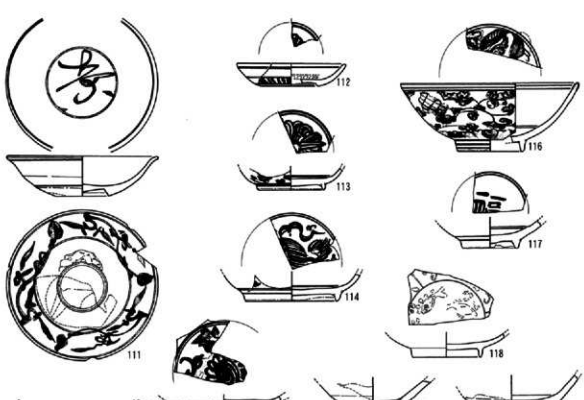


Fig. 119　133号遺構出土遺物実測図 8（1/3）

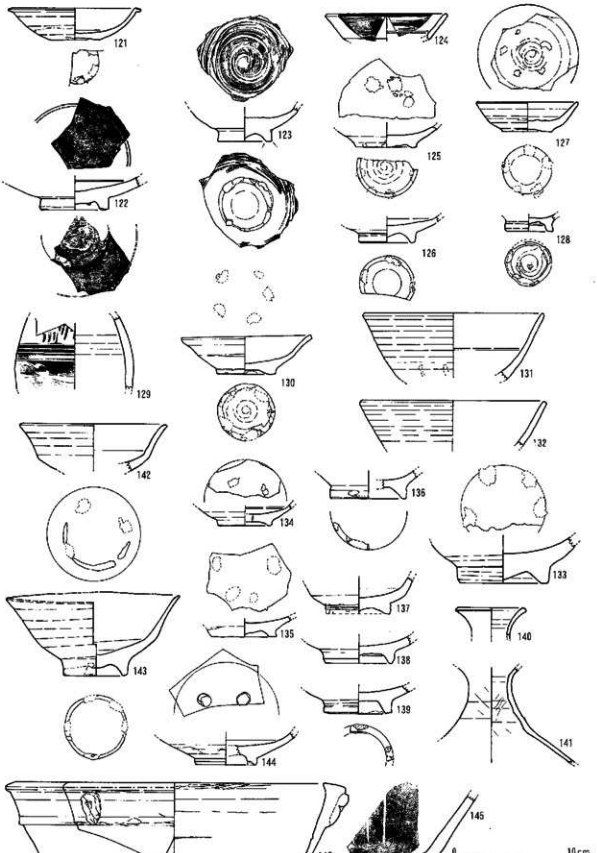


Fig. 120　133号遺構出土遺物実測図 9（1/3）

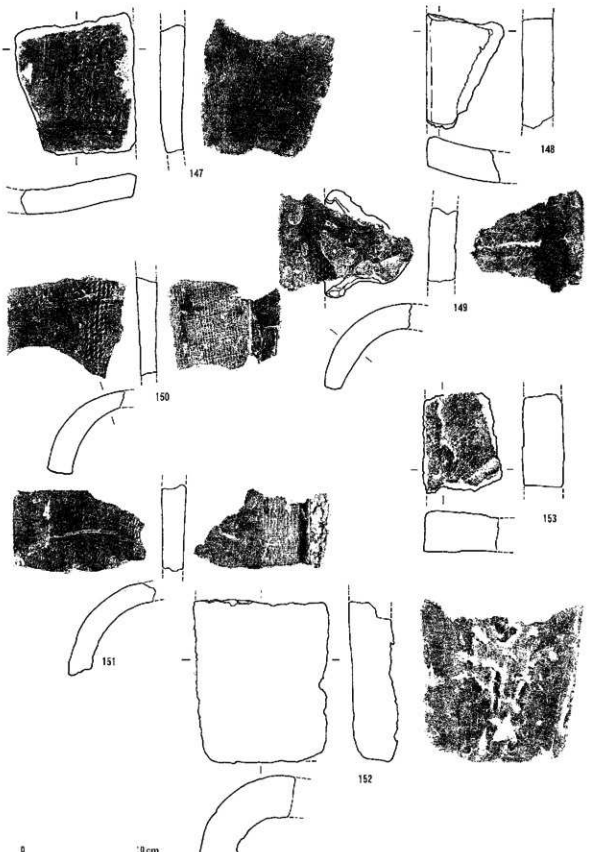


Fig. 121　133号遺構出土遺物実測図10（1/3）

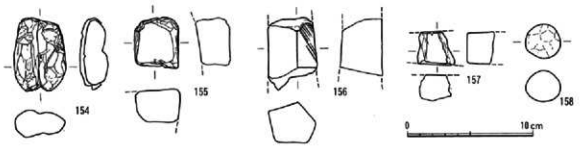


Fig.122　133号遺構出土遺物実測図11（1/3）

鍋である。66～83は**土師質土器**で、66～68は焙烙、69～83は土鍋である。

84～101は**青磁**である。84～86は、越州窯系青磁、他は龍泉窯系青磁で、101の見込みは露胎であるが、スタンプ文が見られる。102～110は**白磁**である。111～117は明代の**青花**、118は**青白磁**である。119・120は、**天目茶碗**である。121は、**高麗青磁**である。122～145は、**朝鮮王朝陶磁器**である。122は象眼青磁、123～130は粉青沙器、131～136は施釉陶器、137～139・142・143は、白磁である。140・141は舟徳利、145は褐釉すり鉢、146は褐釉の鉢である。147～152は、**瓦**である。153は、**瓦塼**である。154～158は**石製品**である。154は滑石製の**石錘**、155～157は**砥石**、158は石玉である。

これらの遺物から、16世紀後半の溝と考えられる。

Ph.104　253号・256号遺構（北西より）

253号遺構

第4面で検出した溝である。併走する2本の溝の切りあいだが、

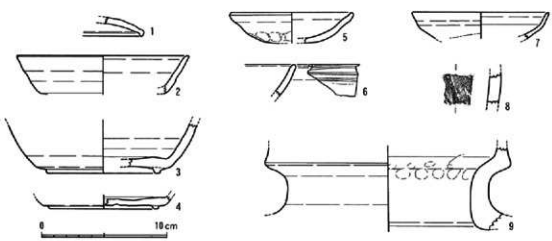


Fig.123　253号遺構出土遺物実測図（1/3）

掘り直しであろう。

出土遺物をFig.123に示す。1～4は、古代の須恵器、5は手捏ねの京都系土師器皿、6は筑前型瓦器碗、7は白磁皿、8は焼塩壺、9は土師器の壺である。

全体に古い様相を示す遺物が多く、5～7の遺物を混入と見れば、古代の溝と見ることができる。

Ph.105　256号遺構（南より）

256号遺構

第4面で検出した溝である。253号遺構を切って、南西から北東に延びる。

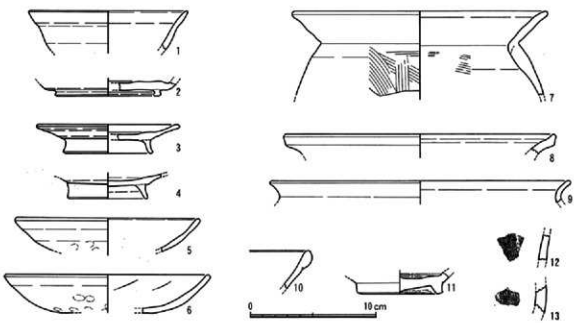


Fig.124　256号遺構出土遺物実測図（1/3）

出土遺物をFig.124に示す。1・2・8・9は須恵器である。3～7は土師器である。5・6は丸底坏で、内面はコテ当てで平滑に磨く。10・11は、白磁碗である。12・13は焼塩壺である。内面には、細かい布目がみられる。

11世紀後半の溝であろう。

（5）その他の遺構

008号遺構

第1面で検出した集石列である。幅30cm、長さ140cm以上にわたって、延びている。性格をうかがわせる手がかりはないが、集石はやや疎らであり、建物の基礎

Ph.106　008号遺構（北東より）

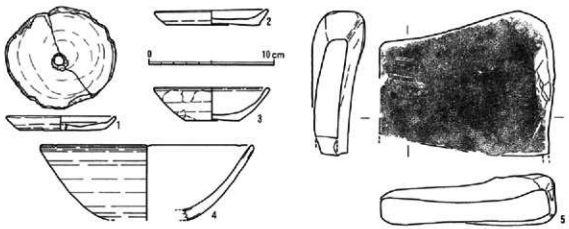


Fig.125　008号遺構出土遺物実測図（1/3）

にあたるとは考えにくい。暗渠もしくは区画溝と思われる。

出土遺物を Fig.125に示す。1・2は、**土師器**の皿である。1の口縁端部は、ほぼ全周にわたって、小さく打ち欠かれている。3は**白磁**の皿である。釉は光沢・透明感を欠いた灰色で、むしろ灰釉磁と言うべきか。口禿に作るが、白磁通有の口禿皿とは、形態も異なる。4は、**青磁**碗である。口縁端部に刻みをいれ、輪花に作る。5は、砂岩の**砥石**である。

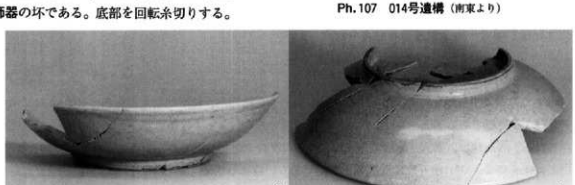
13世紀～14世紀前半を考えるのが妥当であろう。

Ph.107　014号遺構（南東より）

014号遺構

第1面で検出した一括出土遺物である。精査したが、掘り方は確認できなかった。

出土遺物を Fig.126に示す。1は、**土師器**の坏である。底部を回転糸切りする。



Ph.108　014号遺構出土遺物

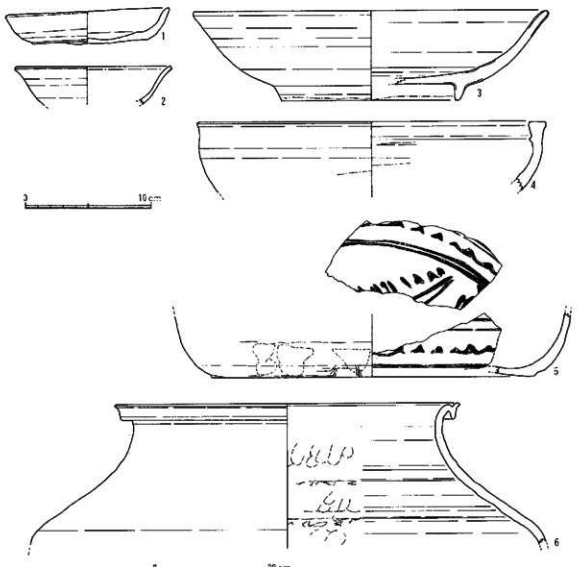


Fig.126　014号遺構出土遺物実測図（1～5…1/3，6…1/6）

2は、白磁の口禿皿である。3は、青磁の直口盤である。文様は、施されていない。4・5は陶器である。4は鉄釉を施したこね鉢、5は黄釉鉄絵盤である。6は、常滑の甕である。中野分類では、6a型式に編年される。このほか、鎬連弁文の青磁碗などが出土している。

13世紀後半頃の一括廃棄遺物と考えられる。

（6）その他の出土遺物

これまでの報告から漏れた遺構出土遺物・包含層出土遺物の内、特徴的なものをFig.127～134に示す。1・2は、須恵器である。3～5は、古代の墨書資料である。3・4は須恵器、5は土師器の底面に墨書がみられる。6～14は、搬入土師器である。8は、ロクロ土師器であるが、白色系で胎土は精良、器厚は均一で丸味を持つ。7・10・11は京都系土師器である。12は研磨碗であるが、口縁直下に沈線を巡らす。篦磨きは極めて密で、単位は捉えられない。13・14は、吉備系土師質土器である。15は、土製品である。小片のため、全体を知り得ないが、堂舎形土製品の軒先部分であろうか。16・17は緑釉陶器、18・19は

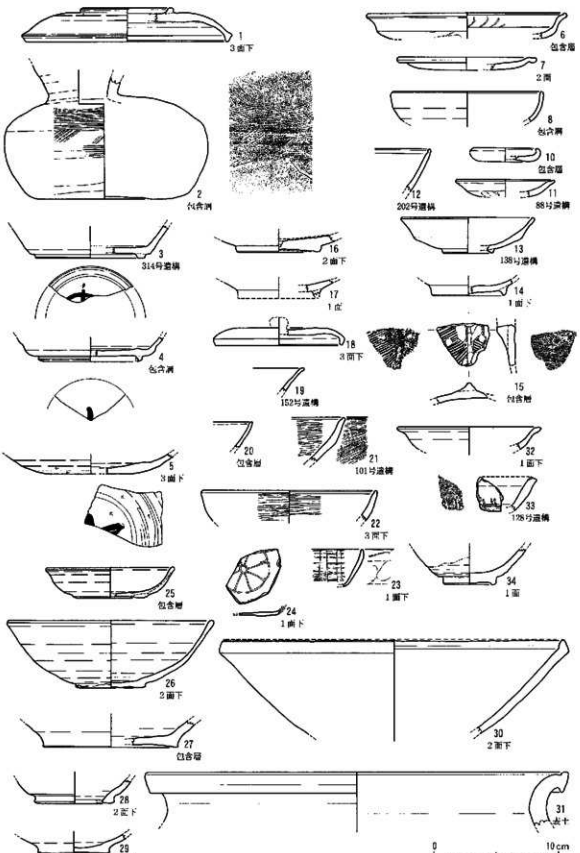


Fig. 127　その他の出土遺物実測図1（1/3）

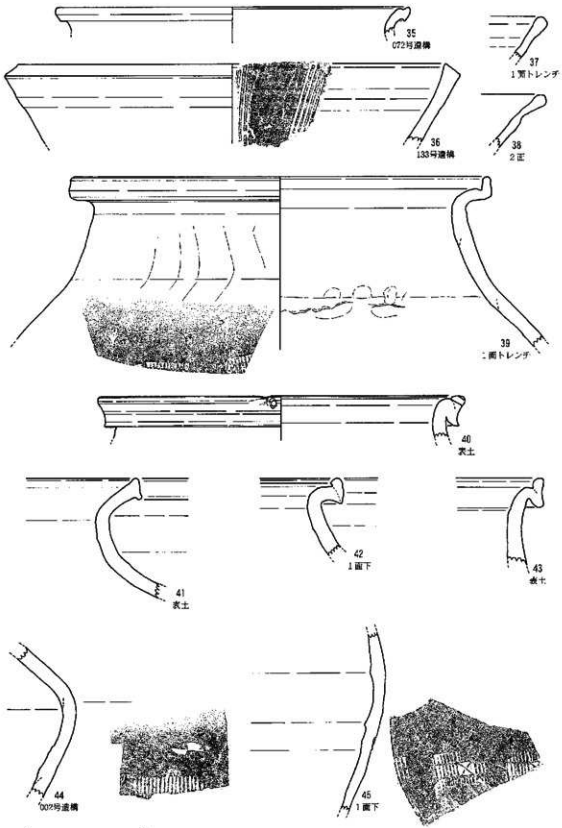


Fig. 128　その他の出土遺物実測図２（1/3）

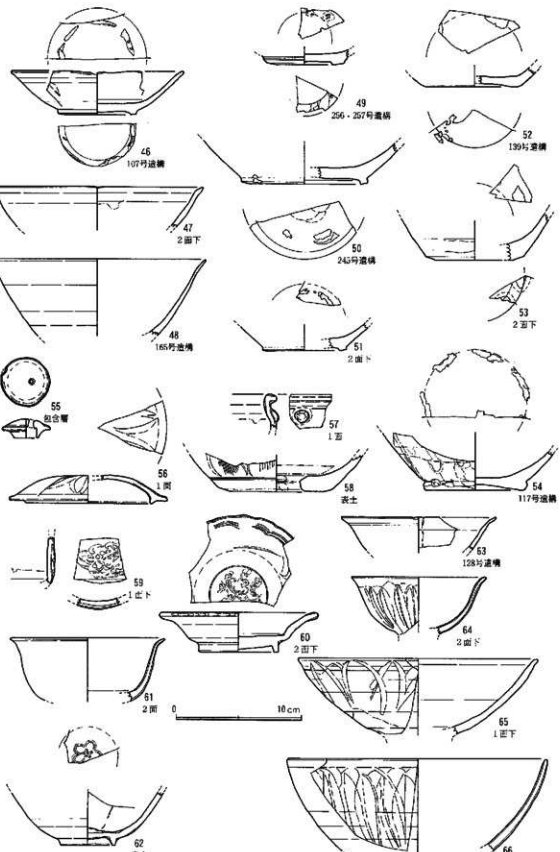


Fig. 129　その他の出土遺物実測図3（1/3）

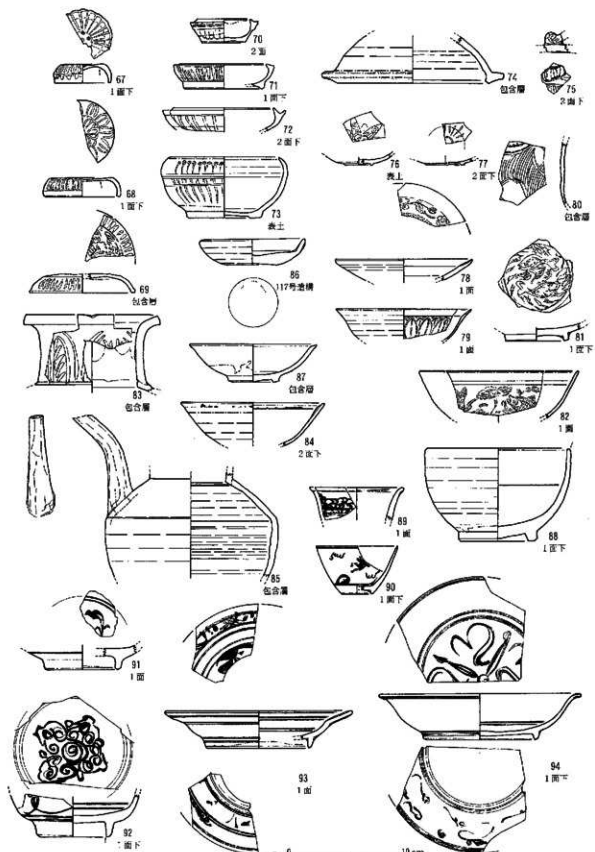
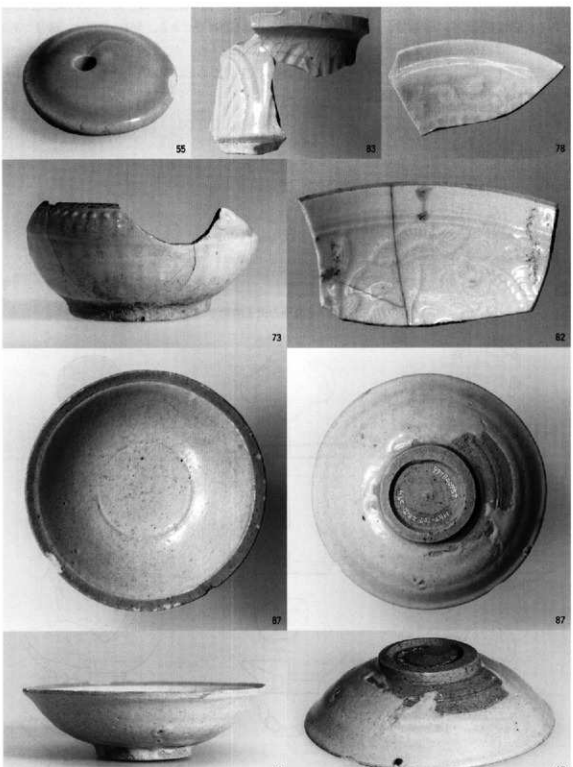


Fig. 130　その他の出土遺物実測図 4（1/3）

灰釉陶器である。16は京都、17は周防産と思われる。20～24は、搬入瓦器である。20は和泉型、他は楠葉型である。25～31は、東播系須恵器である。25～29の様な皿型、碗型の出土は、博多遺跡群では珍しい。32～34は、瀬戸の陶器である。34は瀬戸天目で、外底部には鬼板が施される。35は、瓦質土器の甕である。生産地不明。36は、備前焼のすり鉢である。37～45は、常滑焼きである。37・38は、山茶碗系



Ph. 109　その他の出土遺物 1

のこね鉢である。46～66は、青磁である。46～54は、越州窯系青磁、他は龍泉窯系青磁で、55・56は壺、57は香炉、58は双層碗である。63の小碗は、口縁端部に小さく刻みを入れて、輪花に作る。67～85は、青白磁である。74は壺、75は袋物の一部、80は梅瓶の胴部、83は広口瓶である。86～88は、白磁である。87は、口禿の高台付き皿で完形品、88は口禿の丸碗である。博多遺跡群出土の口禿碗としては、この様な丸碗形態は、非常に珍しい。89～94は明代の青花である。95～98は高麗青磁、99～103は朝鮮王朝陶磁器である。99は粉青沙器の象眼碗、100～102は施釉陶器碗、103は壺である。101の目痕は、砂目である。

104～112には、陶磁器墨書を示した。104-「廿」□、105-「め」か、106-花押、107-「十」、108-墨痕、109-「七か桐」、110-「上」、111-花押、112-「花押」である。第107次調査では、ここに示した物を含めて全部で16点の墨書陶磁器が出土している。

Pl. 110　その他の出土遺物 2

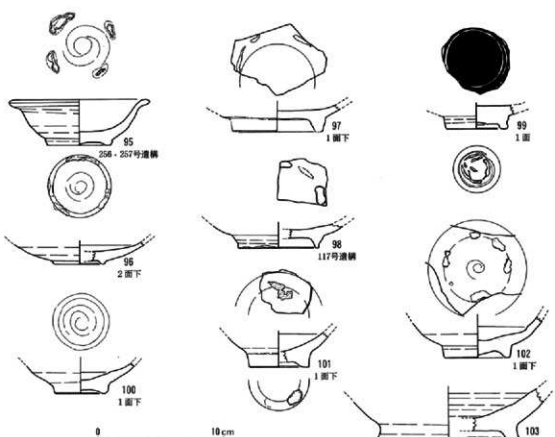
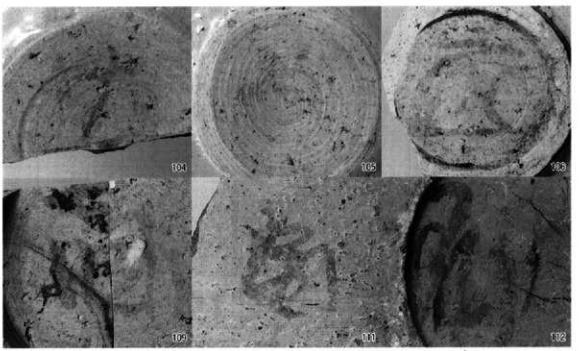


Fig. 131　その他の出土遺物実測図 5（1/3）



Ph. 111　その他の出土遺物 3

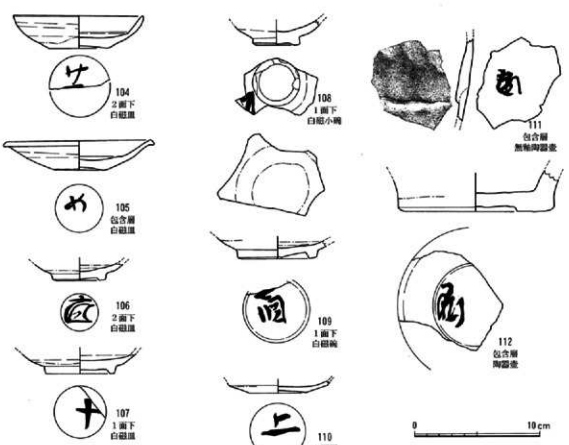


Fig. 132　その他の出土遺物実測図 6（1/3）

Fig.133・134、表3、表4には、第107次調査で出土した銅銭を示した。出土総数は62枚で、約3分の1の23枚が、錆のため解読できなかった。第3面からの出土で遺構にはともなっていないが、皇朝十二銭のひとつである「万年通宝」が出土していることに、注目しておきたい。

表3　第107次調査出土銅銭一覧

銭貨名	初鋳年	王朝名	年号	枚数
開元通寶	621	唐	武徳4年	1
萬年通寶	760	(奈良)	天平寶字4年	1
太平通寶	976	北宋	太平興国元年	1
咸平元寶	998	北宋	咸平元年	1
祥符元寶	1009	北宋	大中祥符元年	4
天禧通寶	1017	北宋	天禧元年	2
天聖元寶	1023	北宋	天聖元年	1
景祐元寶	1034	北宋	景祐元年	1
皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	6
嘉祐元寶	1056	北宋	嘉祐元年	2
熙寧元寶	1068	北宋	熙寧元年	3
元豊通寶	1078	北宋	元豊元年	3
元祐通寶	1086	北宋	元祐元年	7
紹聖元寶	1094	北宋	紹聖元年	1
元符通寶	1098	北宋	元符元年	1
大観通寶	1107	北宋	大観元年	1
永楽通寶	1408	明	永楽6年	1
寛永通寶	1636	(江戸)	寛永13年	2
解読不能				23
総数				62

表4　出土遺構別銅銭一覧

遺構番号	銭貨名	初鋳年	王朝名	径(cm)	備考
1面-007	祥符元寶	1009	北宋	2.51	5枚錆着の1
1面-007	元祐通寶	1086	北宋	2.39	5枚錆着の2
1面-007	元祐通寶	1086	北宋	2.4	5枚錆着の3
1面-007	祥符元寶	1009	北宋	2.54	5枚錆着の4
1面-007	大観通寶	1107	北宋	2.52	5枚錆着の5
1面-009	熙寧元寶	1068	北宋	2.46	穿孔

Fig.133　出土銅銭拓本1（1/1）

遺構番号	銭貨名	初鋳年	王朝名	径(cm)	備考
1西-022	(　)宋(　)□				1/3強残
1西-022	(　)豊通(　)	1078	北宋		1/2残　元豊通寶か
1由-027	皇宋通寶	1038	北宋	2.43	背面輪・郭なし
1面-027	祥符元寶	1009	北宋	2.51	
1至-027	天聖(　)(　)	1023	北宋		1/2強残　天聖元寶か
1面-027	解読不能			2.64	錆激しい
1面-027	解読不能				2枚付
1面-027B	解読不能				1/2残　薄くもろい
2面-072	祥(　)元寶	1009	北宋		祥符元寶
2面-072	皇宋通寶	1038	北宋	2.45	粗悪
2西-□7	解読不能				細片
2面-133	元豊通寶	1078	北宋	2.43	錆激しい
2面-133	元祐通寶	1086	北宋		3/4残　もろい
2西-133	天禧通寶	1017	北宋	2.42	
2面-133	天祐通寶	1086	北宋	2.51	
2面-133	皇宋通寶	1038	北宋	2.48	
2西-133	太平通寶	976	北宋	2.37	背面の輪なし　薄い
2面-138	元祐通寶	1086	北宋	2.44	赤味
2面-138	熙寧元寶	1068	北宋	2.41	背面輪・郭なし
2面-138	元祐通寶	1086	北宋		粗悪
2西-138	解読不能				1/2残　錆激しい

□は判読不能、(　)は欠字

3面
萬年通寶

2面-133-カベ崩落土
太平通寶

1面下掘り下げ
天禧通寶

1面-027
皇栄通寶

2面カクラン
皇栄通寶

1面下掘り下げ
元祐通寶

1面下掘り下げ
元符通寶

Fig.134　出土銅銭拓本2（1/1）